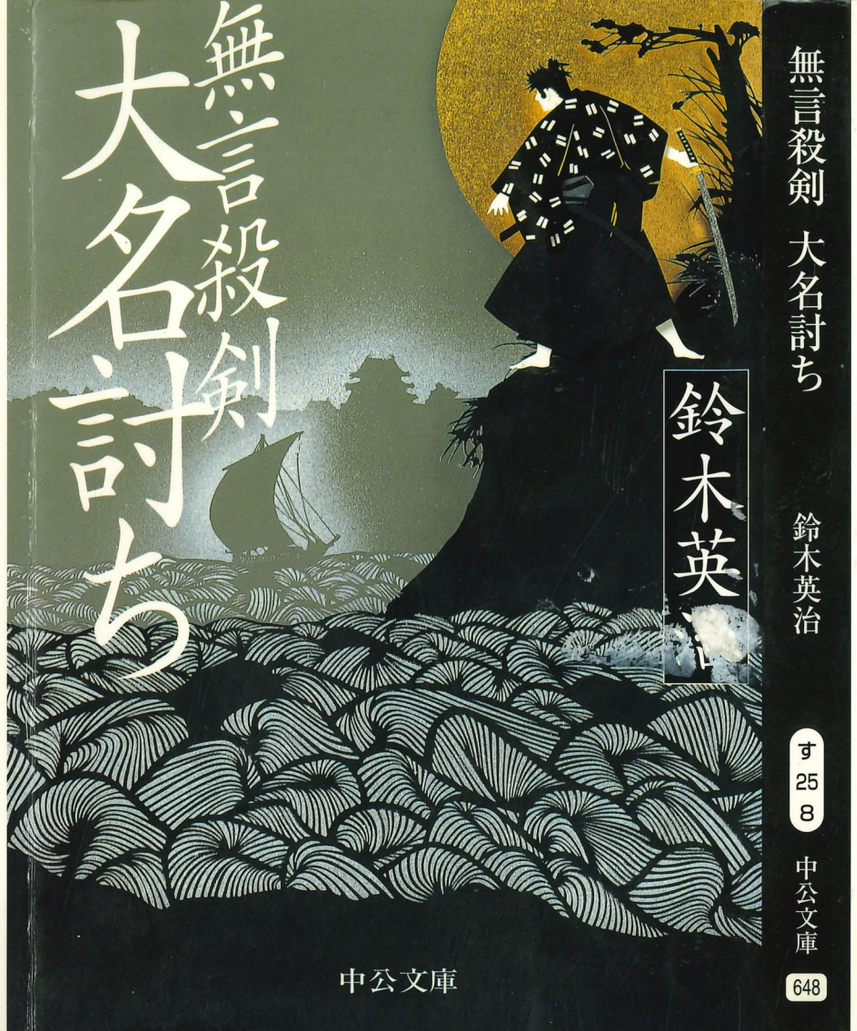
無言殺剣 大名討ち

鈴木英治

中公文庫



無言殺剣 大名討ち

鈴木英治

す25 8

中公文庫

648

9784122046139

1921193006480

ISBN4-12-204613-0

C1193 ¥648E

定価 本体648円＋税

譜代大名・土井家の城下、古河の町に現れた謎の浪人。剣の腕は無類だが、一言も口をきくことがない。その男のもとに、恐るべき殺しの依頼がもたらされる。殺しの標的は、古河領と境界を接する関宿・久世家の当主。老中の座をめぐって土井家と争う大名だった。書き下ろしシリーズ第一弾。

鈴木英治著（中公文庫）

手習重兵衛　闇討ち斬
手習重兵衛　梵鐘
手習重兵衛　暁闇
手習重兵衛　刃舞
手習重兵衛　道中霧
手習重兵衛　天狗変
角右衛門の恋
無言殺剣　大名討ち

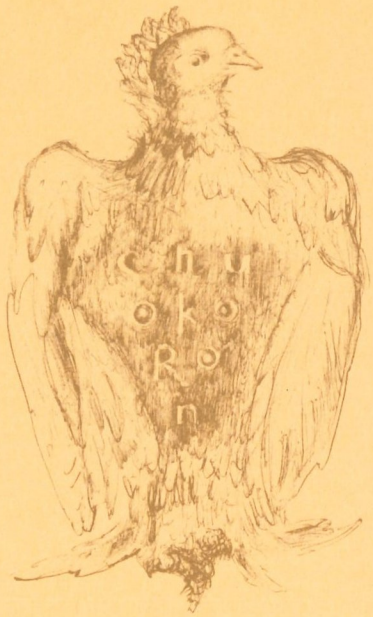
カバー　百鬼丸

撮影／鈴木正弘

著者紹介

鈴木英治（すずきえいじ）

一九六〇年静岡県沼津市生まれ。明治大学経営学部卒業。九九年第一回角川春樹小説賞特別賞を『駿府に吹く風』（刊行時『義元謀殺』に改題）で受賞。主な著書に、『血の城』『飢狼の剣』『闇の剣』『半九郎残影剣』『水斬の剣』『父子十手捕物日記』『口入屋用心棒　逃げ水の坂』がある。



無言殺剣 大名討ち

鈴木英治

中央公論新社

無言殺剣 大名討ち

鈴木英治

中公文庫

中公文庫

無言殺剣 大名討ち

鈴木英治

中央公論新社

目次

第一章 7
第二章 80
第三章 171
第四章 249

無言殺剣 大名討ち

第一章

一

ぎし、と鳴った。

床几から土井大炊頭利直が身を乗りだす。

拳をかたく握り締めている。できることなら、大声で叫びたそうな顔だ。

視線の先にあるのは、木刀を正眼に構えている侍。土井家剣術指南役の笹田八之丞だ。

笹田は左から射しこむ低い日を浴びている。

勝負がはじまってからまだ風が二、三度吹き渡ったにすぎないのに、襷がけをしている笹田の着物の脇の下のあたりが、水がしみだしたように濡れていた。目が、まぶしいものでも見るかのように細められている。

利直の着物にも汗が貼りついている。額からもしたたり落ちてゆく。利直が手ふきを取りだし、顔をそっとぬぐった。

笹田のがっしりした体から、殺気が発されている。
その気迫を感じ取り、利直が満足げな笑みを漏らす。
笹田と対しているのは横山佐十郎という男。
笹田とは異なり、柳のようにほっそりしている。笹田の木刀をまともに受ければ、死はまぬがれまい。
ただ、笹田はこれまでただの一度も木刀を振りおろしていない。笹田の得意は上段からの打ちこみだ。どころか、笹田は足を踏みこもうとさえしない。
見ようによっては、気圧されているように思える。
いや、八之丞に限ってそのようなことはないはず。利直の表情には、笹田に対する揺るぎのない信頼がある。
八万石の土井家中でも、笹田にかなう相手は一人としていない。
同じ譜代大名といっても、相手の久世家は五万八千石でしかない。はっきりいって格下だ。
そこの剣術指南役に、笹田が負けるわけがないのだ。
利直が斜めうしろを控えめに見た。
ほんの半間ほどのところに将軍がいる。将軍は床几に腰かけているが、顎を突きだし気味に瞳を凝らしていた。
将軍の向こう隣には、老中の小笠原右京大夫忠親が腰をおろしている。
やはり忠親は噂通り、顔色が悪い。背もずいぶん丸まっているし、ちょんまげも小さく

なってしまっている。床几に座る際も、介添えを必要としていた。病をおして、この試合にやってきているのは明らかだ。
ご老中も長くはないな。利直が心中、ほくそえむ。もう一度確認するように忠親に視線を当てた。
ぎくりとした。老中の向こう側に座っている久世大和守豊広と、まともに目が合ったからだ。
豊広の表情には少し余裕がある。
利直の顔に戸惑いの色が浮かぶ。どうしてそんな顔をしていられるのか。なぜそんな余裕を持って見ていられるのか。
しかも汗一つかいていない。
豊広が笑いかけてきたように感じ、利直があわてて試合場に目を戻す。
ここは小笠原家の上屋敷だ。御殿にある将軍御成りの間の前庭に幔幕が張りめぐらされ、試合場になっている。
穏やかな春風が吹き渡り、二人の剣士の裾をばたばたと払ってゆく。
御殿の回廊には小笠原家、土井家、久世家の家臣たちがずらりと居並んでいる。
将軍のそばは、書院番や使番などの番衆が警護をかためていた。
右手の木立から小鳥のさえずりがきこえてくるが、大勢の人におびえたか、試合場のほうには近寄ってこない。二人の剣士の気迫に圧されたのかもしれない。

利直が唾を飲んだ。自分が勝負の場に立っているかのように、喉が渇いて仕方ないのだ。
二人の剣士も同様だろう。将軍の御前試合。主家の名誉を背負いきれないほどに背負っている。決して負けられない一戦だ。
将軍が、次の瞬間にでも勝負が決するかのように身を乗りださせた。
「動かんの」
しばらくしてから、そうつぶやいた。少し苛立っている。
かといって、行司が力士をせかすように審判役が声をあげるわけにはいかない。
こほん、と豊広がかすかな咳払いをした。静寂を破って、その音は庭に響き渡った。
「失礼いたしました」
豊広が将軍に頭を下げる。
「かまわぬ」
将軍が鷹揚に答えた。
その咳払いを合図にしたかのように、横山佐十郎の体に力が満ちはじめた。
それは、剣術の心得がない者の目にもはっきりわかるだけの力強さがあった。
大気が重みを増す。まるで目に見えない天井が下がってきたかのようだ。
横山が一歩、前に出た。笹田が、斬撃でも避けるかのようにあわててあとじさる。
二人の剣士に踏みつけられた試合場の土が、じりと音をあげる。
横山が進み、笹田が下がる。それが何度か繰り返された。

最後に、笹田は幔幕に背中がつきそうなところまで下がった。
なにをしておる。利直が怒鳴りつけたそうにしたが、そばに将軍がいる。なんとか口中で押し殺した。
「行け」
豊広が小声で命ずる。
ささやくようなものだったが、声が風に飛ばされるようなことはなかった。
横山がかすかなうなずきを見せる。獲物をとらえに行く鷲のように瞳が光を帯びた。
木刀を振りかぶるように上段にあげた。誰の目にも、怪鳥が大きく羽を広げたように見えた。
笹田はかたまっている。飛びかからんとしている鷲に気づき、なすすべもなく身を縮こまらせているうさぎも同様だ。
横山が小さく踏みだした。木刀が袈裟に振りおろされる。風を切る音すらしない、しなやかな斬撃だ。
笹田があっ、と声をあげ、かろうじてはね返す。逆袈裟もなんとか払い落とした。袈裟に振りおろされた木刀も弾きあげた。
だが、笹田の抵抗もそこまでだった。
横山の狙いは、笹田の意識を上にあげることだった。地を這うような位置から振りあげられた木刀を、笹田は受けられなかった。

それでも、上に跳ぶことでかわそうとしたが間に合わず、横山の木刀は笹田の膝を強烈に打った。

枝が折れるような鈍い音。左足一本でかろうじて笹田は立っている。顔は苦悶に満ちていた。

容赦することなく横山は袈裟に木刀を落としていった。

笹田はまったく動こうとしない。なんとか木刀で受けとめようとしたが、その前にびしっ、という音があたりに響き渡っていた。

横山がすっと元の位置に戻る。すでに木刀を正眼に構えている。

ああ。嘆声を天に放った笹田は身をよじり、木刀を土の上に取り落とした。

力尽きたように片膝をついたが、ぐらりと体を傾けると横に倒れこんだ。右手で左肩を押さえている。

「勝負あり」

審判役をつとめていた老旗本が手をあげる。

あまりのすさまじさに、誰もが呆然として声が出ない。

利直は床几に尻を預けたまま、身じろぎ一つしない。今、目の前で起きたことが信じられない顔だ。

豊広が床几から立ちあがった。よくやった、といわんばかりに何度もうなずく。満面の笑みで横山を見つめていた。

「すごい腕だの」

ほっと息を吐きだした将軍が、満足しきった口調で豊広に話しかけた。

「ありがとうございます」

余裕の表情で豊広が礼を述べる。

「横山佐十郎と申したか。覚えておこう」

「ありがたきお言葉。横山も喜びましょう」

笹田が立ちあがろうともがき、身もだえている。一度は上体を起こしたが、つっかえ棒がはずれたように体を横たえさせた。

「大炊頭」

将軍から声が発される。

「はっ」

額から噴きだしてきた汗が、ぽたりとしずくとなって落ちていった。

「これはまた、えらい男を指南役に据えていたものよの」

申しわけございません。利直が口のなかでつぶやく。

将軍が立ちあがった。御殿の奥にさっさと引っこんでゆく。

しばらく利直は呆然と笹田を眺めていた。やがて気づいたように右手を見やり、力なく手を振った。

居並ぶ家臣たちから、二人の者が笹田のもとに駆けつけた。

二人の家臣に両脇を抱きかかえられるようにして、笹田が場外へと引きずられてゆく。膝を砕かれていた。二度とまともに歩くことはできまい。
左肩も折れている。二度と剣を振るうことはできまい。
上に持ちあげられた幔幕は、笹田の体が運び去られると同時にさっとおろされた。
そこにはただ、日に照らされた幔幕が白く残っているのみだった。

二

「丁半こまそろいました」
この響きのいい声をきくと、伊之助は心躍るものを覚える。
目の前で繰り広げられている勝負に、誰もが熱心だ。客は全部で二十人ほど。伊之助が顔を見知っている遊び人が多く、あとは商人、僧侶などだ。
侍はほとんどいない。今宵、姿を見せているのは浪人が一人。はじめて見る顔だ。
勝負に熱中してる僧侶を見て、伊之助は苦笑した。
ここ参究寺の住職だ。信純はせっかく一家から寺銭をもらっているのに、いつも賭場で吐きだしてしまっている。
せまい本堂には、客から発される熱気が渦巻いている。ろうそくが全部で十本ほど置かれ、本堂内は夕闇くらいの明るさがかろうじて保たれていた。

「勝負」
壺があげられた瞬間、さいころに火がつくのでは、と思えるほどの目を客の誰もがする。
そのあとの歓声と嘆声。
誰もが、勝ったり負けたりを繰り返している。勝ったばかりの者は次も勝とうと勘を研ぎ澄ませ、負けた者はなんとか挽回しようと必死の瞳で壺振りの手元を見つめる。
そういう者がそろうなか、一人勝ち続けている者がいた。はじめてやってきた浪人だが、目の前にこまがうずたかく積みあげられているのだ。
しかし浪人とは珍しい。浪人というのは、江戸に住まう者がほとんどで、下総のはずれの古河まで流れてくる者など滅多にいないはずなのだが。
いや、そうでもないかもしれない。関八州は幕府領と大名領が入り組んでいて、江戸で罪を犯した者が逃げこみやすくなっているのだ。
あの浪人も、そういう類の者かもしれなかった。
浪人の背が高いことに気づいた。あぐらをかいているのだが、ほかの者にくらべ、頭一つ抜けたところに顔がある。
その顔にはどこか陰が感じられた。なにがあんな陰をつくらせているのか。
目だ。やや細い目はつり気味だが、そこに暗い輝きがある。それが陰となって顔全体にあらわれているようだ。
ただ、そういうものを抜きにしても浪人は精悍な面つきをしていた。鼻が高く、唇は薄

い。顎はがっしりとしている。
体は細身だが、着物に隠された筋骨はいかにも隆々としていそうだ。
着ている物は上等とはいいがたい。垢じみているとまではいわないが、埃にまみれている感じがする。旅塵かもしれない。
「丁方ないか、丁方ないか」
壺振りの脇についた長次が必死に声を張りあげている。
その浪人が半に賭けているので、それに乗ろうとする者ばかりで、こまがそろわないのだ。さっきの勝負は浪人に対抗しようとした者がいたためになんとか成り立ったが、今回は無理かもしれない。
「丁方ないか、丁方」
長次の隣にいる半吉も、高い声をだしはじめた。苛立っている。
再三の催促の末、さっき負けた客がまた浪人の逆に張ったことで、ようやくつり合いが取れた。
「丁半、こまそろいました」
さっと壺があげられる。
「四六の半」
浪人にたてついた男が、がっくりする。なんだよ、と力なくつぶやいた。
浪人のもとにこまが集まった。

浪人が五枚のこまを白い敷物の上に放った。賭場に対する祝儀だ。
「終えるんですかい」
浪人の隣の遊び人がきく。浪人は答えず、こまを抱えて立ちあがった。
「なんだよ、これから一緒に儲けさせてもらおうと思ったのに」
何人かがそれにうなずく。
浪人は無視し、帳場で金に換えた。全部で五両ほどか。一晩の稼ぎとしては十分すぎるほどだろう。
伊之助は立ち、浪人に近づいた。
「あの」
浪人が底光りする瞳でにらみつけてきた。伊之助は、鉛でも流しこまれたように体がかたまった。言葉を失う。
鋭い一瞥をくれると、浪人は賭場に入る前に預けてあった大小を受け取りに向かった。
そのときだった。ばたん、と板戸が外からこちら側に倒れた。
なんだ、と伊之助が見ると、抜き身を手にした三人の侍が飛びこんできた。ろうそくの淡い光でも、目が血走っているのがわかる。
一人が帳場に駆け寄った。
「金をだせ」
帳場をまかされている辰三に刀を突きつける。辰三は呆然としている。

「はやくしろ」
侍が声を荒げる。
侍といっても三人ともさっきの浪人と一緒で、着物は薄汚れ、垢でてかてかしている。
「賭場荒らしだ」
なにが起きたかさとった一家の誰かが叫び、他の者たちがいっせいに立ちあがって匕首を抜いた。
「田山の旦那、頼みます」
長次が用心棒を呼ぶ。
賭場の隅の柱にもたれかかって居眠りをしていた田山磯兵衛が、うん、と目をあけた。なにが起きたのか、まるでわかっていない。
「旦那、はやく」
磯兵衛はのろのろと立ちあがった。いまだに眠そうで、ゆっくりと刀を腰に差そうとしている。
賊の一人が、磯兵衛の前に立ちはだかった。
「刀を捨てろ」
抜き身を首筋に突きつけられて、磯兵衛はひっと女のような声をあげた。あわてて刀を放る。
「いい子だ」

いいざま賊が刀を振りおろした。ずん、と鈍い音がし、磯兵衛が首筋から血を流しながら床に倒れこんだ。
うわっ。まわりにいた客たちから悲鳴があがる。泡を食って外に出ようとしたが、賊の一人が刀を振りまわして、そこにいるように命じた。
田山磯兵衛はもがき苦しんでいる。人からそれだけ多くの血が出るということを、伊之助ははじめて知った。
まさに血の海だ。磯兵衛は血を体に巻きつけるようにのたうちまわっている。
やがて体の動きがとまり、首を落として絶命した。ひゅう、という音が最後にきこえた。
ひどく残酷な場面を目にしたはずなのに、しかもはじめて人の死というのを目の当たりにしたというのに、伊之助の心は妙に落ち着いていた。
磯兵衛の死は見せしめとして強烈だった。誰もが息を飲み、動きをとめてしまっている。
「金をだせ」
賊の一人があらためて辰三にいった。辰三がこちらを見る。
伊之助はどうすればいいかわからなかった。すぐ横に一家の一人である岩八もいるが、ただおろおろしている。
「おまえも用心棒のようになりたいのか」
辰三が刀で脅された。伊之助は辰三にうなずきかけた。
辰三が金箱を前に押しだす。少なく見積もっても、五十両以上は入っている。

その金を、用意してきた巾着袋に賊が流しこんだ。満足げな笑みを漏らす。

かかしのようにやせこけた三人だ。いずれも覆面や頭巾の類はしていない。あらわになっている顔は、目が鋭い割にどこか膜がかかっているような感じで、人としての感情をとうに失ってしまっているように見えた。

巾着袋を懐にしまい入れた賊が帳場を離れる。これで賭場を出てゆくのかと思ったが、三人の賊は客に向かって金目の物をだすように要求した。

客たちは、財布や巾着を次々に差しだしてゆく。

賊の一人が先ほどの浪人のもとにも行った。浪人はまだ丸腰だ。

「金をだしな」

賊が刀を胸に突きつける。

つと浪人の腕が動いた。刀を横に払うようにすると、拳が賊の懐に突っこまれた。

伊之助に見えたのはそこまでで、次の瞬間、賊は床に叩きつけられていた。

「きさまっ」

二人の賊が刀を振りかざして突進する。袈裟に振りおろされた刀をかわすや、浪人は一人の賊の腹に拳を突き入れた。

うぐっ、という声を残し、賊が床に両膝をつく。

もう一人が刀を横に振り抜いた。斬られる、と伊之助は目を閉じかけたが、浪人は足さばきだけで避け、賊の横に出た。

浪人の姿を見失った賊が顔を向けようとしたのを見らうようにして、首筋に手刀を浴びせた。

変な形で首を揺らした賊が、床にうつぶせに倒れこむ。手が床を叩いた弾みで刀が離れ、音を立てて床を転がった。

浪人は形ばかりに裾を払い、ふっと息を吐いた。三人の賊は床の上で身動き一つしない。

あまりの強さに、伊之助は息のとまる思いだった。こんなに強い人がこの世にいるなど、信じられなかった。

すげえ。隣で岩八も声を失っている。

この人みたいになりたい。伊之助は瞬時に憧れを抱いた。

「誰か、お寺社のもとに走りな」

伊之助は声を張りあげた。

「わかりやした」

長次が一礼して賭場を出ていった。

「三人を縛りあげな」

おう、と声を合わせた一家の者たちが奥から縄を持ってきた。ぐるぐる巻きにしながら、賊の顔を殴りつけたり、足蹴にしたりするのを忘れない。

「旦那、お強いですねえ」

伊之助は思わず浪人に寄っていた。

「ほれぼれしましたよ」
しかし浪人はなにもいわない。冷たい目で、伊之助を見ているだけだ。
「これは失礼いたしました」
伊之助は名乗り、小腰をかがめた。
「どうか、一つお見知り置きのほどを。あっしはこの賭場の仕切りをまかされているわけじゃないんですけど、どういうわけかそういうことになっているんです」
「親分のご三男ですから」
横から帳場にいた辰三が口をはさむ。それでも浪人はなにもいわない。
浪人がちらりと瞳を動かす。その視線の先を知って、伊之助は、失礼いたしました、といった。
「お腰のものだ。はやくお渡しし な」
浪人に大小は戻された。
「ありがとうございました」
伊之助は浪人にあらためて礼をいった。
「おかげで助かりました」
浪人は無表情のままだ。まるで伊之助の声がきこえていないかのようだ。
一本のろうそくが、じじじ、と黒い煙を四、五回くゆらせた頃、蹴倒された板戸のところから、どやどやと役人たちが入ってきた。侍が二名に、配下の小者が十名ほど。長次が先頭

にいる。
「こいつらです」
長次が指さす。縛めをされた三人の賊は隅の柱のところに座らされている。すでに三人とも目を覚ましていた。
役人の一人が引っ立てろ、といった。小者たちによって賊が立ちあがらされる。口々に怨嗟の声を吐きながら、三人の賊は本堂の外に連れだされた。
最後に残った役人は、かなり歳のいった者だ。物腰に落ち着きが感じられた。鬢のところがかなり白い。
「村上さま、ありがとうございました」
伊之助はていねいに頭を下げた。
「災難だったな」
磯兵衛の死骸に目を向ける。
「やられたのは用心棒だけか」
「はい」
「丁重に葬ってやんな」
「承知いたしました」
村上がふと視線を動かした。浪人を見つめている。浪人に対して、ただならなさを感じたようだ。

伊之助はあわてて説明した。
「ほう、そうか。その者が賊を倒したのか」
村上が浪人に寄る。
「おぬし、名は？」
浪人は答えない。
「口がきけんのか」
それでも浪人はなにもいわない。
「まあ、よかろう」
村上はあきらめたようにいい、伊之助に顔を向けた。
「これで引きあげるがよいな」
「ご苦労さまでした」
伊之助は、辰三から渡された手ふきの包みを村上に押しつけるようにした。
「これからもよしなにお願いいたします」
村上は遠慮なく受け取り、懐に押しこんだ。ふくらんだそこをぽんぽんと叩き、満足そうな笑みを見せる。
「いつもすまんな」
軽く会釈してから、悠々とした歩みで本堂を出てゆく。ご苦労さまでした、という声がその背中にいっせいにかかった。

「ねえ、旦那」
村上の姿が見えなくなってから、伊之助は浪人に声をかけた。
「お名はなんていわれるのです」
浪人がじろりと見据えてきた。
「すみませんでした」
伊之助は控えめに目をあげた。
「あの旦那、今日どちらに泊まるか、決めてらっしゃるんですかい」
浪人は顎を指でさすっただけだ。
「もしまだ決めていらっしゃらないんでしたら、うちにいらっしゃいませんか」
伊之助は笑顔で勧めた。
「お礼もしなければいけませんし」
浪人に逆らう姿勢はうかがえなかった。
伊之助はまわりを見渡し、辰三、と呼んだ。
「田山さんを葬っておやり」
まだ田山磯兵衛は血の海に沈んだままだ。
わかりました、と辰三が手下に指示をする。
磯兵衛は江戸から流れてきた者で、身寄りはないといっていた。このまま、この寺の墓地に葬られることになるだろう。

伊之助は浪人を連れ、参究寺の外に出た。
浪人が草鞋を履いた。この浪人が、やはり旅の途上にあることを伊之助は知った。
どこかなまめかしいような風が流れている。ただ、まだ冷たさも帯びていた。
提灯を掲げた伊之助が足をとめたのは、広めの一軒家だ。大きな提灯が暖簾の脇に下がっている。それには『郡』と一家の名が入っていた。
生垣沿いに庭のほうへまわる。
家は古河の町のなかでも、かなり繁華な一角に建っている。まわりは飲み屋が多く、今もどこからか酔客の高い声や女の甘ったるい嬌声がきこえてくる。
「こちらです。どうぞ」
伊之助は格子戸をあけ、庭に入った。
「どうぞ、おあがりください」
提灯を吹き消し、目の前の障子をひらいた。そこは八畳間で、隅に置かれた行灯が淡い光を畳や壁に投げかけていた。
「おう、伊之助」
どすどすと奥から一人の男がやってきた。
「ああ、とっつあん」
父親の郡兵衛だ。一家を束ねているだけあって、がっしりした体にはたっぷりと力がつまっている感じがある。

どんぐり眼の目は常に鋭く、せがれの伊之助でさえ、にらみつけられるといまだに怖い、と思う。
伊之助は賭場でどういうことがあったか、語ろうとしたが、郡兵衛が先に手をあげて制した。
「話はきいた。辰三が使いをくれた」
郡兵衛が浪人に向かっていねいにお辞儀する。
「賭場を救ってくださったお方ですね。ありがとうございました」
浪人はかすかにうなずきを見せた。
「あの、お名はなんとおっしゃるんで」
伊之助は事情を伝えた。
「そうかい、おめえも教えてもらってねえのか。それじゃあ仕方ねえな。――では旦那、こちらにどうぞ」
名乗った郡兵衛が先に立ち、奥の座敷に浪人を連れていった。
「それにしても、ずいぶんなご活躍だったそうですねえ」
正座した郡兵衛がほめあげる。
伊之助は、浪人の代わりにその強さを口から泡を飛ばすようにして説明した。
「そうかい、そんなにお強いのか」
郡兵衛が首を落とし、畳に手をそろえる。

「旦那、どうかしばらくこの家に逗留していただけませんか。むろん、ただとは申しません」

「旦那、とっつあんは賭場の用心棒を頼んでいるんです。いかがですか」

浪人がすっくと立ち、それまで畳の上に置いていた両刀を床の間の刀架に置いた。

「ありがとうございます」

伊之助と郡兵衛は、親子そろって畳に額をつけた。

三

ぐっと爪を噛む。

「おそい、いったいなにをしておる」

土井大炊頭利直は横に控える小姓にいらいらといった。

「は、申しわけございませぬ。じきおそろいになると思われますが」

「いつだ」

「見てまいります」

平伏した小姓はすばやく立ちあがり、襖をあけて廊下に出ていった。

軽んじておるな、と利直は思った。背後の小姓が捧げるように持っている太刀を引き抜きたい衝動に駆られた。

また爪を噛んで、その衝動を抑えこむ。

あたふたと小姓が戻ってきた。

「今すぐ、まいられます」

ようやく、江戸上屋敷の主だった家臣たちが広間に集まりはじめた。

参集するよう命じてから、およそ半刻が経過していた。すでに日は陰り、ここ奥座敷にも暗さがにじみだしはじめている。

「お待たせいたしました」

江戸家老の西崎雅楽助がこうべを垂れた。他の留守居役などがそれにならう。

ただし、いずれもその表情には申しわけなさなど微塵も見えない。

利直はいらいらと家臣たちを見渡した。

西崎雅楽助が顔をあげる。

「して、なに用にございましょう」

帰国が押し迫っているこの忙しいなか、重大な用件でお呼びになったのでしょうな、と江戸家老はいいたげだ。

当たり前だ、と思い、利直は深く顎を引いた。これ以上大事な用件があるはずもない。

利直は立ちあがり、怒鳴りつけるようにいい放った。

「誰か、あの者を殺せる者はおらぬのか。首を取ってまいれ」

あの者、とは剣術指南役の笹田八之丞を半身不随にした横山佐十郎のことだ。

横山に右膝を砕かれた笹田は、歩行さえままならない。古河に帰ることもできず、ここ江戸上屋敷で療養している。

「どうだ、誰かやれる者はおらぬのか」

返ってきたのはかたい沈黙だ。家臣たちは誰もが口を閉じている。いや、それだけでなく冷ややかな顔をしている。

家臣たちの気持ちはこうだろう。どうしてこんな器の小さな者が我らの殿なのか。

利直は、ずいぶん前からそれを敏感に察している。

唇を噛み、家臣たちをにらみつけた。それで家臣たちが畏れ入るということはない。

前の殿がもうけた男子は、ただ一人のみだった。いや、ほかにも男子はいたのだが、すべて夭折した。

夭折したなかには、将来を嘱望された者もいた。

だが、つつがなく育ったのは利直一人。前の殿の男子のなかで、最も望まれない男といってよかった。血筋もいいとはいえず、母親は御殿づとめにあがった古河城下の商家の娘だった。

利直は自らの無力を感じた。殿といっても形だけで、自分ではなにもできない。

そんな利直を、憐れむような目で家臣たちが見ていた。

それに気づき、利直は昂然と顔をあげた。こんなことで負けていられなかった。

今日、利直は帰国前の最後の挨拶に千代田城に登城し、将軍に拝謁してきた。

将軍もこの前の御前試合のことには触れず、機嫌よく話しかけてくれた。そこまではよかった。

よくなかったのは、詰の間である雁之間で久世豊広と隣り合わせたことだ。

「またおやりになりたいのなら、いつでもお相手いたしますよ」

「上さまに、えらい者といわれた男が剣術指南役のご家中では、無理でしょうかな」

「もともと武門としてのお名はお高いとは申せぬご家中ですから、あの程度の者が剣術指南役というのも無理ないでしょうが」

利直はあまりの屈辱に顔をあげられなかった。この屈辱を晴らすには、横山佐十郎を討ち果たすしか手がなかった。

これまで土井家と久世家には確執の歴史があった。同じ下総で、領地が隣り合っていることがとにかく大きい。しかも同じ譜代で対抗意識が強く、さらには水運や水利の争いもたび重なっている。

その上に、幕府の老中としての地位も関わろうとしていた。

両家とも老中になるには不足のない家柄で、これまでも何人かの老中を輩出してきていた。

そして、今、小笠原忠親があのような状態で、老中の座が一つあくかもしれないのだ。いや、忠親はすでに引退を表明していた。

利直も久世豊広もその座を狙っていた。お互いに、負けられぬ、という強烈な気持ちを抱いている。

その気持ちが殿中でもあらわれ、なにかと利直と豊広は競い合っていた。

五日前の、将軍御前試合もそうだった。お互い遣い手の剣術指南役が自慢で、決してお隣には負けぬ、といい合っていたのだ。

それが将軍の耳に入り、であるなら対決させてみたらよいではないか、ということになったのである。

笹田八之丞と横山佐十郎の二人の剣術指南役は、わざわざ国元から江戸に出てきて試合を行ったのだ。

あの試合に負けたことで、老中の座がどこかに飛んでいったような気持ちに利直はなっている。

その気持ちを立て直してくれるものは、ただ一つ、横山佐十郎の首だ。

あの男の首さえ目の当たりにできれば、すべてが好転しはじめるにちがいない。心も晴れようというものだ。

だが目の前の家臣たちには、主君を喜ばせようという気づかいはこれっぽっちもないのだ。

利直はなおも言葉を続けようとしたが、徒労を感じ、黙りこんだ。

襖の向こうから利直を呼ぶ声がした。どこか切迫した様子がある。

「どうした」

襖があいた。顔を見せたのは、使番の一人だ。血相を変えている。

敷居際でもどかしげに一礼して、進み寄ってきた。そっと耳打ちする。

「なんだと」

使番に導かれて、利直は急ぎ足で廊下を歩いた。一つの座敷の前に着く。

利直は襖をひらいた。

「なんと」

言葉を失い、立ち尽くした。

暗い部屋だ。外の明るさがわずかに忍びこんできて、あぐらをかき、畳に顔をつけている笹田八之丞の姿が見えた。切腹、裃と呼ばれる浅黄色の裃を身につけているが、それがおびただしい血にどっぷりとひたっていた。

「どうして……」

言葉が続かなかった。利直は使番に目を向けた。

「決して目を離さぬよう申しつけておいたはずだぞ」

こうなることを怖れていた利直は、八之丞に自害を禁じ、その上に見張りをつけたのだ。

「申しわけございません」

使番が青い顔で平伏する。

「先ほどそれがしが厠へ行った隙に……」

利直は唇を噛み締めた。

「しかしどこから裃を持ってきたのか」

今さらどうでもいいことだったが、そんな言葉が利直の口から漏れこぼれた。

「国元から出てまいられるとき、用意されていたようです」
使番が額の汗をぬぐって説明する。
「それだけのご覚悟をもって、試合に臨まれたものと」
「そうであったか」
そのときには、先ほどまで奥の間にいた重臣たちが廊下にあふれていた。いずれの顔にも、こうなったのもくだらぬ意地を張ったからだ、と書いてあった。
家臣たちをにらみつけておいてから、利直は襖を蹴破った。
「誰ぞ、あやつを殺せる者はおらぬのか」

四

「ねえ旦那、仕事にはもう慣れましたか」
伊之助はたずねた。
しかし、壁にもたれて座っている浪人は目をつむって答えない。寝ているわけではないのは、なんとなくわかる。目は閉じているものの、賭場の気配をしっかり探っているように伊之助には思える。
「騒ぎが起きたら静めればいいだけの話ですからね、慣れるもなにもないか」
伊之助は賭場を見渡した。

今日も客は二十人ばかりだ。いつものなじみの顔ばかり。
この人たちは、いったいどうやってお足をととのえてやってくるのか。
なにか悪さでもしないと、こう毎晩賭場には来られないのでは、と伊之助などは思ってしまう。
もちろん仕事でしっかり稼いでから楽しみで来ている者がほとんどだろうが、親をだましたり、子の食い物にまわすべき金を持ってきてしまったりしている者も少なくないのではないか。
「ねえ、旦那」
返事がないのを承知で伊之助は話しかけた。
「旦那には、ご内儀はいらっしゃるんですかい。――ご兄弟は？」
伊之助は天井を見あげた。
「あっしには二人いますよ。二人とも兄ですけどね」
浪人が目をあけた。
「あっ、うるさかったですか」
浪人はじっと見ている。
これは話を進めていい、という合図では、と伊之助は判断し、言葉を紡いだ。
「今ちょっと二人して江戸に出ているんですよ。あと二月ほどしたら、帰ってくるはずです。もしその頃まで旦那が逗留されていたら、紹介しますよ」

浪人が鋭い視線を走らせた。新たな客が子分に案内されて入ってきた。
「ああ、あの人は大丈夫ですよ。宿場で旅籠をやっている人です。人を泊める商売ですからいろいろ荒事があって、それをあっしらが片づけてやっているんです」
はやっている旅籠だけあって、さすがに身につけているものは高価そうだ。玉木屋の主人の吾平はいそいそと席についた。
それを見て、浪人が目を閉じる。
「あっしは妾の子なんですよ。もっとも、やくざ者は女房を持たないんで、上の二人も同じなんですけど」
伊之助は目の前の湯飲みを口に運び、すっかり冷めた茶で喉を潤した。
「上の二人とあっしは母親がちがうんです。かといって、仲が悪いなんてことはないんですよ。二人ともとてもよくしてくれます」
伊之助は湯飲みをそっと置いた。
「二人とは、だから顔は似ていないですねえ。あっしはもうちょっといい男に生まれたかったんですけど、こんな顔に生まれついちまって。このどんぐり眼、なんとかしたいんですけどね。みんなに、親分によく似ている、といわれて喜んでいいのやら。あっしとしては、あの顔に似ているとはあまりいわれたくないんですけどねえ」
やさしかった母親のことを思いだし、伊之助は一人しんみりした。
「あっしの母ちゃんはとっくに死んじまいましたけど」

伊之助は立ちあがり、本堂内の隅で湯気をあげている鉄瓶のところへ行った。
とうに初夏といっていい時季なのに、夜はまだかなり冷える。火鉢はとてもありがたかった。
手をかざして体をあたためてから、急須に茶葉を入れ直し、湯を注ぎ入れた。二つの湯飲みを茶でたっぷりと満たしてから、もとの場所に戻る。
「旦那、どうぞ」
湯飲みの一つを床に置いた。浪人が目をあけ、腕をのばして取りあげた。
目を細めて飲んでくれた。
「おいしいですか」
浪人はただ飲み続けているだけだ。
「お茶がお好きなんですね」
伊之助は茶をずずっとやった。あちっ。思わず声が出た。口から茶があふれ、しずくが着物を濡らす。
「やっちまった」
なにかふく物を捜したが、手近には見当たらなかった。
ばさっと顔になにか白い物がかかった。なんだ、と思って見ると、手ぬぐいだった。
これは、と伊之助は気づいた。浪人が放ってくれたのだ。
「ありがとうございます」

伊之助は手ぬぐいを手にした。白くて、清潔だった。これで茶をふくのは悪いような気がした。

「つかってもよろしいんで？」

浪人はなにもいわず、茶を喫している。

「じゃあ、ありがたく」

伊之助はごしごしと着物をふいた。手ぬぐいに黄緑色のしみがついた。

「これは洗ってお返ししますから」

浪人は目を閉じている。伊之助は手ぬぐいを懐にしまいこんだ。

「ねえ旦那、故郷はどちらなんです」

答えがもらえるとは伊之助もはなから期待していない。ただ、この浪人のそばにいて、話していられるだけで満足なのだ。

「どうして古河にやってきたんです。古河には長くいるおつもりなんですかい。あっしはずっといてもらいたいですけど、そうもいかないんでしょうねえ。古河にいらっしゃる前はどちらにいらしたんですかい」

伊之助は空になった湯飲みを手でもてあそんだ。

「古河を出たらどこへ行かれるんです。やっぱり江戸ですかい。——旦那、明日、古河の町を案内しますけど、いかがです」

浪人が目をひらいた。伊之助はにっこりと笑った。

「お誘いを受けてもらえるんですね。うれしいですよ」

その日の賭場は、いつも通り七つ頃に終わった。客たちはそれまで見せることのなかったあくびをして帰ってゆく。興奮が抜けたあとのうつろさがそれぞれの体を覆っている。

勝った者もいれば負けた者もいる。ほとんどが負けたのだが、それでも懲りることなくまた夜になればやってくるのだ。

「お疲れさまでした」

長次が寄ってきて、伊之助と浪人に挨拶した。

辰三が帳場で金の勘定をしている。にんまりしているところを見ると、かなりのあがりがあったようだ。

辰三が金を金箱にしまい入れ、しっかりと錠をかけた。風呂敷で包んで子分の一人が担ぎあげる。

「ありがとうございました。また今宵もお願いいたします」

伊之助たちは住職の信純に礼をいい、参究寺をあとにした。浪人もうしろのほうをついてくる。

家に戻って朝餉を食べた。一眠りし、四つ半すぎに浪人を誘って外に出た。

天気はよかった。

古河自体、さして広い町ではないが、町のどまんなかを日光街道が突っ切っていることもあり、旅人の往来は繁くあり、町は繁盛している。

宿場には旅籠や食い物屋、屋台などが軒を連ねている。しじみ汁のいいにおいがあたりに立ちこめていた。

浪人を連れた伊之助は、やがて日光街道がどんづまりになったところで足をとめた。実際、道はまっすぐに続いているのだが、それは畦道でしかない。

日光街道は左に曲がっている。二町ほど行ったところで、今度は右に折れる。そしてまた畦道と合流するのだ。

このどんづまりには、右手に行く道もある。

「こっちは筑波道といいまして、その名の通り筑波のほうに向かう街道です」

ここが分岐となっているのだが、筑波道を行く人はあまりいない。今見えるのは、青物を売りに来た近在の百姓がゆっくりと帰ってゆく姿くらいのものだ。

伊之助は浪人をいざなって旅人たちと一緒に日光街道を進み、一軒の飯屋の前で歩をとめた。

「旦那、おなか減ってらっしゃいませんか」

浪人はただ風に揺れる暖簾を見つめているだけだ。

「あっしはもうぺこぺこなんで、つき合っていただけますか。鰻屋です。いいにおいがしてるでしょう」

もうじき昼だ。この店は渡良瀬川でとれる鰻を売り物にしている。古河の鰻といえばこのあたりの名物となっており、日光街道を行く旅人たちの楽しみの一つとなっていると伊之助はきいている。

古河にはうまいと評判の店がいくつかあるが、そのなかでも最もたれが美味、と伊之助が思っている店だ。

「鰻はお好きですかい」

伊之助はきいたが、その前に浪人はさっさと暖簾を払っていた。ああ、お好きなんだな、と伊之助は思った。

そんなに混んではいなかった。鰻を二匹つかった丼を伊之助はよく食べるが、今日もそれを二つ頼んだ。

しばらく待たされたが、やってきた丼はとてもうまそうだった。

浪人がうまいと感じてくれているか気になった。よそ見をすることなく、黙々と箸を動かしている。

この食べっぷりからして、きっと気に入ってもらえたのだろう、と伊之助は思った。

鰻屋を出た伊之助は、自分の好きな場所に浪人を連れていった。そこは城下のはずれで、やや小高いところだった。

南に城が見えている。

城は土井家八万石だけのことはあって、縄張はかなり大きい。城内には、主だった家臣の屋敷も取りこまれている。

水城といっていいほど、水に囲まれた城だ。東側は沼、西側は渡良瀬川を自然の防ぎとし

ている。

これだけ水に囲まれていると、やはり水害には勝てず、これまで城は何度か水に浸かっている。

「旦那、あのお城、三層に見えるでしょう。でも本当はちがうらしいんですよ。一番下が二層になっていて、実際は四重だそうです」

伊之助はうーん、と伸びをした。広々とした景色が眺められ、気持ちがよかった。

天気がいいだけにかなり遠くまで見渡せるが、大気には霞がかかっているようで、東の筑波山、西の富士山は残念ながら見ることはできなかった。

「旦那に、是非とも富士山を見てもらいたかったんですけどねえ」

伊之助は西側を流れる川を指さした。

「渡良瀬川です。城の向こう側で利根川に合流しているんです。そちらまでちょっと行ってみませんか」

伊之助が誘うと、浪人は黙ってついてきた。

利根川は悠々と流れていた。

いや、流れているようには見えない。あまりに川が広すぎて、流れがとまっているように見えるのだ。

川面には多くの舟が浮かんでいる。鰻や鯉、鮒、鯰などをとっている漁り舟ばかりでなく、米俵や酒樽、塩俵などを満載した高瀬舟が行きかっている。

「どうです、いいところでしょう」

伊之助は同意を求めたが、むろん、浪人はなにもいわなかった。ただ、多くの舟が行きかっているのはおもしろいようで、瞳が生き生きしていた。

お連れしてよかったな。

伊之助は満足し、浪人の横顔を見つめた。

五

疲れはなかった。

井上収二郎はほっと息をついた。目をあげて、長屋門を見つめる。

上屋敷のたたずまいに変わりはなかった。

なつかしさを覚えた。来たのはいつ以来か。

そんなに遠いことではない。半年ぶりだ。

あのときはどうしてやってきたのか。

井上収二郎は思いだした。たいした用事があったわけではなかった。あのときも殿のご機嫌うかがいだ。

すでに夜が近づいてこようとしていた。うっすらとした闇があたりに立ちこめはじめている。

早朝、古河を発ち、収二郎は十六里の道を一日でやってきたのだ。もともと歩くことに自信はある。

静かなものだ。土井家の上屋敷は、日比谷御門のすぐそばにある。左側の屋敷は、三河岡崎という神君の出生地を領する本多家の上屋敷だ。このあたりは、幕府内でも主だった大名の屋敷が連なっている。

門をくぐって上屋敷内に入り、まずは控えの間というべき部屋に入った。そこは広い庭に面している。

さらに濃くなってきた夕闇のなか、木立がぼんやりと見えている。母親でも捜しているのか、心許なげな雀の声がきこえてくる。

収二郎としては風呂に浸かりたいくらいだったが、そういうわけにはいかない。たらいに水を汲んでもらい、顔と手足を洗うのが精一杯だった。

今はそれで十分だった。

庭の向こう側の空はしばらくのあいだ夕日の名残のような明るさがあったが、それもやがて闇の手によって覆い隠された。

部屋も暗くなり、行灯がなければ手元も見えにくくなってきた。

呼びだしがあったのは、それから半刻ほどたった頃だ。

やってきたのは小姓だ。

小姓といってもかなり歳がいっており、鬢のあたりに白髪がまじりはじめた収二郎とたいしてちがわないのではないか。いや、額のしわの深さからして、年上かもしれない。

長い廊下を歩いて、奥に進む。収二郎は小姓の背中に声をかけた。

「どこかおかしなところはござらぬかな」

小姓が収二郎を見つめる。おざなりではなく、しっかり見てくれた。

「はい、どちらにも隙はございませんよ」

好意を示す笑みとともにいってくれた。この男は、と収二郎は思った。自分をきらってはいない。

左に折れた廊下が再びまっすぐになったところで、小姓が足をとめた。床に膝をつく。

「井上どの、お連れいたしました」

「入れ」

は。小姓が襖を静かにひらく。収二郎は廊下に平伏した。

脇息にもたれた利直が機嫌よく手招く。

「収二郎、そんなに堅苦しくせんでよい。はよう、入れ」

収二郎はその言葉にしたがい、利直の前に進んだ。襖が閉じられる。部屋のなかはむしろ明るく感じられた。

大行灯が二つ、利直の両側に置かれている。右手の行灯のうしろには、太刀を捧げ持った小姓が一人。こちらはずいぶんと若い。

「よく来たの」

利直は顔をほころばせ、白い歯を見せた。
「だが収二郎、じき国元で会えるというのにどういうわけだ」
「ご機嫌うかがいにまいりました」
「そうか」
収二郎がわざわざやってきた本当の理由は、利直が荒れている、という文が懇意にしている定府の者から届けられたからだ。
収二郎は家中のきらわれ者といっていいが、それでも先ほどの小姓と同じように合力を申し出てくれる者はいるのだ。
利直に忠義を誓い、利直の身を案じている者たちだ。収二郎が利直の小姓をつとめていたのも大きいのだろう。
収二郎のなかでむろん忠義の気持ちは薄れていないが、それ以上に考えているのは利直をさらなる出世の蔓としたいということだ。
利直は酒が入っていた。うまそうに杯を傾けているが、やはり上機嫌とはいえそうになかった。
どこか苦そうに酒を味わっているのだ。屈託がおありになる、と長いこと仕えてきた収二郎にははっきりとわかった。
「収二郎、つき合え」
利直が杯を突きだしてきた。

収二郎に否応はない。膝行し、利直から杯を受け取った。
利直が酒を注ぐ。収二郎は一息にほした。
利直が破顔する。
「相変わらずいい飲みっぷりじゃの。もっと飲め」
収二郎は勧められるままに立て続けに飲んだ。だからといって、酔いはしない。
「収二郎、よく来てくれたの」
利直がしみじみいう。
「収二郎、わしは悔しくてならんのだ」
利直は御前試合のこと、笹田八之丞の切腹などのことを語った。
「収二郎、わしは横山佐十郎の首を見たくてならん。知恵者のそなたなら、なんとかできるのではないのか」
利直がこうべを垂れる。
「頼む、収二郎、やつの首を取ってきてくれ。な、この通りだ」
収二郎はあわてて利直を抱き起こすようにしたが、胸を衝かれていた。賢いとはいえない殿さまであるが、こういう姿を見せることはほとんどなかった。
「本当にそのお覚悟がおありですか」
収二郎はささやき声できいた。
「むろんだ。あやつの素っ首を、むちゃくちゃにしてやりたい」

わかりました、と収二郎はいい、もとの場所に引き下がった。
「お人払いを」
うむ。利直がうなずく。手を振ると、小姓が太刀を刀架に立てかけ、外に出ていった。
襖が閉じられると同時に、利直が顔をぐいと突きだした。
「収二郎、やれるのか」
収二郎は微笑を浮かべた。
「いかがでしょうか」
「収二郎、余をごまかせると思うな。そなた、このためにまいったな」
「畏れ入ってございます」
「はよう申せ」
「今は、まだ手立てというものはございませぬ。しかし、それがしならお望みのものは手に入れられるものと」
「まことだな」
「はい。それだけでなく、心より欲しておられるものもこの際、手に入れられるのでは、と思案いたしております」
「余が心より欲しているもの？」
利直が怪訝そうにする。
「なんだ、それは」

「老中の座でございます」
収二郎はずばりいった。
「なんだと。どういうことだ」
「お耳を拝借しても？」
「よかろう」
収二郎は再び膝で進み、利直の顔を間近で見た。
つぶやくような声で話した。目をかすかに細め、主君の顔色を見る。
驚きのあまり、利直は声が出ない。
「いったいなにを申しておる」
ようやくしぼりだすようにいった。
「今それがしが申しあげたことができれば、念願の老中の座はぐっと近づきますぞ」
「それはわかるが……」
利直は声を落とした。
「もしことが露見いたせば、土井家は取り潰しぞ」
「承知しております」
収二郎は静かにうなずいた。
「しかし、そのようなことにはまずならぬものと。当家とは一切関わりのない者にやらせますゆえに」

「関わりのない者……何者だ」
「それは申せません。なにもご存じないほうがよろしいかと」
利直がじっと収二郎の顔を見た。深い息を漏らすと、小さく首を振った。
「収二郎、もうよい。今の一件、きかなかったことにいたす」

六

賭場から戻って、伊之助は一眠りした。
目が覚めると、障子に明るい日が映っていた。庭の木々が風に吹かれ、影になって揺れている。
日がのぼって、すでにだいぶたつようだ。
ちょっと寝すぎたな。伊之助は布団から起きだした。
旦那はどうしているのかな、と浪人が寝起きしている部屋に向かう。
いなかった。
どこへ行ったのだろう。厠だろうか。それとも飯か。
そんなことを思ったら、腹が鳴った。伊之助は台所のほうへ行った。
台所の隣の部屋に浪人がいて、膳を目の前にしていた。
伊之助は横に腰をおろした。子分の一人が台所にいて、包丁を振るっている。

「勢次、おいらにも頼むよ」
伊之助が声をかけると、はい、ただいま、と元気のいい声が返ってきた。
浪人は黙って箸をつかっている。うまいのかわからないが、三日前の鰻のときと同じような表情をしていることから、少なくともまずくはないのだろう。
それにしても、と伊之助は思った。旦那はどうして口をきかないのだろう。
きいたところでどうせ答えは得られないからきかずにいるが、不思議でならない。
きっと深いわけがおありになるんだろうな。いったいこの旦那になにがあったというんだろう。
「お待たせしました」
伊之助の前にも膳が運ばれてきた。おかずは梅干しにたくあん、納豆というものだ。味噌汁には豆腐が入っている。
梅干しとたくあんは勢次が漬けたものだ。たくあんはいい歯応えと塩加減で、とてもうまかった。
梅干しもそんなに塩はきつくしていない。しょっぱいだけの梅干しではなく、梅自体の味がよくわかり、飯との相性はすばらしかった。
「旦那、おいしいでしょ」
浪人が味噌汁を飲んだ。じっくりと豆腐を味わっている。
うまいと思ってくれているのがわかり、伊之助はうれしかった。

伊之助は三杯、飯を食べた。満腹して、すっかり満足だった。
「うまかったよ、ありがとう」
勢次に礼をいった。
「伊之助さん、でも珍しいですね、三杯も召しあがるなんて」
「勢次の腕がいいせいさ」
伊之助は浪人を見た。
「旦那も喜んでいらっしゃるよ」
浪人は静かに茶を喫している。
「旦那は、釣りはお好きなんですかい」
浪人が目を向けてきた。
「おやりになるんですね。今から行きませんか。いい場所があるんですよ。刻限が刻限ですから、釣れないかもしれないですけど」
なにが釣れるんだ、ときかれたように気がした。おや、と伊之助は思ったが、すぐに言葉をつないだ。
「鯉ですよ。三尺近い大物が釣れることがあります」
「伊之助さん、がんばってきてください。あっしは待っておりますよ」
勢次がにっこりと笑っていう。
「まかしときな。三尺とはいわんが、それに近いものを釣ってくるよ。今日の夜食は洗いにしてくだね」

鯉こくだね

渡良瀬川のゆったりとした流れが、ややよどんでいるところだ。あたりには葦(あし)が一面に生えている。
吹き渡る風は乾いていて、陽射しが強い分、とてもさわやかだ。
子供の頃から、ここにはよく来ていた。本当に三尺ほどの鯉を釣りあげたこともある。あれは、二年前のことだ。
刻限はもっとはやく、朝まずめの頃だった。あのときの強烈な引きを、伊之助は今も忘れていない。
あれから常に大物を意識するようになった。竿(さお)もいいものに替えた。
しかし、残念ながら新しい竿に効力はなく、釣果はあがっていない。
大きな石を流れのすぐそばまで転がしてゆき、浪人に座ってもらう。自分の石も持ってきて、浪人の隣に腰をおろした。
釣り竿の支度をして、浪人に手渡す。浪人はさっそく釣り糸を垂れはじめた。
その横顔がどこかうれしそうに見え、伊之助の心は弾んだ。
「ねえ、旦那」
伊之助は呼びかけた。
「旦那のことは、なんてお呼びしたらいいんです」

浪人は黙って釣り竿を握っている。
「ずっと考えていたんですけど、音無黙兵衛、なんてどうですかね」
むろん返事はない。だが、浪人はそれでかまわぬ、といっているように思えた。
「じゃあ、これから音無の旦那って呼ばせてもらいますから」

家に帰ったのは、七つ半頃だった。
「伊之助さん、どうでした」
勢次にいきなりきかれた。
「坊主だ」
「またですかい」
「どうも最近は駄目だよ」
「刻限がよくないですからね、仕方ありませんよ」
勢次が黙兵衛に目を向ける。
「旦那はどうだったんですかい」
「おいらと同じさ」
勢次がくすりと笑う。
「きいちゃあ、いけなかったんですね」
徐々に暗くなってゆくなか、井戸で手や足を洗っていると、郡兵衛がやってきた。

「ああ、こちらでしたか」
郡兵衛は黙兵衛を捜していた。
「とっつあん、どうかしたのかい」
「旦那に一緒に来てもらいたいんだ」
「どこへ」
「例の店だ。客人が待っていなさる」
「客人というと？」
「ここではいえねえ」
なんとなくいやな予感を伊之助は抱いた。黙兵衛を見る。
「賭場のほうはいいの？」
「客人のほうはそんなに長くはかかるまい」
「そう。――音無の旦那、どうされます」
「音無の旦那って、こちらさんの名がわかったのか」
伊之助は説明した。
「なんだ、そういうことか。音無の旦那、一緒に来ていただけますか」
黙兵衛が軽くうなずきを見せる。
「ありがとうございます」
「とっつあん、おいらもついていっていいかい」

郡兵衛は一瞬考えたようだ。無口、というよりまったく口をきこうとしない浪人になついているせがれがいたほうが、都合がいいと考えたのかもしれない。

「かまわねえぞ」

七

立ちこめていた夕闇がさらに濃くなった頃に、目的の場所に着いた。水のにおいが感じられる。

さっきまで嗅いでいた渡良瀬川のものだ。

しかしやっぱり広いな。

店の建物を見て、伊之助は感じ入った。いつ来ても、この広大な建物と敷地には圧倒される。

黙兵衛が、建物の上に掲げられた扁額をじっと見ている。闇に白い字がぼんやりと浮かんでいた。『千宏屋』と記されている

ここは店といっても、なにか商品を扱っているわけではない。渡良瀬川や利根川の水運を商売としている。

荷を運び、人を運ぶ。巨利を得ているのを伊之助は知っていた。

建物の横に口をあけている路地を入り、屋敷のほうに向かう。

恐ろしく長い黒塀だ。どこまで続いているのか。先のほうは闇に溶けてしまっている。

二町近くは歩いただろうか。唐突に塀が切れ、小城の搦手門くらいはつとまりそうな立派な門が見えてきた。こちらに千宏屋の家族が住んでいる。

郡兵衛が門を叩き、名乗る。間を置かずに門がひらかれた。

「どうぞ」

事情を解しているらしい奉公人が三人を案内する。

右手の庭のやや小高い場所に導かれた。

「こちらです」

離れが建っていた。

奉公人の手で障子がひらかれ、三人はなかに入った。八畳間で、隣にも同じくらいの部屋があった。

「しばらくお待ちくださいませ」

奉公人は去っていった。

入れ替わるように女の奉公人が姿を見せ、三人に茶とお茶請けを置いていった。お茶請けはせんべいだ。

「食べてもいいかな」

小腹が空いていた伊之助は父親にきいた。

「かまわん、食べろ」

郡兵衛が小さく笑っていい、自ら手をのばした。ばりばりと音を立てる。
「さすがにうまいな。いい職人がいい醤油をつかって焼きあげている」
伊之助も食した。確かに父親のいう通りで、うまいせんべいだ。
醤油にこくがあり、旨みが強い。米自体もいい物をつかっているようで、歯応えがいつも食べているものとはまったくちがう。
茶は香りがとても立ち、喉越しがとにかくさわやかだ。もともとこのあたりは茶の栽培が盛んだ。質のよい茶ということで名がある。
「旦那もいかがです」
勧めたが、浪人は手をださなかった。
伊之助が三枚目のせんべいを食べ終えた直後、離れに一人の侍がやってきた。
「失礼する」
一瞬、三人もいることに驚きの表情を見せかけたが、沓脱ぎで雪駄を脱ぎ、なにもいわずにあがってきた。三人の前に、背筋をのばして正座する。
井上さまではないか、と伊之助は思った。寺社奉行だ。
小柄だが、全身から発散されるものには、腕の立ちそうな雰囲気がある。聡明さも感じられた。いかにも頭が切れそうな顔つきをしている。
「音無の旦那、こちらは土井さまのご家中で寺社奉行をつとめておられる井上収二郎さまです」

郡兵衛に紹介された侍が頭を下げ、名乗った。黙兵衛はかすかなうなずきを返したのみだ。
「お名は音無どのでよろしいのか」
収二郎がたずねる。
「それが」
困った顔で郡兵衛が説明した。
「名乗らぬだけでなく、一言も口をきかぬとは。どうしてかな」
穏やかな口調で収二郎が黙兵衛にきいた。それでも黙兵衛は無言を貫いている。
「どうもこちらさんは、わけあって口がきけぬようにございます。どうか、ご容赦ください」
「しかし話が進まぬではないか」
「ですので、せがれを連れてきたわけでして。せがれは音無の旦那のいわんとしていることが、わかるようですから」
「さようか。ふむ、よかろう。だがよいか、ここでの話は他言無用ぞ」
「承知しております」
伊之助は平伏してみせた。
話か、と畳を見つめながら思った。いったいどんな用件なのか。
参究寺での賭場のことなどあって、郡兵衛と井上収二郎は深くつながっているが、寺社奉行自身がわざわざいったいなんの用なのか。

収二郎が黙兵衛に視線を転じる。
「おぬしのことは、それがし、配下からきき申した」
あの三人の浪人を退治したときだな、と伊之助はさとった。
「足を運んでいただいたのは、依頼したき旨があるゆえにござる」
そこで扉を閉めるように口を閉じた。
「その依頼と申すのは――」
そこからはほとんど前置きなしに語った。
形のよい唇から紡ぎだされた言葉に、伊之助は驚愕を禁じ得なかった。隣で郡兵衛も同じ顔をしている。
黙兵衛は眉一つ動かさなかった。
「井上さま、本気でおっしゃっているんですかい」
つっかえないように注意したのか、郡兵衛がゆっくりとした口調で確認する。それは伊之助の気持ちを述べたも同然だった。
「むろん」
収二郎は深々と首をうなずかせた。寺社奉行が決して冗談でいっているわけではないのを伊之助は理解した。
収二郎はこういったのだ。
「久世家の剣術指南役の横山佐十郎を討ち果たしていただきたい。さらに、久世豊広公を亡き者にしていただきたい」
それだけではなく、久世豊広の首を首桶に入れ、持ち帰ってほしい、と続けた。
黙兵衛は表情ひとつ変えなかった。
「井上さま、どうしてそのようなことに」
驚きからやや立ち直りを見せた郡兵衛が疑問を発する。
収二郎が説き明かす。
「そういうことですかい……」
きき終えて郡兵衛が吐息する。
伊之助は、そのような理由から人を殺そうと考える武家のおぞましさに、呆然とした。
郡兵衛がちらりと黙兵衛を見てから、収二郎に視線を転じた。
「しかし井上さま、どうして音無の旦那にそのようなことをやっていただこうとお考えになったのです。先ほど、旦那のことは配下のお方からきいた、とおっしゃいましたが」
収二郎が顎を一つなでた。
「どうして音無どのを選んだか。――このお人なら、見事やり遂げてもらえる気がしたのだ。例の賭場を襲った三人だが、あれは古河だけでなく関八州を股にかけて荒らしまわっていた者たちだ。各地の捕り手も、相当痛い目に遭わされてきたときく。それをたった一人で取り押さえるなど……」
収二郎が言葉を切る。

「それだけの手練は、残念ながら我が家中に一人としておらぬ。しかも我が殿が久世家への報復を考えておられたとき、そのような遣い手がここ古河に逗留しているというのは――」

そこでいったん言葉を切った。

「まさに天意としか思えぬ」

収二郎が黙兵衛をのぞきこむ。

「いかがかな」

黙兵衛は口をひらこうとしない。

「井上さま、音無の旦那が引き受けられたとして、万が一しくじってとらえられるようなことになったらどうなります」

伊之助ははじめて問いを口にした。

「助けていただけるんですか」

「そのときは知らぬ、存ぜぬで通すことになろうな」

さも当然といった口調で収二郎が返す。

「冷たいようだが、そういうことになろう」

伊之助は、冷たい汗が背筋を滑り落ちるのを感じた。だから家中の者をつかわず、土井家とまったく関係のない黙兵衛に白羽の矢を立てたのだ。

そして、逆もまたしかりなのだろう、と伊之助は考えた。もしこの企てが成功して黙兵衛が久世の殿さまの首を取ったとき、久世家側も表沙汰にすることはまずあるまい。

おそらく、病死ということで処理するのだろう。大名が闇討ちされて殺されたなど、体面をなにより重んじる武家としては闇に葬るしかないはずなのだ。

「どうされます、旦那」

伊之助は気持ちをきいた。当然断るはず、と思った。

黙兵衛が首筋をかいた。伊之助を見つめてくる。

なにかいいたいことがあるようだ。あるのなら、口にだしていえばいいのに、と伊之助は思ったが、そうはしたくないなんらかの理由が黙兵衛にはあるのだろう。

不意に、頭にひらめいたものがあった。なんとなく黙兵衛のいいたいことがわかった気がした。

伊之助は収二郎に向き直った。

「報酬は？」

収二郎が顔を輝かせる。

「では、やっていただけるのだな。仕官ではいかが」

伊之助は再び黙兵衛を見た。暗い輝きを帯びた瞳を凝視する。

またも黙兵衛がなにをいいたいか、さとることができた。

「お金がいいようです」

「ほう……」

収二郎が少し考えたあと、口にした。

「五百両ではいかがか」
その途方もない額をきいて、伊之助はひっくり返りそうになった。郡兵衛もあんぐりと口をあけている。
伊之助は驚きから立ち返り、黙兵衛を見た。黙兵衛はうなずいたようだ。
「それでよろしい、とのことです。……井上さまは寺社奉行でいらっしゃいますね。でも、どうやってそれだけのお金を」
「こら、失礼なことをいうんじゃない」
郡兵衛が咎める。
「でも、これはおいらがききたいんじゃないもの」
「その疑問はもっともだ」
収二郎が黙兵衛を見ていった。
「一介の寺社奉行ごときに用意できる額でないのは明らか。我が殿も金を自由にできるすべをお持ちではない。種明かしをすれば、この千宏屋は我が妻の実家なのだ」
そうだったのか、と伊之助は驚いた。初耳だった。商家の娘が武家に嫁ぐなど、もはや珍しくもなんともないが、これだけの大店の娘が、となると、そうあることではないだろう。
いったいどういうつながりで、井上収二郎は千宏屋の娘をめとるに至ったのか。その疑問に収二郎が答えてくれることはなかった。
「ほかにききたいことは？」

伊之助は黙兵衛に顔を向けた。
黙兵衛にはまだあるようだ。伊之助は集中し、そのことを察した。
「このことを、肝腎の土井のお殿さまはご存じなのですか」
伊之助には、一瞬、収二郎がつまったように見えた。
「むろん」
なにごともなかった顔で返す。
「ご重臣などのお歴々は？」
「いや、このことは我が殿とそれがしのみの秘事だ」
「殿さまは了承されたのですね」
「むろん」
収二郎が怒ったような顔で答える。
「ほかにききたいことは？」
その話題を打ち消すようにきいてきた。
黙兵衛にはなにもないようだ。伊之助はその旨を収二郎に伝えた。
そうか、と収二郎は満足げにいった。
「では、引き受けていただけるのだな」
「どうします」
伊之助は黙兵衛にただした。ここでの即答は避けたい、といいたいように感じられた。

「さようか」
伊之助がそのことを伝えると、収二郎は少し残念そうに口にした。
「ことがことだけにいたし方あるまい。して、いつお返事をいただける」
伊之助は黙兵衛の表情を読み取った。
「明日にでも」
「わかり申した」
収二郎がにらみつけるような目を黙兵衛に向けた。
「いい返事がきけることを願っている。もしいい返事が明日きけるとして、一番の大きな障壁は――」
収二郎が黙兵衛の気を惹くように口にした。
「やはり、久世家剣術指南役の横山佐十郎でござろう。やつは豊広公のそばにべったり、とのことにござる」

八

あの場で答えてもよかったか、と黙兵衛が思っているのでは、と前を行く背中を見て伊之助はさとった。
伊之助と黙兵衛、郡兵衛の三人は門につながる踏み石の上を歩いている。庭に灯籠がいく

つか配置され、闇はしっかりと深く根を張っているとはいえ、その明るさのおかげで歩くのにはなんの支障もない。
それにしても、とあらためて考える。井上収二郎は、本当に大名の首が取れると思っているのだろうか。
大名といえば城の奥におさまり、しかもまわりには大勢の家臣がいる。
城に籠もりきりというわけではなく、外に出ることももちろんあるのだろうが、そのときだって大勢の侍ががっちりと警護をしているだろう。
ふつうに考えればできることではない。しかし収二郎は自信満々だった。この世にはやれぬことなどない、といいたげな表情をしていた。
いや、あれは、と伊之助は思った。自信のあらわれなどではなく、しくじりは当然、成功したら儲けもの、くらいに考えているからではないか。
伊之助たちは千宏屋を出た。
伊之助は小田原提灯に火を入れた。三人は長い塀際に沿って路地を歩きだした。
伊之助は妙なものを感じ、振り返った。黙兵衛が黙って歩いている。
黙兵衛の体から、なにか燃えているような熱気があふれ出てきている。
この人は、と思った。やる気なのだ。
そのことがわかった途端、伊之助も体が熱くなってきた。
とてつもなくおもしろいことが見られるのではないか。この太平の世に大名の首を取る、

というのは男として生まれて、これ以上のことはないのではないか。

自分がやるような気分に、伊之助は知らずなっている。胸がわくわくしてきた。

そうだ、考えてみれば、一生こんなことに出会えるはずもないのだ。

それを目の当たりにできるかもしれない。

きっとこの旦那はやり遂げるのだろう。久世の殿さまの首が入った首桶を、まちがいなく収二郎のもとに届けるはずだ。

「ねえ、音無の旦那」

郡兵衛が声をかける。

「このままあっしらが久世家に駆けこむ、とは井上さまはお考えにならなかったんですかねえ」

伊之助は黙兵衛の表情をうかがった。

「とっつあん、そのようなことは決してせぬ、とおっしゃってますよ。あっしらにもそういう真似は許さぬ、と」

「もちろんそんな気はありませんよ」

郡兵衛が笑って口にする。

「もともとあっしらは千宏屋にはだいぶ世話になっていやすし、土井さまや井上さまを裏切る真似だけはいたしやせんから」

千宏屋は荷や人を舟で運ぶことを商いにしているだけあって、その利をめぐってのいさかいは多い。

そういうとき郡兵衛一家が出ていって、ことをおさめるのだ。

ときに、利根川のことで関宿の者たちと争いになることもある。関宿は久世家の城下で、久世家も同じように利根川の水運を利して台所を潤しているから、千宏屋にとっては商売敵といえるのだ。

「旦那、でもどうされるんです。受けられるんですかい」

郡兵衛が気がかりそうにきく。

「とっつあんはどう考えているんだい」

「俺か。俺はやったらいい、と思っている。男に生まれて、こんなおもしろそうなことにぶつかることなどまずなかろうよ。威張り腐っている大名の首、それがあの関宿の殿さまの首というのなら痛快そのものだな。俺はもし旦那がやるといわれるんなら、全力で応援させてもらいますぜ」

父親がここまで熱くいうのは珍しかった。

郡兵衛の気持ちはしっかりと黙兵衛に伝わったはずだ。

「おめえはどうなんだ」

郡兵衛が伊之助にたずねる。

「おいらもとっつあんと同じ気持ちだよ」

「やっぱりそうか。さすがに俺のせがれだけのことはある」

伊之助は道々、久世家の剣術指南役の横山佐十郎のことを考えた。

なんといっても、最も気にかかっているのはこの男のことだ。収二郎によれば、土井家の剣術指南役を圧倒的な強さで打ち倒した男なのだから。

どんな男なのか、どんな剣を遣うのか。おそらく黙兵衛も同じ気持ちでいるはずだ。調べたい。

一番いいのは、将軍御前試合で敗れた笹田八之丞に話をきくことだろうが、江戸屋敷で割腹して果てたと収二郎はいっていた。

笹田八之丞がどれほどの腕だったかわからないが、土井家の剣術指南役であった以上、半端な腕ではなかったはずだ。

それを圧倒できるのだから、横山佐十郎が伊之助がこれまで目にしたこともない腕の持ち主であるのは紛れもない。

それだけの手練とやり合う気持ちというのはどういうものか。

収二郎が横山佐十郎の名をだし、最も手強い相手、というようなことをいったが、あれは黙兵衛の心を見抜いての言葉だろう。

おぬしほどの手練なら、それだけの遣い手とやり合ってみたいのではないか。

それにしても、真剣での立ち合いは怖くはないのだろうか。

不意に伊之助は気づいた。

先ほどから黙兵衛が発している熱。もしかしたら黙兵衛は横山佐十郎とやり合えることに、

喜びを感じているのではないか。

となると、立ち合う恐怖などまるで感じていないはずだ。

「音無の旦那」

伊之助は声をかけ、遠慮がちに横に並んだ。

「もう心はお決めになったんですね」

「なんだ伊之助、ずいぶんうれしそうじゃねえか。おめえ、旦那の手伝いができるのがそんなにうれしいのか。もしかしたら、命を失うかもしれねえんだぞ」

「かまわないよ」

伊之助は気を張って答えた。

「やくざ者が死ぬのを怖れていたんじゃ、笑いものになっちまう」

「そりゃそうだが、おめえはまだ十八だぜ。死ぬにははやすぎる」

「とっつあん、おいらをはずそうっていうのかい」

郡兵衛はなにもいわなかったが、できればそうしたい、と思っているようだ。

「でもとっつあん、おいら抜きに旦那の気持ちをどうやって知るんだい」

それをきいた郡兵衛がつと足をとめ、黙兵衛を見つめた。

「ねえ、音無の旦那、どうかしゃべってくださいませんか」

必死の懇願だったが、黙兵衛は無表情を保っている。脅すわけにもいかず、脅したところで効き目があるはずもなく、郡兵衛は弱り果てている。

「仕方ねえか」
下を向き、あきらめたようにいった。
「旦那、頼りねえせがれですが、つかってやってもらえますかい」
黙兵衛は相変わらずなにもいわなかった。ただ前を向いて歩いている。

九

「音無の旦那、いらっしゃいますかい」
外から郡兵衛の声がし、伊之助は、いらっしゃいますよ、と答えた。
からりと障子がひらく。
「おめえ、またここにいやがったのか」
郡兵衛が、失礼いたしますよ、と部屋に入ってきた。
「ほんと、旦那にべったりだな。旦那、ご迷惑じゃないですか」
「そんなことはないって、旦那はおっしゃってるよ」
「ほんとかよ。――旦那、いかがです、この部屋は。日当たりがよくてようございましょう？」
「そんなこと今さらいわなくたっていいよ、とっつあん。旦那は十分、満足されてるから」
庭に面している南側はすべてあけ放たれ、そこからあたたかな陽射しが畳を照らしている。

緑一色に染まった木々はいかにも気持ちよさそうに風に吹かれているし、あたりを飛びかう小鳥たちも機嫌よさげにさえずっている。
「そうかい、それはよかった」
郡兵衛が黙兵衛の前に正座した。
「旦那、お殿さまがつい先ほど帰国されましたよ」
「ああ、もう着いたんだ。はやいね」
郡兵衛が伊之助をにらむ。
「今のは旦那のお言葉かい、それともおめえのか」
「おいらのだよ」
「紛らわしいったらありゃしねえな」
「ここ古河は江戸から十六里ですからねえ」
伊之助は浪人にいった。
「江戸を発ったその日にはさすがに無理ですけど、翌日には着けます」
郡兵衛が黙兵衛に顔を近づけた。
「お返事は今日ですけど、お心変わりはございやせんね」
「大丈夫、とおっしゃってるよ」
「そうか」
郡兵衛が満足そうにする。

「そろそろ出かけたいんですけど、旦那、よろしいですかい」
「でもとっつあん、まだはやくはないかい。昼をすぎて四半刻もたっていないし、それにお殿さまが帰国されたからきっと井上さまも忙しいんじゃないのかい」
「いや、さっき千宏屋まで来るよう、使いがあったんだ」
「ああ、そうだったのかい」
伊之助は納得した。
「このとんでもなく忙しいはずのときにお城を抜けだすなんざ、井上さまも気が急いてる、ってことだろうぜ」
三人で千宏屋に行った。
すぐに昨日の離れに通された。すでに収二郎は待っていた。
「おう、よく来てくれた」
三人を立ちあがって迎える。
女の奉公人がやってきて、三人の前に茶が入った湯飲みを配った。
「まずは渇きを癒してくれ」
奉公人が去ると、収二郎が勧めた。
伊之助は遠慮なく湯飲みを手にした。昨日と同じで、とてもうまい茶だった。黙兵衛もすすっている。茶に目がないのかもしれない。
茶どころの出なのだろうか。だとすると、どこなのだろうか。名があるのはやはり駿河な

のだが。
黙兵衛が湯飲みを茶托に戻すと、待ちかねたように収二郎がきいた。
「返事をいただけるかな」
伊之助が諾を伝えると、収二郎は飛びあがらんばかりに喜んだ。その仕草は寺社奉行という要職をつとめる者として、少し軽いように伊之助には感じられた。
「我が殿もお喜びになろう」
いや、これで喜ぶのはあまりにはやすぎるだろう。
伊之助としてはそういいたかった。きっと黙兵衛も同じ気持ちなのではないか。
収二郎がぱんぱんと手を打った。
足音がひたひたと庭を響いてきて、沓脱ぎのところでとまった。
「お持ちしました」
閉められた障子越しに声がかかる。収二郎が立ち、障子をひらいた。
千宏屋の奉公人が立っていた。
「こちらでございます」
袱紗包みを差しだしてきた。収二郎がうなずき、受け取る。
「ご苦労だった」
一礼して奉公人が去ってゆく。収二郎が静かに障子を閉め、もとの位置に腰をおろした。
「金だ」

収二郎は受け取ったばかりの袱紗をひらき、一葉の紙を黙兵衛に手渡した。
伊之助はその紙をちらりと見た。
「為替手形だ。額面は五百両。仕事が成功裏に終わったら、市中の両替屋で換金できる。別に江戸でも大丈夫だが」
現金でなくていいのですか、という思いをこめて伊之助は黙兵衛を見つめた。
黙兵衛は平然としている。軽く顎を引くと、ていねいに折りたたんで懐にしまい入れた。
伊之助としては拍子抜けする思いだった。この仕事に黙兵衛がかかろうとしているのは、単に金ではないのかもしれない。
「いつ仕事に」
収二郎がきく。
伊之助は黙兵衛に顔を向けた。
黙兵衛が見返してきた。そのいわんとすることははっきり伝わってきた。
「今日からさっそく」
「それはありがたい」
「あっしが旦那の手足となって、動きまわります。足りないところは、とっつあんに力を貸してもらおうと思っています」
「おぬしが手足か」
収二郎は危ぶむ顔をしている。

「それは音無どのの意向かな」
「もちろんでございます」
黙兵衛が実際に伝えてきたわけではなかったが、きっとこういう気持ちでいるのはまちがいない。
収二郎は疑わしそうな表情をしたが、なにもいわなかった。
「これを」
収二郎が懐をごそごそやり、一枚の紙を黙兵衛に手渡した。
黙兵衛はじっと視線を注いでいる。郡兵衛ものぞきこんでいる。
伊之助が見ると、人相書だった。
どなたです、ときく必要はなかった。
鼻筋が通り、唇が薄い。額が広く、目が丸い。顔自体がずいぶん小ぶりな感じだ。
紛れもなく高貴な血を引いている。
「久世豊広公ですね」
郡兵衛が確かめる。
「よく似ているはずだ。腕利きの絵師に描かせたゆえ」
「横山佐十郎の絵はないのですか」
伊之助はたずねた。
「そちらは必要なかろうと思ってな」

「どうしてです」
いった途端、馬鹿な問いをしたものだ、と伊之助は反省した。
「久世のお殿さまにずっとくっついているからですね」
「そういうことだ。それに、久世家中で随一の手練だ。他の家臣に混じっていても、烏の群れの鶴くらい目立とう」
黙兵衛が人相書を収二郎に突きだすようにした。収二郎が怪訝そうにする。
伊之助は黙兵衛の意を汲み、言葉にした。
「覚えられたそうです。もはや忘れぬ、と」
「さようか」
収二郎は素直に受け取り、人相書を懐におさめた。黙兵衛に視線を当てる。
「郡兵衛のもとにいるより、こちらに移ったほうがよいのでは？」
「どうしてです」
伊之助は問うた。
「それがしとしては、この離れを自由につかっていただければ、と思っている。それがしとの連絡もこちらにいていただければ、取りやすい」
収二郎は伊之助を見た。
「むろん、おぬしにも来てもらうことになるだろうが」
「いかがされます」

伊之助は黙兵衛にただした。すぐ黙兵衛の考えが伝わってきた。
「今のところは遠慮させてもらいたい、とのことです。いずれ必要になったら、とおっしゃっています」
「了解した」
収二郎が無理強いすることはなかった。

第二章

一

風呂敷包みを背負い直す。
といっても、あまり荷物は入っていない。軽いものだ。
博造（ひろぞう）は行く手を見た。夕暮れが迫っている。あまりはやく行っても、不在かもしれない。
このくらいならちょうどいいだろう。
博造は再び足を踏みだした。
関宿城下に入った。どこからか味噌汁のにおいがしてきた。かなりそそられる。
道行く町人たちも腹を空かしているのか、誰もが早足だ。
遠く三層の天守が見えてきた。じき落ちる最後の日の光を浴びて、半分が橙色（だいだいいろ）になっている。天守まわりの城壁は白だが、手前側は影となって黒く見えている。
その濃淡が神々しく見え、五万八千石の領主が住まうのにふさわしい城に思えた。

博造は城の方角へまっすぐ向かった。水のにおいがしてきた。においは城に近づくにつれ、強いものになった。
城のすぐそばを逆川（ぎゃくがわ）が流れているのだ。
武家屋敷が建ち並ぶ一角をすぎ、次いで蔵屋敷が建つ場所を抜けた。
逆川から引きこまれた外堀の一つを渡り、再び侍屋敷が多く並ぶ町に入った。
博造はその最も東側にある屋敷の前に来た。
目の上にあるのは長屋門だ。くぐり戸の右側に格子のついた小窓がある。
訪（おとな）いを入れる。
小窓があき、男が顔を見せた。底光りするような目で博造をじっと見る。
博造が見返すと、今あけます、とていねいな口調でいって、小窓を閉めた。
間を置くことなく、くぐり戸があいた。
「どうぞ」
男がいい、博造は身をかがめてくぐり戸を通り抜けた。
「殿はお帰りか」
「はい、先ほど」
「会えるかな」
「博造さんが見えたら、ときを問わずに通せ、と」
博造は男の案内で歩きだした。玄関には入らず、母屋に沿って右手へ進む。

木戸があり、そこを左に折れる。足を踏み入れたのは広々とした庭だ。多くの木々が植えられ、敷石の先には稲荷が置かれている。一本だけ灯籠があり、それにはすでに灯が入っていた。ぼうっとした光が庭に投げかけられている。

すぐ左手に、母屋からやや突きだした形で濡縁のついている部屋がある。障子は閉じられているが、なかは行灯が灯されて、人影らしいものが映っていた。

男は、こちらでお待ちください、と戻っていった。

いつもの手順だ。博造は濡縁に腰かけ、荷物をおろした。

「博造か」

障子を抜けて声がきこえた。ややしわがれた声だ。

「はい」

衣擦れの音がし、障子がひらかれた。

鋭い目で侍が見おろしている。博造は座ったまま頭を下げた。

侍はこの屋敷のあるじで、名は平崎館左衛門。久世家の目付頭だ。

「よく来た、博造」

館左衛門が博造の隣であぐらをかいた。

「なにかあったか」

月に二度の報告だった。博造は、土井家の動静をうかがうために古河に撒かれた草だ。むろん、土井家のほうでも同じことをしているにちがいない。

「気になることが一つございます」

「申せ」

「寺社奉行の井上収二郎が江戸上屋敷に行ったようです」

「いつのことだ」

「ほんの七日ほど前です」

「目的は？」

「井上収二郎は小姓あがりです。小禄の身で寺社奉行になったのも、土井公の引きがあったればこそ、と耳にしています。それがために家中ではきらわれておりますが、土井公の信頼も厚いときいています。井上収二郎がわざわざ行ったということは、土井公に会った、それしか考えられぬのですが」

「なに用でかな」

「わかりません。しかし、昨日土井公は古河に帰国をいたしました。ですから、昨日まで待てばこちらで会えたわけです。それなのに、七日前、わざわざ江戸まで足をのばした――そのことがそれがしには妙に感じられてならぬのです」

「井上は確か、もともと四十石の軽輩であったな」

「はい。利発さを買われ、小姓になったとき及んでおります。土井公と井上収二郎は、衆道の仲ともいわれております。真偽のほどはわかりませぬが」

「つまりは、そういうことではないのか。どちらかが我慢がきかなくなった」

「お言葉ですが、それはないのではないか、と。衆道のことはあくまでも噂にすぎませぬ。なにか別の理由があって会いに行ったのでは、と思えてなりませぬ」
「たとえば？」
「御前試合のことはいかがでしょう」
「御前試合だと？」
館左衛門が太い眉をひそめた。
「わざわざ利直どののもとに行くということは……あの意趣返しを企んでいるとでも？」
さすがに目付頭だけに勘は鋭い。
「考えられることではないかと」
館左衛門が顎を一なでする。
「なるほど、あの利直どののことだ、重臣たちに相手にされず、寵臣を頼った、というのは十分にあり得るな。利直どのは暗愚よ。それなのに我が殿と張り合い、老中の座を狙っているというのは笑止だが……」
館左衛門が灯籠に視線を当てた。
「利直どのは執念深いからの」
苦々しげにいって、博造、と呼びかける。
「井上収二郎に張りついてみよ。おぬしの鼻をわしは信じよう」

二

ほんの三里、南へくだってきただけだが、風のにおいがちがうような気がする。
古河のほうが乾いているのではないか。
ここ関宿の風は、伊之助には少し湿り気が強く感じられた。
それはもっとも、南のほうから厚い雲が近づいてきているのが関係しているだけかもしれない。
ゆっくりとした動きの雲が雨を降らせるものか伊之助にはわからないが、少なくとも湿った風を呼んでいるのはまちがいない。
「雨になりますかねえ」
伊之助は黙兵衛に話しかけた。
「雨になったら難儀ですねえ。雨具の用意はしてきましたけど」
背中の風呂敷包みには、合羽が二つ入っている。
伊之助はまわりを見渡した。
「あっしがこの町に来るのは何度目ですかねえ。三度目ですかね。近いのに、やっぱりなかなか来ることはないですねえ」
伊之助は、黙って歩き続ける黙兵衛の横顔を見た。引き締まった面貌で、伊之助から見て

も、なんていい男だろう、と感じ入ってしまう。

さっきから行きかう町人のなか、老若を問わず女たちが浪人に控えめな視線を浴びせてゆく気持ちもわかる。

「ねえ、音無の旦那」

伊之助はさらに話しかけた。

「本当は、あっしがついてこないほうがよかったんじゃないですか。一人で自由に歩きまわってみたかった、ということはないんですかい」

そんなことはない、と黙兵衛がいってくれたような気がした。

「でも旦那、関宿っていうのはなかなかいい町ですねえ。雰囲気がいいというか、活気がありますよね。さすがに譜代のご城下ですねえ。もっとも、土井さまも譜代ですけど」

陸奥から海路くだってきた荷は、九十九里浜近くの危険な海を避けて犬吠埼の手前で利根川に入り、流れをさかのぼってくるのだ。

関宿は利根川をのぼってきた大量の荷が、江戸にじかに通ずる逆川をくだりはじめる要所にある。

それだけ重要な地だけに、久世家では幕府に命じられて水関所をつくり、荷や人の監視を行っている。それだけでなく、抜け目なく関銭を徴収していた。

それが久世家に莫大な富をもたらしている、という話を伊之助はきいたことがある。

もっとも、関宿領でもっと活気があるのは利根川の対岸にある境河岸や、逆川の向こう

岸に設けられている水関所の側のほうだ。

そちらには旅籠や料亭、一膳飯屋、茶店、女郎宿が軒を並べている。賭場まである。

その賭場が相当にぎわっているのはまちがいないところだった。おそらく郡兵衛一家の賭場の比ではあるまい。

今、伊之助たちがいる側は、関宿城があるほうだ。こちらは武家屋敷が多く、戦の際は砦となる寺もかなり目につく。

むろん町家がないわけではなく、一膳飯屋などもかなり目につく。

「まずはお城ですかい」

伊之助はたずねた。黙兵衛は城の方向へさっさと歩いてゆく。伊之助はおくれないように続いた。

二人は、城見物にやってきた旅の者のような格好をしている。

なにごともなく、城近くまで行けた。

やや見あげる位置に大手門がある。伊之助が知っている限りでは、大手門の向こうは三の丸になっているはずだ。

二町ほど先だろうか、三層の天守が見えている。おそらくそこは、逆川のすぐそばなのではないか。

逆川の対岸から見たほうが、天守はよりはっきり見えるだろう。

「でも旦那、立派なお城ですねえ。構えがすごいじゃないですか」

幅が十間はある外堀の先に大手門はある。こちらとつながっているのは、幅が一間ほどしかない土橋だ。

縄張自体はかなり広い。東側は利根川を自然の外堀にしている。櫓もいくつか見えている。内堀はここからでは見えないが、どうやら逆川から水を引きこんでいるようだ。

「今日は富士山が見えますねえ」

くっきり、というわけではないが、ちょうど雲の合間からその姿が天守の隣に見えるというふうになっている。

まだかなりの雪が残っているが、凛としたその姿は実に美しかった。

黙兵衛は富士山には目もくれず、城にじっと視線を注いでいたが、不意にきびすを返した。道を戻ってゆく。

「音無の旦那、どちらへ行かれるんです」

伊之助は黙兵衛の背中から、意図を理解しようとした。

わからなかったが、剣術指南役の横山佐十郎の顔を見たいのではないだろうか。

しかし、伊之助には横山屋敷がどこなのかわからない。黙兵衛も知っているとは思えない。

だが、異様に強そうな勘で捜しだしてしまえるような気もした。

黙兵衛は、静謐という言葉がぴったりくる武家屋敷町をあっさり通りすぎた。

ちがうのか、と伊之助は思った。黙兵衛の考えとしてはどういうことなのか。

つまり、今はまだ横山屋敷へ行ったり、顔を見ようとするのははやいということなのか。

伊之助の直感にすぎないが、今は相手に顔を知られる危険はできるだけ避けようとしているのではないか。

そういう気持ちでいらっしゃるのなら、と伊之助は思った。おいらがひそかに横山佐十郎のことを調べてみよう。

黙兵衛は左に道を取り、またもあらわれた武家屋敷が建ち並ぶ町をさっさと抜けた。

そこには河岸があり、逆川の流れが眺められた。多くの蔵が建ち並んでいる。

それにしても、まるでそこに河岸があるのをあらかじめ知っていたかのようだ。

いや、実際、知っていたのだろう。古河に来るまで黙兵衛がどこにいたのか知らないが、諸国をめぐっていたのではないか。その間に、関宿を訪れたこともあったのではないだろうか。

「音無の旦那、この河岸はなんと呼ばれているかご存じですかい。――内河岸っていうんでさ」

伊之助は逆川の向こう岸を見た。

「あちらは関宿河岸というんで。――あれが水関所ですよ」

関宿河岸のすぐ近くに、竹矢来が組まれている一角がある。平屋だが、かなり大きな建物が竹矢来のなかにあった。

二人は河岸の渡し舟に乗った。渡し銭は一人三文。ちなみに馬は五文とのことだ。

対岸におりる。

少し歩くと、逆川をはさんで天守がだいぶ近くに見えた。
黙兵衛は飽かず、やや霞んだような日に照らされている天守を眺めていた。
四半刻ほど見続けていただろうか、黙兵衛が唐突に歩きだした。
どこへ行くのか、と伊之助がついてゆくと、入ったのは一軒の蕎麦屋だった。
「なんだ、おなかが空いたんですかい」
伊之助もほっとしている。刻限も九つをとうにすぎ、空腹は耐えがたいものになりつつあったからだ。
「なににしますか」
あいたばかりの縁台に腰かけた黙兵衛の隣に座って、伊之助はきいた。
「蕎麦でしたら、やはりざるですかねえ」
それでよい、と黙兵衛が告げた気がした。
茶を持ってきてくれた小女に、ざるを四枚注文した。紅い頬が目立つ小女は、元気よく、ありがとうございます、と注文を通しに厨房のほうへ去っていった。
「音無の旦那は蕎麦切りがお好きなんですか。あっしは大の好物ですよ」
伊之助は茶をすすって、まわりの客を見た。
「いい店のようですね。みんな、目を細めて食べてますよ」
腹の虫が鳴った。
蕎麦は色が濃くて太く、ややかためだった。腰がそんなにあるほうではないが、噛むと甘みがじわっと出てきた。つゆは辛めで、この太い麺とよく合った。
「うまいですねえ」
伊之助は思わず話しかけた。黙兵衛は黙々と箸を動かしている。
食べ方は堂に入っていて、もともと蕎麦切りが相当に好物なのが知れた。
伊之助は満足して蕎麦屋を出た。代はむろん伊之助が支払った。
それから黙兵衛は、水関所のあるあたりを動きまわった。
伊之助が見たところ、水関所ではすべての舟がとめられ、荷と人があらためられていた。人のほうは、特に江戸とは逆に向かう女の調べが厳しいようだ。
出女だ。そのあたりのことは、伊之助もこの近くの生まれだからよく知っている。
水関所のそばを離れた黙兵衛はまた舟に乗り、今度は境河岸のほうに向かった。
こちらは水関所のあるところより、さらに盛況だった。米俵を満載して利根川をこれから江戸に向かう高瀬舟、逆に荷をあまり積んでいない銚子のほうへくだってゆく舟、人を一杯にのせて江戸へ漕ぎだす舟などが流れにたくさん浮かんでいる。
これまで高瀬舟など何度も目にしているが、やはり近くで見ると帆柱の高さには圧倒される。高瀬舟も、大高瀬、中高瀬、小高瀬とあり、大高瀬ともなると千二百俵もの米を積める。大高瀬の帆柱の高さは、六間以上あるのではないか。
境河岸はもともと江戸にまわされる米をいったん集積する場所になっており、これまで見た河岸のなかでは、最も多くの蔵が建ち並んでいた。

黙兵衛は、境河岸からなかなか離れようとしなかった。

旅人や行商人だけでなく、気の荒い人足などが行きかってあたりは喧噪に満ちており、ときに怒号などがきこえてきたが、そういう雰囲気をむしろ楽しんでいるようなところが感じられた。

境河岸には河岸を南北に貫く一本の街道が通っており、それが日光東往還であるのを伊之助は知っていた。

その街道沿いに、名のある河岸問屋がずらりと並んでいた。

そのなかでも、一際大きな二つの河岸問屋が境河岸にはあった。小松原家と青木家という河岸問屋だ。

二軒とも、竹矢来のような塀をぐるりにめぐらせてあった。母屋も巨大で、相当の奉公人が働いているのが察せられた。

「千宏屋と同じくらい広いですねえ」

いくつもある蔵に、どれだけの富が積まれているのか見当がつかない。

黙兵衛はさらに歩きまわった。

いつしか日が暮れはじめようとしていた。

もう古河に帰るのかな、と伊之助が思ったとき、またも黙兵衛は関宿城へ近づいていった。目指しているのは大手門のほうだ。

下城してきた侍たちとすれちがう。なんだこいつら、という顔を誰もがするが、伊之助は

ていねいに会釈するのを忘れず道を急いだ。

咎められることもなく、大手門近くまでやってきた。

またも黙兵衛は関宿城を眺めはじめた。

午前に南に見えていた雲は気づかぬうちにどこかに去り、空は晴れ渡っていた。

城は夕焼けを背景に黒い影として見えており、伊之助になんとなく戦国の頃のことを思い起こさせた。

古河や関宿は国境近くに位置しているだけあって、北条氏や上杉氏、他の土豪たちの争奪の場となった。この場でいったいどのくらいの武者や兵が死んでいったのだろう。その声なき者たちの声がわきあがってくるような気がして、思わず身をぶるっと震わせた。

黙兵衛は身じろぎ一つせず、一心に城を見つめている。修行僧のような厳しさが全身を包んでいた。

もしや、と伊之助は気づいた。黙兵衛は関宿城に忍びこんでみたい、と思っているのではないのか。

むろん、いきなり久世の殿さまの首が取れるとは考えていないだろう。

関宿城がどういうところか、雰囲気でも知りたいのではないか。

しかし、黙兵衛は本気で大名の首を取るつもりなのだろうか。今でも伊之助には信じられない思いがある。

五万八千石の殿さまの首をどうやって取るというのか。

城に忍びこみ、豊広が暮らしているはずの本丸御殿まで行き、そこで殺すのか。殺したあと、どうやって逃げだすのか。

伊之助は目にしたことはないが、本丸御殿は広大な建物ときいている。もしそこまで入りこめたとしても、どうやって豊広の居場所を知るのか。

それに、豊広の警護はかたいだろう。

忍びこむんですか。

そうききたかったが、黙兵衛からにじみ出る気迫が伊之助を黙らせた。

黙兵衛からは凄みというべきものが感じられ、伊之助は背筋に寒けを覚えた。

堀を渡り、石垣をのぼり、塀を乗り越える。

できるのだろうか。いや、できるとは到底思えない。この城はいかにも難攻不落という感じがする。

日は西の空に没し、あたりはさらに暗くなった。黙兵衛が身じろぎし、つと堀にむかって歩を進めた。

伊之助はごくりと息を飲んだ。

しかし黙兵衛はすぐに動きをとめ、城をにらみつけた。くるりと体をひるがえし、城とは逆の方角へ歩きだす。

やめたのか。伊之助はあっけにとられかけたが、即座にあとを追った。

どういうことだろう。黙兵衛の背中を見つめて、考えてみた。

おそらく、どこにも忍びこめる隙を見つけられなかったのではないか。

実際、このあたりを歩いてみたところ、久世家中は引き締まっているように伊之助には思えた。そういうぴんと張った空気が城中からにじみだしているようだ。

伊之助が感じ取った空気が黙兵衛にわからないはずがない。いや、伊之助以上に敏感にとらえたのはまちがいない。

歩きながら伊之助には、掌中にしたように一つわかったことがある。

それは、いつ狙うにしろ豊広が他出したときしかない、ということだ。

三

よっこらしょ。

博造は濡縁に腰をおろした。背中から荷物をおろす。

「どうもご無沙汰しております」

座敷に集まっている五名の女中にていねいに頭を下げた。

「待っていたんですよ、博造さん」

歳がかなりいった一人が流し目をするようにいう。

「千宏屋さんは敷居が高いものですから、そうは来られないんですよ」

「嘘ばっかり。どこかよそにきれいな女の人がいるお得意さん、見つけたんじゃないんです

か」

「そんなことはありませんよ。手前は、皆さんのお顔を常に拝見したいと思っているんですけど、千宏屋さんの場合は大店が入ってくるでしょう。手前のような小商いの者は、そういう競りの激しいところはどうしても避けたくなってしまうんですよ」

「でも、どこよりも博造さんの品はいいし、安いから、みんな心待ちにしているんですよ。——ねえ」

ほかの四人がいっせいにうなずく。

安いのは当然だ。久世家から金が出ているからだ。さまざまなところから話をききだすためには、金がかかることを目付頭の平崎館左衛門は熟知している。

それにしても、この千宏屋の広さはどのくらいのものか。

おそらく一万石程度の大名屋敷では太刀打ちできまい。二町四方くらいは優にあるのではないか。とにかく信じられない広さだ。

この店にやってくる前、博造はまず寺社奉行の井上屋敷を訪ねようと考えた。

しかし井上収二郎は、仕事に関することは妻だけでなく家の者には一切話していないはずだ。井上屋敷に行ったからといって、なにも得られないのはわかりきっていた。

それに、博造が訪ねたことはすぐに井上収二郎に知れるだろう。今、収二郎に博造という名をきかせるのは得策ではない。

博造が千宏屋に狙いを定めたのは、この店が収二郎の妻の実家であるのも理由の一つだが、

江戸表から帰ってきた翌日、収二郎がこの屋敷を訪ねたことが知れたからだ。

収二郎はいったいなにをしに来たのか。

江戸で買い求めた土産を渡しに来たわけではあるまい。江戸屋敷で、主君の利直と会ったことに関係しているのではないか。

「博造さん、なに考えごとをしているんですか。おなごのことですか」

博造ははっとした。笑顔をつくる。

「とんでもない。手前にはそんな女などおりませんから」

「本当ですか」

「何人もこれまで泣かしてきているんじゃありませんの」

「まさか」

博造は紅やおしろいを次々に勧めながら、女中たちに問うた。

「そういえば、井上さまがお風邪を召したとかききましたが」

「えっ？　そうなんですの」

「ええ、手前はそうおききしましたけど。なんでも、こちらにお薬を取りに来た、と」

「そんなことはありませんよ。誰がそのようなことをおっしゃったんです」

「ただの噂ですよ」

「風邪って、この前お見えになったときもお元気でしたし、井上さまは薬を取りに見えたんじゃないですよ」

ねえ、と一番年かさの女中が他の女中に同意を求める。四人の女中は、ええ、と口をそろえた。

「そうなんですか。この前見えたときは奥方とご一緒に？」

「いえ、お供の方をお一人連れられただけでしたよ」

「では、おしのびですか」

「ええ、こちらでどなたかと会われたらしいんですよ」

なるほど、と博造は思った。そういうことか。

「そのお方はきっとおえらい方なんでしょうね」

「まあ、そうなんでしょうね」

「喜乃さん、あたし、きいたんですけど」

若い女中が一番上の女中にいった。

「井上さまが会われたのは、浪人さんらしいということを」

「えっ、浪人さんなの」

年かさの女中が驚いた声をだす。

「誰にきいたの」

若い女中にただす。

「お三江さんです。離れにお茶をだしに行ったそうなんです。ほかにも郡兵衛さんと三男坊の伊之助さんがいらしていたようです」

郡兵衛なら博造は知っている。古河の地まわりだ。子分は二十名ほどか。古河のなかでは最も勢いがあるといっていい一家だ。

「そう、その二人が一緒に」

年かさの女中がいった。

「その浪人さんが井上さまのお客で、郡兵衛さんたちは介添えみたいな形で来ていたようだって、お三江さんいってましたよ」

「その浪人さんですが」

博造は割りこんだ。

「どなたなんでしょう」

「さあ。でも井上さまが会われるなど、それなりのご身分の方なんでしょうね」

「その浪人さん、郡兵衛さんのところに厄介になっているんですか」

「そうなんでしょうね。この前、郡兵衛さんのところの賭場でなにかあったらしいですよ。そのことと関係しているんじゃないですか」

「なにかあったといいますと？」

「詳しいことは私も……」

ききたいことはききだせた、という思いが博造にはある。にっこりと笑みをつくった。

「この紅とおしろい、いかがです。今日は特別、お安くしておきますよ」

歓声があがる。

「いくらにしてくれるの」
博造は適当に告げた。
「えっ、そんなに。だったら私、その紅、三ついただくわ」
「私も三つ」
「私はおしろいをもらうわ」
紅とおしろいは瞬く間に売り切れた。
身軽になって千宏屋を出た博造は、古河を歩いた。明るい陽射しに照らされ、屋根や洗濯物がまぶしいほどだ。
横町柳通（やなぎどおり）という日光街道沿いにある町に行く。このあたりは料亭や一膳飯屋、煮売り酒屋、旅籠などが建ち並んでいる。旅籠は多くの飯盛女（めしもりおんな）を抱えていて、そのせいか、まだ昼間というのに町自体になまめかしい雰囲気が色濃く漂っている。
このあたりにいるはずだが。
博造は昼間からやっている煮売り酒屋の縄暖簾を払い、店内を見た。
いた。座敷の奥に座りこみ、空のちろりを振って最後のひとしずくをしぼりだそうとしているところだ。
「玉蔵（たまぞう）さん」
声をかけると、ぴくりと顔をあげた。
「おう、博造さんじゃねえか。ずいぶん久しぶりだな」

玉蔵というのは古河の町の遊び人だ。常に飲み屋の女などに食わせてもらっている。賭場にもよく顔をだしていた。
「一緒にいいですかい」
「もちろんさ」
玉蔵の顔には、おごってもらえるのでは、という期待が刻まれている。
博造はやってきた小女に、店で一番上等の酒を頼んだ。玉蔵の相好が崩れる。
やってきた酒を勧めて、博造は郡兵衛の賭場で起きたことをたずねた。
きき終えて、博造は顔をしかめた。そんなことも知らなかったなど、草としてはまったく失格だ。
玉蔵が語ったところによると、賭場荒らしを客の浪人が取り押さえたのだ。そして、その浪人は斬り殺された用心棒の座を、郡兵衛に請われた、ということらしい。
「その浪人はなんというんです」
「なんていったっけな」
玉蔵が首をひねる。空のちろりをうらめしそうに見る。
博造は新たに酒を注文し、杯に注いでやった。
「実をいうと俺も知らねえんだ。その浪人、まったく口をきかねえもんでな」
「口をきかない？　きけないんですかね」
「そんなことはねえだろうけど、これまで一言も口をきいていないのは確からしいぜ」

玉蔵は手酌で酒を注いでから、ぐびりと飲んだ。
口をきかない浪人か、と博造は思った。いったい何者なのだろう。

四

一晩寝たら、すっかり疲れは取れた。
久しぶりにあれだけ歩いて、古河に戻ってきたとき、伊之助はくたくただった。
庭におりた。朝日が低く顔をだし、樹間からまぶしい光を投げかけている。
伊之助は井戸端に行った。そこで顔を洗う。さっぱりした。
新しい手ぬぐいで顔をふく。顔の脂がきれいに取れて、気持ちよかった。
さくさくと土を踏む、軽やかな音がした。
伊之助が見ると、手ぬぐいを肩にかけた黙兵衛が歩いてくるところだった。
「おはようございます」
伊之助が元気よく挨拶する。黙兵衛がかすかに顎を引く。
伊之助は釣瓶を落とし、黙兵衛のために水を汲んだ。
黙兵衛が手ぬぐいを伊之助に預け、ざぶざぶ顔を洗った。洗い終えると、伊之助から手ぬぐいを受け取り、顔の水気を取った。
「疲れは取れましたか」

黙兵衛はなにもいわず足ばやに遠ざかってゆく。伊之助は急いであとに続いた。
黙兵衛は台所脇の部屋にやってきた。伊之助は隣に座った。
勢次が、おはようございます、と大きな声で挨拶した。伊之助も返す。
「今、膳を持っていきますから」
「ああ、頼むよ。勢次、今日のおかずはなんだい」
勢次が二つの膳を持ってきた。
「いつもと同じですよ。はい、どうぞ」
勢次は膳を置いた。
おかずは納豆にたくあん、梅干しだった。味噌汁の具はしじみ。
「しじみとはまた豪勢だね」
「親分から、精がつくものをって頼まれたものですから。伊之助さん、昨日は関宿のほうへ行ってきたんですってね。なにしに行ったんです」
気をつかってくれるのはうれしいが、親父もずいぶん口が軽いものだ。ここで勢次に本当のことをいうわけにはいかない。
「城下の見物さ」
「へえ。関宿って見物するようなもの、ありましたっけ」
「いろいろあるさ。行ってみると、けっこうおもしろいものだよ」
黙兵衛が納豆をかきまわし、飯の上にのせた。一気にほおばる。

伊之助も唾がわいた。かきまわした納豆に醤油を垂らし、飯と一緒に食べた。
嚙むと納豆がやわらかく潰れて旨みが飛びだし、飯と実に合った。芥子の辛さも旨みを増していて、箸はとまらなかった。
しじみの味噌汁も久しぶりに飲んだが、勢次の腕がいいのか、臭みはまったくない。しじみのだしが汁に溶けだし、ほう、とため息が出るようなうまさだ。
伊之助は満足して箸を置き、茶を喫した。
黙兵衛も両手で湯飲みを包むようにして茶を飲んでいる。姿勢がよく、その姿には侍というものが強く出ていた。
「音無の旦那」
伊之助は呼びかけた。
「お茶の心得もあるんですかい」
黙兵衛が茶を飲みほした。湯飲みを膳に置き、立ちあがる。
黙兵衛は自分の部屋に戻っていった。伊之助は黙ってついてゆき、閉められた障子越しに声をかけた。
「入ってもよろしいですかい」
返事がない。こういうときは顔も見えず、どうすればいいか困る。
すらりと障子がひらかれた。黙兵衛がさっさと部屋のまんなかに戻ってゆき、あぐらをかいた。

「ありがとうございます」
伊之助は一礼して敷居を越え、黙兵衛の向かいに正座した。
「ねえ、音無の旦那。本気なんですよね。あと戻りはしないんですよね。最も邪魔になりそうなのは、井上さまもおっしゃってましたけど、剣術指南役の横山佐十郎ですよね」
伊之助は姿勢を正した。
「あっしに横山佐十郎のことを調べることをお命じになってください」
がばと両手を畳についた。
「どうか、お願いします。あっしは旦那のお役に立ちたいんです。どうか、お願いします。あっしにやらせてください」
伊之助は顔をあげた。険しい表情にぶつかった。
黙兵衛はなにかを考えているようだ。鬢をかく。
一つうなずき、部屋の隅に置かれている文机から文具を取りだした。
墨をすり、筆にたっぷりとひたす。紙になにか書きつけはじめた。
やがてできあがったものを手渡してきた。
伊之助は目を落とした。読み書きは手習所で習っている。
横山佐十郎は一日なにをしているのか。久世豊広とずっと一緒なのか。一瞬たりとも久世豊広のそばを離れることはないのか。
そのようなことが紙につづられていた。

最後に、用心しろ、決して気取られるな、という言葉が記されていた。
「わかりました。注意します。必ずやり遂げてご覧に入れますから」
仕事を与えられ、伊之助はうれしくてならない。これで旦那の役に立てる。
これだけの仕事をまかせたということは、音無の旦那はおいらのことを買っているのではないのかな。
こう見えてもおいらは意外に勘働きがいいんだよな。だから旦那がなにを考えているか、わかるんだ。
「では、これからさっそく」
伊之助は立ちあがろうとした。その肩ががっちりと押さえられた。
明日からでいい、といっているようだ。
「そうですか」
なんとなく勢いをそがれた感があった。
「音無の旦那は、今日はなにをしようとお考えになっているんです」
黙兵衛の顔は、なにもしない、と語っていた。
「そうなんですかい。でしたら、お酒でも飲みませんか」
黙兵衛が妙な顔で見た。おまえみたいな若造が酒を飲めるのか。
「あっしは大酒飲みですよ。すごく強いですから」
伊之助は、自分の部屋から一升徳利を持ってきた。

この前、近くの酒屋で買い求めた酒だ。江戸から戻ってきた高瀬舟が積んできた。
くだり物。伊之助にとって、とっておき、といっていい。
台所に行き、湯飲みを二つ取ってきた。一つを黙兵衛に渡して、正座する。
さっそく二人で飲みはじめた。
とろりとした甘みの強い酒で、まさしくくだり物だ。これだけ甘い酒というのは、このあたりでは醸されていない。
「いかがです、この酒は」
一杯飲んだだけだが、伊之助はややろれつがまわらなくなっている。
黙兵衛はなにもいわず、一杯目を飲みほした。伊之助が注ごうとするのを断ろうとしないことから、この酒を気に入ってくれたらしいのはまちがいない。
「つまみがないですねえ。なにか持ってきましょう」
伊之助が立ちあがろうとしたが、黙兵衛が首を振った。
伊之助は再び正座した。どうやら肴はいらないたちのようだ。
それから伊之助は黙って酒を飲んだ。むろん、黙兵衛は一言も話さないから、酒を酌んでいるにしては静かすぎるほどだ。通夜のほうがはるかににぎやかだろう。
飲み進むにつれ、伊之助は酔いが完全にまわったのを感じた。
「音無の旦那」
伊之助はすでに膝を崩している。ぽんぽんと黙兵衛の肩を叩いた。

「横山佐十郎の調べをあっしにまかせたというのは、とても目のつけどころがいいですよ。すばらしすぎるほどです。あっしはがんばりますよ。見ていてください」

黙兵衛は黙って酒を飲み続けている。その表情はなにも変わらない。赤くなっているということもない。ただ、水のごとく酒を飲んでいる。

やがて一升徳利が空になった。伊之助は酔い潰れる寸前だった。

いや、すでに潰れているといってよかった。

いつしか畳に突っ伏していた。

それがふっと宙に浮いたような感じがあった。とても気持ちよかった。

子供の頃、といってもだいぶ大きくなっていた頃のことだが、ぐずって母親におんぶされたのを思いだした。

「母ちゃん」

伊之助はつぶやいた。とても幸せだった。

気がつくと、鳥のさえずりがしていた。伊之助はがばっと起きた。

布団に寝ていた。自分の部屋だ。

どうしてここに。昨日はどうしていたのだったか。確か、あの黙兵衛の部屋で飲みはじめたのだが。

そこから先の覚えが、幕を切り捨てたように消えてしまっている。

気分が悪かった。飲みすぎた。

伊之助はよろめくようにして立ちあがり、障子をひらいた。

新鮮な風が流れこんできて、少しは気分がよくなったが、黙兵衛に無礼な真似をしていないか、そのことが気になりはじめた。

五

誰がいいだろうか。

朝日が入りこむ座敷に座り、博造はしばらく考えた。

博造の住みかは、古河の町のなかではかなり閑静な一角にある。

武家屋敷町に隣接しているのが、静けさの最も大きな理由だろう。雀神社の参道がすぐそばを通っている。

脳裏にようやく浮かんだのは、一人の男。やつでいいだろうか。

ここからはかなり慎重にやる必要があった。

名は岩八。確か、やつは今一人の女にのめりこんでいる。小間物を売りに行った長屋で岩八を何度か見たことがあるが、そこは煮売り酒屋で働く女の住まいだった。

もっとも、その煮売り酒屋の女に岩八は世話になっているだけで、今は色を売り物にしている別の女に夢中になっている。

こいつはつかえるのではないか。

よし、と博造は決断し、風呂敷包みを背負った。女の長屋へ向かう。

長屋は永宮寺という、かなり広い寺域を誇る寺の西側にある。永宮寺というのは土井家の墓所ではないが、土井家の庇護は厚く、五十石もの寺領をいただいている。

郡兵衛一家というのは、子分にそれほどきつい一家ではない。郡兵衛自身がしっかりしているから今のところはよそに縄張を取られることなどないだろうが、下のせがれ三人がしっかりしているとはいいがたいところから、ややたががゆるんできている感じを博造は受けている。

一家の者も郡兵衛の家に入り浸っているというわけではなく、外で暮らし、適当になにか悪さをしては上納金を持ってゆく、というようなことをしている。

岩八もそんな一人だった。毎日必ず郡兵衛の家に顔をだしてはいるはずだが、常に家にいるわけではない。

郡兵衛の家で暮らしているのは、上位の者数名だけだ。

女のところにいてくれればいいのだが、と思いつつ、博造は足を急がせた。

長屋の木戸をくぐる。あまり風通しがいいとはいえず、すえたようなにおいが路地にうずくまるように立ちこめていた。

「ごめんください」

女の店の前に立ち、障子戸に向かって声をかけた。

はい、と女の声で返事があった。

「どちらさま」

どこか眠たげな声だ。

博造は名乗った。

「ああ、小間物屋さん」

からりと障子戸があいた。肩からずり落ちそうになっている着物を女があげた。

「今日はどうしようかな」

そういいながらも女の目は輝いている。やはり化粧道具には心惹かれるのだ。

「なんでも取りそろえてありますよ」

「こちらにどうぞ」

博造はあがり框に腰かけ、風呂敷をひらいた。紅を手に取る。

「これなどは今はやりですね。のびが自然で、皆さまのあいだでは、評判になってますよ」

博造は店の奥をさりげなく見た。

部屋は二つあり、襖に仕切られた右手に部屋がある。その襖が不意にあき、敷かれた布団が見えた。

四つんばいになった男が、顔をのぞかせる。

「おはようございます」

博造は如才なく挨拶した。

岩八が目をこすって立ちあがる。
「おう、博造かい。ずいぶん久しぶりじゃねえか」
目がとろんとして、まだ完全には起きていない。
「ええ、ご無沙汰しておりました」
「博造さん、あたし、この紅をいただくわ」
「ありがとうございます」
「おい博造、安くしてやれよ」
「もちろんでございます」
代を受け取った博造はあらためて岩八に目を向けた。
「岩八さん、これから一杯いかがです」
手首をひねってみせると、死んだような目にきらりと光が宿った。
「金がねえ」
「おごりますよ」
「いいのか」
「ええ、岩八さんにはいろいろと世話になっていますから」
岩八を連れていったのは、『石脇』という古河ではかなり名の知れた料亭だ。さすがにまだ四つ前だけに、三味線の音色や歌がきこえてくるというようなことはない。
今は、緑が深い庭の片隅に設けられた鹿威しの軽やかな音が耳に届くだけだ。

離れに連れてこられた岩八はまわりをきょろきょろ見まわしている。
「すごい座敷だな、こいつは」
岩八が驚くのも無理はなかった。四方を取り囲むすべてが金色一色なのだ。襖も壁も床の間も金箔で彩られている。床の間にかけられた筑波山がどうやら描かれているらしい掛軸も、金粉がたっぷりと塗られ、どこか別の山に見える。
博造は笑顔をつくった。
「趣味が悪いですか」
「そんなことはないさ。ちょっとびっくりしただけだ」
「さようですか。手前も岩八さんを驚かしてやりたくて、この部屋を選んだんですけど、うまくはまりましたね」
「そうかい」
「なんでもお好きなものを頼んでください」
「でもこんな刻限にやっているのか」
「やってますよ。朝からお酒を召しあがる方、多いじゃないですか」
「でも博造、本当にいいのか」
「もちろんですよ」
「博造、おめえ」
じろりとにらみつけてきた。なにか魂胆があるんじゃねえのか、といわれるのでは、と博

造は思い、じっと見返した。
「こんな店によく出入りしてるのか」
「いえ、そんなでも。二、三ヶ月に一度といったくらいですかね」
「けっこう来てんだな。俺は石脇の敷居をまたいだのははじめてだぜ」
「でしたら、楽しみにしといてください。どの料理もとても手がこんでいて、とにかくおいしいですから」
女中たちが次から次に料理と酒を運んできた。岩八はただ目をみはっているだけだ。
「まあ、どうぞ」
博造は徳利を持ちあげ、岩八の杯に注いだ。
「あ、ああ」
岩八が杯をそっと口に持ってゆく。そこで手をとめ、毒が入っているのでは、というような目で酒を見据える。
杯を傾け、ごくりと飲みほした。にっこりと笑う。意外にあどけない顔になり、この男が女にもてる理由がわかった。
「うめえな。はじめて飲んだよ」
博造も口にした。甘みはさほど強くなく、すうと喉をくぐってゆく感じが心地よい。果実を思わせる華やかな香りがたちのぼってきて、何度もこの酒を飲んでいる博造も幸せな気分に包まれた。

「どこの酒だい」
「灘ですよ。くだり物です」
岩八はだいぶ気持ちがほぐれたのか、料理にも箸をつけはじめた。
なにを食べても、うまい、うまい、しかいわない。
博造はさらに酒を飲ませた。
ほとんどの料理と酒を岩八が食べ、飲んだ。
「博造、もっと酒をくれ。どれも空だ」
岩八が徳利を振ってみせる。
「その前に、一つおききしたいことがあるんです」
「ききたいこと？　なんだ、はやくいえ」
博造は少し間をあけた。
「はやくいえよ、博造」
「今、そちらで用心棒をしているご浪人がいらっしゃいますね」
「浪人？　ああ」
「そのご浪人のことを知りたいんですが」
「どうして」
「知り合いが、捜している人に似ているらしいんですよ」
「知り合い？」

博造は首を振った。
「残念ながら申せません」
「そうかい」
博造は懐に手をやり、財布を取りだした。おっ、という顔で岩八が見る。
博造は一枚の小判をつまみだし、岩八に手渡した。
「豪気じゃねえか」
岩八は明るいほうに小判をかざした。
「ご浪人のことをもっと教えてもらえれば、岩八さん、もう一枚、差しあげますよ」
なに、という表情を向けてきた。
「本当か。話すだけでいいんだな」
博造はうなずいた。
賭場でのできごとを岩八が語った。
博造は手を振ってさえぎった。
「そいつはけっこうです。どうしてそのご浪人が雇われたのかは存じてますから」
「そうかい」
岩八は少し鼻白んだ顔になった。
「あの旦那はとにかく、ものすごい遣い手だよ。俺はあんなにすごい人、生まれてこの方はじめて見た」

実際、その日、岩八はその場にいて、浪人のすごさを目の当たりにしたのだ。どれだけの遣い手だったか、熱っぽく語った。
「ご浪人が千宏屋に行ったことは？」
「ああ、知ってるぞ」
「なにをしに」
「いや、そこまでは知らねえ」
表情からして、嘘はいっていないようだ。
「そのご浪人は今も賭場の用心棒をしているんですか」
「いや、もうやめたようだな。このところ顔を見せねえ」
「やめたのはいつです」
「五日ばかり前か。だから、あの旦那が賭場の用心棒をやっていたのは、正味三、四日だったな」
「あと釜は？」
「むろん見つけたが、これが役に立ちそうもねえ。この前の賭場荒らしみてえのが来たら、血祭りにされちまうな」
「用心棒をやめて、そのご浪人は今なにをしているんです」
「知らねえ。親分の家にずっといるけどな。でも、おとといはどこかに出ていたようだ」
「どこへ行ったんですかね」

「さあな」
「一人で出かけたんですか」
「いや、二人だ。博造、おめえも顔くらいは知ってるだろう、伊之助さんという親分の三男坊が一緒だった」
どうやら謎の浪人が用心棒をやめたのは、井上収二郎に会った直後なのがわかった。
ということは、と博造は考えた。浪人は収二郎からなにか依頼されたのではないか。
それはむろん、郡兵衛も承知しているのだろう。だから、家にそのまま住まうことを許している。
直感にすぎないが、この考えにまちがいはないように思えた。
それにしても、なにを依頼されたのか、気になってならない。
「博造、まだか」
不意に岩八がいった。手を差しだしている。
「すみません」
博造は岩八に小判を渡した。岩八は、博造の気持ちが変わるのを怖れるようにそそくさと自分の巾着にしまい入れた。
「岩八さん、そのご浪人について調べていただけませんか」
「旦那のことならなんでもいいのか」
「けっこうです」

岩八がいぎたない目を向けてきた。
「まさか、ただでやれ、というんじゃねえだろうな」
「手前も、知り合いからお足は受け取っています。十両でいかがです」
岩八の目が朝日でも浴びたように輝く。
「乗った」
すっかり満腹して満足そうな岩八は、女のところに戻る、といった。
「旦那のことは、明日から調べてみるよ」
それでかまわなかった。この酔い方では、たいした調べはできまい。酔っ払って下手を打たれるより、しゃんとしたときに調べてもらったほうがいい。
岩八とわかれた博造は一人、郡兵衛一家のそばまで行った。
日光街道に一度出て、鎌田家という本陣の角を左に折れた。
この道は江戸町通といい、通りの両側には料亭や煮売り酒屋、一膳飯屋、鰻飯屋、紙屋、菓子屋、判子屋などが建ち並び、繁華な町となっている。
そのにぎやかな通りの茶漬け屋の向かいに郡兵衛の家はある。
博造としては、謎の浪人の顔を見たかった。危険かもしれんな、と思いつつどうしても見たかった。
半刻ほど、江戸町通近くを行商して歩いた。こういうときに限ってなじみの女客などと会い、品物はよく売れた。

結局、七町近くの長さがある江戸町通を三往復したが、浪人が顔を見せることはなかった。少し残念だったが、いずれまた顔を見る機会はあろう、と思った。

今日顔が見られなかったのは、まだときがはやい、と神さまがいっているのだ、と博造は思うことにした。

六

昨夜、関宿での調べを終えて、伊之助は古河に帰ってきた。

すぐさま黙兵衛に調べてきたことを報告しようとしたが、体がいうことをきかなかった。いや、体よりむしろ心のほうが疲れ果てていて、部屋に戻るやいなや、楽しみにしていた湯屋に行くこともなく、布団に倒れこむようにして寝てしまったのだ。

目覚めると、すでに昼近くになっていた。障子に当たる日が明るく、風に踊り揺れる木々の影も濃いものになっていた。

起きあがり、着替えをした。部屋を出て黙兵衛を捜そうとしたが、その前に空腹に耐えられなくなった。

台所横の部屋に行き、勢次に食事を支度してもらう。三杯の飯を豆腐の味噌汁とともにかきこむようにして、腹を満たした。

あらためて黙兵衛を捜した。

二日のあいだ、黙兵衛は郡兵衛の家から出ずにいたようだ。

家どころか、部屋もほとんど出なかったと昨夜、伊之助はきいた。出たのは、飯を食うときと厠に行くときだけだったらしい。

近くに湯屋があるがそこにも行かず、夜、一人で庭で頭から水をかぶっているのを、子分たちは一度ならず見たという。

汗を流すためというより、どうすれば久世豊広の首をこの手で取れるか、その手立てを心に思い描いており、その熱を冷やすためだったのでは、と伊之助は察した。

それに加えて、深夜、剣の稽古をひたすら繰り返してもいたとのことだ。

鬼気迫る、というのはまさにああいうのをいうんでしょうね、と子分の一人は口にした。

黙兵衛は庭にいた。真剣を振るっている。昨夜きいた子分の言葉がはっきりとわかるほど、殺気というものが体に宿っていた。

目の前に誰がいるわけではないが、紛れもなく一人の男を思い描いて刀を振っているようだ。

その一人の男というのが誰か、いうまでもなかった。

黙兵衛が刀を鞘におさめるまで伊之助は近づかなかった。いや、近づくことなど怖くてできなかったのだ。

刀を振っているときの黙兵衛はとても大きく見えた。

鞘に刀がおさまった音がした。黙兵衛がゆっくりと振り向く。

唾を飲みこんで、伊之助は近寄った。
「ご苦労さまです」
なぜかそんな言葉が口をついて出た。
「音無の旦那、昨夜、戻ってまいりました」
黙兵衛がうなずく。
「調べてきましたよ」
伊之助は自信たっぷりに告げた。
くるりと黙兵衛がきびすを返す。どこへ行くのかと思ったら、濡縁に腰かけた。刀を鞘ごと腰から引き抜き、横に置いた。
伊之助は、失礼いたします、と隣に腰をおろした。なにから話すか、頭のなかで考えをまとめた。
「横山佐十郎はぽっと出ではありません。もともと久世家では譜代の家柄です。百二十石取りということですから、五万八千石の家中ならまずまずの家といえるのではないでしょうか」
伊之助はいったん言葉を切った。
「豊広公にじきじきに剣を教えているそうです。家中では不世出の天才との称号をうけているようです」
不意に、伊之助は体が渦にでも巻きこまれたように重くなった。

黙兵衛の全身から殺気が放たれているのだ。やり合いたい、との気持ちが心の奥底からわきあがってきているのが、目に見えるようだ。
黙兵衛が体から力を抜いた。鬼のような形相が消え、顔も柔和なものに変わった。
伊之助はようやくふつうに呼吸ができるようになった。侍というもののすさまじさに圧倒されている。
いや、侍というものに、ではなかった。黙兵衛だからこそ、ということなのだろう。
「横山屋敷は関宿城のすぐ近くにあります。場所は詳しくここでは説明できないですけれど、いつでも迷うことなくお連れできると思います。城に近い、この一事だけでも、横山佐十郎が家中で重要な位置を占めているのがおわかりになると思います」
黙兵衛がうなずく。
「豊広公は御年三十八。今は別邸に住まわせている側室がお気に入りとのことです。正室とは不仲のようで、夜をすごすのは今はほとんどが別邸とのことです」
伊之助は黙兵衛を見た。
「この道中、狙えるかもしれませんね」
黙兵衛は厳しい顔をしたままだ。
「豊広公が別邸に行くときは、必ず横山佐十郎がつくとのことです。――報告は以上です。二日かけた割に薄い内容かもしれませんけど、あっしができる精一杯はやりました」
黙兵衛が刀を腰に差す。すたすたと庭を歩きだした。

「お出かけになるんですか」
伊之助はあとを追った。
「どちらへ行かれるんです」
黙兵衛は目の前の江戸町通に出て、道を日光街道のほうへ取った。

どきりとした。
思わず博造は目をみはった。
郡兵衛一家の斜向かいの紙屋に入りこみ、小間物を店のおかみに売りつけているとき、いきなり背が高く、やせている浪人が郡兵衛の家を出てきたのが見えたからだ。
やつだ。はじめて見たが、まちがいない。身にまとう雰囲気に、これまで見たことのないような凄みが感じられる。
強いていえば、久世家の剣術指南役の横山佐十郎に似ているだろうか。
うしろに郡兵衛の三男坊が続いている。
目の前のおかみはどれにしようか、品物選びに迷っている。いくつかの櫛や笄、簪を手に取ってじっと見ていた。
「おかみさん、お代はけっこうです。そちらにある物、すべて今回に限り差しあげます。気に入った物があったら、またお買いあげください」
「ええっ、ほんとう?」

娘のように華やいだ声を背に紙屋を出て、博造は二人の姿を捜した。
いた。二人は早足で歩いているが、まだ一町も行っていない。
二人は日光街道を右に曲がっていった。
博造も街道に出た。多くの旅人が行きかっている。
まだ日は高く、この宿場で今日の宿を取ろうとする者は一人もいない。誰もが次の宿場を目指して足をはやめている。むろん、茶店などで足を休めている者の姿も目立った。
博造は用心には用心を重ねることにした。あの浪人はとんでもない遣い手だ。一町程度ではさとられる怖れがあった。距離をひらき、今はおよそ二町をへだてている。
これぐらいあけていれば、まず気取られまい。それに浪人の長身は一際目立った。
見失ってもかまわん、とも博造は思っている。行き先は関宿ではないのか。
直感でしかないが、まずこの見当ははずれてはいない、という確信がある。
日光街道は中田宿で利根川にぶつかり、対岸の栗橋宿に向かう渡し舟があるが、二人は渡し舟には見向きもせず、利根川沿いの道をくだりはじめた。
おそらく、と博造は思った。このまま境河岸まで行き、そこで渡し舟をつかって関宿へ赴くつもりなのではないか。
博造の勘は当たり、二人は利根川を横切る舟に乗りこんだ。
どうするか、と博造は悩んだ。一緒の舟に乗るべきか。
仕方あるまい。渡し舟はいくらでも出ているとはいえ、同じ舟に乗らなかったら、確実に

見失うだろう。ここまで来て、それは避けたかった。

二人とできるだけ離れて乗った。それでも油断はできない。

はじめて見たにすぎないが、あの浪人のような男の恐ろしさを博造は肌で知っていた。一度でも顔を見たら、決して忘れることのない男だ。

舟が岸に着き、二人はおりてゆく。また距離を置いて博造はつけた。

とはいっても、ここで二町もへだてるわけにはいかない。一町ほどまで近づき、できるだけ二人に視線を当てないようにしつつ、道を進んだ。

関宿城下に入ったものの、城のほうに行くことはせず、二人は城下を素通りした。どこへ行くのか、とさすがに博造はいぶかった。

やがて家々は姿を消し、道は細くなって田畑だけが広がるようになってきた。いくつかの林のそばに百姓家が散見できるのみだ。

日は白っぽいような光を放って、あたりを照らしていた。その光には、これから夏に向かうという力強さはほとんどなく、むしろ秋の日のような感じすらした。

この道は、と博造はようやく気づいた。久世家の別邸につながる道ではないか。

ほかにあの二人が行きそうな場所があるか、と博造は頭のなかを探った。

ない、というのが答えだった。となれば、もっと距離を取ったほうがいい。

行きかう人はぐんと少なくなり、このままではつけているのがさとられかねない。

博造は、路傍に立つ地蔵の脇に腰をおろした。腰に結わえてある竹筒を傾ける。体にしみ

通るようで、水は格別に美味だった。

二人の姿が十分に遠ざかったのを見て取って、博造は立ちあがった。腰に竹筒を結わえつけてから、ゆっくりと歩きだす。

案の定、二人は広壮な屋敷の前で足をとめた。門の前ではなく、門から東へ半町ほどはずれた杉の大木が五、六本かたまって生えているところに二人はいる。

一本の大木に身を隠すようにしている浪人が、鉄砲で狙っているかのような鋭い視線を送っているのが遠目でもわかった。

やはりなにかある。一本の欅の大木の陰にひそんで、博造は思った。

浪人から視線を転じ、別邸を眺める。ここには久世豊広気に入りの側室が住んでいる。

ほとんど毎晩、豊広はこの別邸にやってきているらしい。

そのことと関係があるのだろうか。関係があるとして、やつはいったいなにをしにここまで来たのか。

二人が杉木立から出てきた。さらに道を先に進んでゆく。

ついていきたいが、ここは一本道だ、やつらが帰ってきたら鉢合わせしてしまう。今二人が身をひそめていたところくらいしか隠れ場所はない。

今は我慢して、ここにいるのが最良のように思えた。

我慢の甲斐があったようだ。二人はすぐに戻ってきた。どうやら別邸の端のほうを見に行ったものらしかった。

博造は少しあわてた。どこに身を隠すべきか。浪人は目の前の道をやってくる。この欅の陰にひそんでいたのでは、確実に看破されるだろう。

どうする。二十間ほどうしろに、近くの百姓家がつかっているらしい小屋があった。農具でも入れてあるのだろう。

博造は欅を飛びだし、その小屋に向かって駆けた。

小屋の陰からうかがっていると、二人は早足に関宿城下のほうへ戻っていった。

おそらくあの足取りでは、と博造は思った。今日の目的は達したにちがいない。それならば古河に帰るのだろう。

よし、今日はここまでだ。

額にじっとりと汗をかいていた。額だけではない、全身が汗まみれだ。

こんなことは滅多にあることではない。それだけ神経をつかわされたのだ。

あの浪人の恐ろしさを、博造は身をもって味わわされた。

二人の姿がもうほとんど見えなくなったのを確かめてから、博造は城下への道を歩きはじめた。

七

あと四半刻ほどで日が暮れる。

一日がたつのははやいなあ、と伊之助は感慨めいたものを胸に抱いた。

関宿の町は橙色に覆われようとしていた。やけに明るい夕日が西の空にある。

中天にあるうちは夏に向かう太陽とは思えない弱々しさが感じられたのだが、大きく傾いた今は一転、明日もずっと照らしてやるからな、といいたげな力強さがある。

伊之助たちがいるのは、関宿の河岸のそばの鰻飯屋だ。いくつかの縁台が道にはみだすように出ていて、二人はそこに腰かけていた。

鰻飯を食べている最中だ。古河は渡良瀬川でとれる鰻が有名だが、ここ関宿は利根川や逆川でとれるものが名物となっている。

「おいしいですか」

伊之助は小声できいた。

まあまあだ、と黙兵衛の顔は語っているようだ。

代を払い、伊之助たちは関宿を引きあげることになった。

鰻屋にやってくる前に伊之助たちは城下や河岸をめぐり、さまざまな噂を仕入れた。

久世豊広という殿さまは、ずいぶんと風雅な人といっていい。まさに風流人だ。

鷹狩（たかがり）、野点（のだて）、遠駆け、船遊び、歌詠み。そういう趣味を持っているという。

そういう殿さまを上に戴いているのが誇りなのか、話をきいた町人たちはずいぶんと口がなめらかだった。

これなら別邸でなくとも、と伊之助は思った。豊広を狙えるときはやってくるのではない

か。

少なくとも、城内とはくらべものにならないほど狙いやすいのは事実だろう。豊広がどこへ行くにも横山佐十郎はぴったりくっついてくるだろうが、二人を引き離すことさえできればいいのだ。そうすれば最大の障壁はなくなる。

もっとも、それが最もむずかしいものであることに、伊之助はすでに思い至っている。

鰻飯屋をあとにした伊之助たちは、境河岸に向かう渡し舟が出ている船着場に行こうとした。

だが、行く手を役人と小者にさえぎられた。総勢で十七、八名ほどか。

股引に草鞋履きの小者たちは、六尺棒や刺叉を手にしていた。明らかに捕物だ。

一瞬、まさか露見したのかとの思いが浮かんだが、それはいくらなんでもないだろう、と伊之助はすぐさま心のうちで否定した。

それでも、怖さが足のほうから這いのぼってきた。体が震えている。

「どういうことですか」

伊之助は必死に声を張った。

「我らは、賭場荒らしや押しこみをしている浪人どもの探索をしている」

頭らしい役人がいう。

「奉行所に来てもらおう」

口調に有無をいわさぬ強さがある。

「その浪人なら、古河でとらえられたときましたけど」

「古河で？」

ぎろりとにらんできた。

「おぬしら、古河の者か」

伊之助はちらりと黙兵衛を見た。その表情からはなにもつかめなかった。

「はい、そうですけど」

隠したところで仕方がない。伊之助は腹を決めた。

「なにしに来た」

「名物の鰻を食べに」

「鰻なら古河でも食べられるだろう」

「関宿の鰻は格別うまい、ときいたものですから。でも、たいしたことはなかったですね。古河のほうがうまかったですよ」

一瞬、役人はむっとした。

「そうか。なら、今度はそれがしが古河に食べに行ってみよう」

「いつでもおいでください。手前がうまい鰻飯屋を案内してもいいですよ」

「話を戻すが、賊が古河でとらえられたとの話は、まだこちらには入っておらぬ。来てもらおう」

伊之助はまた黙兵衛を見た。

黙兵衛の表情には、逆らうことはない、と記されているような気がした。

殺すか。

目付頭の平崎館左衛門は天井を見つめて、思案した。

あれはなにか企んでいる男だ。まちがいなくそうだ。博造の勘は正しい。なにかやらかす前に、始末してしまったほうがいい。どうせ名を名乗ろうともしない浪人だ。ここで死んだからといって、文句をいう者もおるまい。

仮にいたところで、なんとでもなろう。

とらえた二人は、町奉行所の穿鑿所（せんさくじょ）に入れてある。

二人ともおとなしくしている。ただし、しゃべるのは若い男だけで、浪人のほうはまったく話さない。

博造からきいてはいたが、館左衛門にとって、それがどうにも不気味でならない。殺してしまったほうがいいのでは、という思いは、その沈黙からもきている。

左側の廊下からかすかな足音がした。とんとん、と板戸が忍びやかに叩かれる。

館左衛門はひらいた。

そこに立っていたのは横山佐十郎だった。

「使いはいただきました。ありがとうございます。さっそくまかり越しました」

「ご苦労だったな。見るか」

うなずいて佐十郎がせまい部屋のなかに入ってきた。

館左衛門は縦が一寸、横幅が三寸ほどののぞき窓を示した。

のぞき窓は上にひらくようになっている。

音もなくあいたのぞき窓から、佐十郎が穿鑿所のなかを見る。矢を射るときのように、視線をじっと動かさない。

やがて一歩うしろに下がり、のぞき窓を閉じた。ふう、と疲れたような吐息。

「とてつもない腕の持ち主といってよいでしょうね」

佐十郎が館左衛門にいう。

「やはりそうか」

館左衛門は佐十郎を見据えるようにし、低い声でつぶやいた。

「……殺すか」

佐十郎は下を向き、しばらく考えている風情だった。目をあげ、館左衛門を見つめる。首を横に振った。

「今は解き放つしかないでしょう」

予期しない言葉だった。館左衛門は思わず目をみはった。

「やつがなにかを企んでいることに、疑いの余地はないぞ」

「かもしれません」

「それでも解き放つと？」

「ええ」
館左衛門はにらみつけた。
「かまわぬのか。あとで後悔するようなことにはならんだろうな」
佐十郎が唇の端に笑みを浮かべた。
「ご心配なく」
この男、いったいなにを考えている、と館左衛門は苛立った。
剣の遣い手というのは、ふつうの者とは頭のめぐりがちがうのだ。不意に、目の前に立つ男の思いがわかった気がした。
この男は、あの浪人をこんなところで殺すのは、あまりにもったいないと考えているのではないか。
一対一でやり合ってみたいのだろう。あの浪人は、将軍御前試合で戦った笹田八之丞とは段ちがいに遣えるのだろう。
この男を呼ばず、わしの一存で殺してしまったほうがよかったのではないか。
館左衛門は大きなしくじりを犯したような気分になった。

八

戻ったのは夜おそくだった。

「なにがあった」
開口一番、郡兵衛が声を放った。
「心配したぞ、とうに帰ってこなければならん刻限になっても帰ってこんのだから」
「とっつあん、すまなかったね」
居間に入った伊之助は疲れきった顔でいい、関宿でなにがあったか、父親に説明した。
「そうか、そんなことがあったのか」
郡兵衛が黙兵衛を見る。
「旦那は別にお疲れではないようですね」
伊之助が見ても、どこにも疲労の跡はない。むしろ表情には生き生きとしたものがある。
これはいったいなんなのか。どうしてこのような顔をしていられるのか。
この表情を、と伊之助は思った。一度どこかで見たことがある。
どこでだったか。
思いだした。あれは、千宏屋の離れだ。井上収二郎とはじめて会った席。
収二郎が横山佐十郎のことを、最大の障壁、と評したときだ。あのとき黙兵衛の顔はうれしさに輝いたのだ。
あれは、横山佐十郎というすごい遣い手とやり合える剣士としての喜びのあらわれだったはずだ。
今、黙兵衛は横山佐十郎という男を見てきたような顔をしている。

どういうことだろう。
しばらく考えて、伊之助は思い当たるものがあった。
まさかこの人は、本当に横山佐十郎と会ったのではないか。もしそうだとして、どこでなのか。
あるとしたら、町奉行所に連れていかれたときだろう。
奉行所内には侍がたくさんいた。あのなかに横山佐十郎がいたのだろうか。
伊之助にはどれが横山佐十郎なのか、見極める目などないが、黙兵衛にははっきりとわかったのだろう。

「お疲れのようですね」
岩八が徳利を傾ける。
「かなり疲れたけれど、一晩寝たらだいぶよくなったよ」
伊之助は杯で受けた。すぐに徳利を岩八から受け取り、注ぎ返した。
「畏れ入りやす」
岩八が頭を下げる。杯を掲げる仕草をしたあと一気にほした。
「ああ、うめえ」
伊之助もくいっと飲んだ。
「こいつはまた上等な酒だね」

「当たり前じゃないですか。ここをどこだと思っているんです」
料亭石脇だ。古河では五指に入る名店といっていい。
伊之助は飲みに誘われたとはいえ、まさかこんな立派な店に連れてこられるとは思っていなかった。
今いるのは、離れだ。まわりが金で、目がくらみそうなくらいまぶしく輝いている。
「こいつはすごいね」
伊之助は杯を膳の上に置いてから、部屋を見渡した。瞳を動かし、岩八を見つめる。
「しかし岩八、どうしておまえさんがこんな店を知っているんだい。おいらははじめてだし、とっつあんにしたって、そうは来たことないはずだよ」
岩八が笑う。どこかずるさを覚えさせる笑いだ。
「たまたま知り合いがいましてね」
「知り合い……この店の者かい」
「いえ、ちがいます」
「どんな知り合いなんだい」
「それはちょっとご勘弁を。伊之助さんにもいえないんですよ」
「ふーん、そうかい。でも気になるね」
岩八が、どうぞ、と徳利を傾けてきた。伊之助は杯で受け、一息に飲んだ。
「しかしうまいね、この酒は」

「なんでも灘の酒らしいですよ」
「おいらもくだり物はけっこう飲んでるけど、こんなうまい酒ははじめてだよ。なんて酒だい」
「あっしも知らないですねえ」
そうかい、と伊之助はいって、岩八がまた酒を注いでくれた杯を口に持っていった。
「でも珍しいことがあるね。おまえさんがおいらを誘うなんて。いや、珍しいどころじゃないね。はじめてだろう」
「たまにはいいじゃありませんか」
「なにか魂胆でもあるのかい」
「別にそんなものはありゃしません。ただ、あっしが一家のなかでなんとかやっていられるのも、伊之助さんのおかげと思っているものですから、その恩返しと思っていただいてけっこうですよ」
「恩返しねえ」
世話した覚えなど一度もない。どころか、これまで会話をかわしたことすらほとんどないのではないか。
なんとなく警戒の気持ちがわいてきた。なんといっても昨日、久世家に二刻ばかり留め置かれたばかりなのだから。
いや、いくらなんでも考えすぎか。この岩八が久世家と関わりがあるはずがない。

「もっと飲んでくださいよ」
岩八が酒を勧めてくる。この酒のあまりのうまさに伊之助から警戒の心など、どこかに飛んでいってしまった。
「昨日、伊之助さん、どちらにお出かけだったんです」
「岩八、そいつはいえないよ」
「そうですかい。あの旦那と一緒だったらしいですねえ」
「どうだったかな」
また警戒の気持ちがむくりと起きあがった。
「なんでそんなこと、きくんだい」
「いえ、興味ですよ。だってあの旦那ってものすごい遣い手の上、一言も話さない謎の男なんですから。その旦那の気持ちが唯一わかる伊之助さんにいろいろききたくなるというのは人情でしょう」
気持ちが唯一わかる男、といわれて伊之助はうれしかった。
「もっと飲んでくだせえ」
岩八が勧める酒を、伊之助は次々に飲んだ。
「岩八、あんまり飲ませないでくれよ。今おいら、とても大事なことに関わっているから、あんまり酒を飲んじゃ駄目なんだよ」
岩八が目を光らせたように見えた。

「大事なことってなんです」
伊之助は岩八を見返した。先ほどの光はもう見えなかった。
「いえないよ」
「そうですかい」
岩八が徳利を差しだしてきた。
伊之助は、飲めば飲むほど酒がうまくなってゆくのを感じた。目の前の徳利を奪い取り、一気に飲みほしたい気持ちになった。
岩八が笑っている。どこからか芸妓の三味線らしい音が届く。歌声もかすかに響いている。どっと弾けるような笑い、媚びを含んだような女の忍びやかな声。
酒を飲むと耳が敏感になるのか、そういうものが伊之助はよくきこえるようになる。
ただ、これは潰れる寸前の合図ともいえた。
この前、黙兵衛と飲んだときもそうだった。
ああ、と今頃になって伊之助は思いだした。やせているのに広くてがっちりとした背中。あのとき部屋に連れていってくれたのは、黙兵衛だった。
「どうしたんです、伊之助さん。ずいぶんとうれしそうですねえ」
岩八が笑いかける。さらに酒を勧めてきた。
「もうおいらは飲めないよ」
しかし、そういいながら杯を口に運ぶ自分がいる。

甘くてとろりとしたものが口中を満たす。ああ、うめえ。
伊之助の意識はぶつりと音を立てて切れた。

九

長い廊下だな、と井上収二郎は思った。
とんでもない長さだ。おそらく一町近くはあるだろう。
どうしてこれだけの長さが必要なのか、収二郎には理解できない。他の城にもこれだけ長い廊下があるのだろうか。
目の前を、背中を見せて歩いている小姓もわかってはいないだろう。
ようやく目当ての部屋に着いた。敷居際に小姓が膝をつき、なかに声をかける。
「入れ」
苛立ったような声が返ってきた。
いや、まちがいなく苛立っている。
襖がひらかれる。収二郎は一礼してから、なかに入った。
畳なのに、板のようにひんやりとした感触が足の裏に伝わってきた。
座敷は閉めきられていた。畳はまったく日の恩恵を受けていないのだ。
庭に面している障子は閉じられている。大行灯が二つ、灯されている。

あければいいのに、と収二郎は障子のほうに目を向けることなく思った。
座敷は酒くさい。主君の利直はまたも飲んでいるのだ。
収二郎は利直の前に膝行し、平伏した。
「お呼びにより、まかり越しました」
「うむ」
利直は鼻息荒く答えた。杯をぐいと傾け、一気に干す。
杯をうしろにいる小姓に突きだす。小姓があわてて酒を注ぐ。
杯を口に運ぶ。その手を不意にとめた。
「収二郎」
鋭く呼びかけてきた。
「まだか。まだやつを殺れぬのか」
「どうかお静かに」
利直は咳払いした。
「人払いしたほうがよいか」
「御意」
利直が手を振る。二人の小姓が、失礼いたします、と襖の外に出ていった。
「はやくやつの首を持ってこぬか」
襖が閉まるや利直がいう。

「やつの首というのは、誰のことでございましょう」
「知れたこと」
利直がにらみつけてきた。
「横山佐十郎だ」
「さようですか。まだその気にはなられませぬか」
「当たり前だ」
「しかしかのお方を亡き者にすれば、老中の座が誰のものになるか、自明でございましょうに」
「老中か……」
「老中は、元服前からのご念願ではないですか。いつか祖父上を超えてみせる、とおっしゃっていたではないですか」
祖父というのは、二代前の利孝のことだ。老中として幕政に関わり、辣腕を振るった。十年ほど前に亡くなったが、今でも土井家中では崇拝する者が多い。
「祖父か……」
利直は思いだす瞳をしている。
「確かに申したな」
収二郎は膝を一歩進めた。
「その思いは、もはや消えてしまわれたのですか」

「無礼なことを申すな。余が忘れるわけがなかろうが」
「でしたら、かのお方を亡き者にすること、ご同意なされませ。いえ、この収二郎に、是非ともお命じくださりませ。あの者の首を取ってまいれ、と」
むう、とうなって利直が脇息にもたれた。瞳は迷っている。
だが、うなずくのはときの問題だ、と収二郎はさとった。
利直が顔を突きだし、低い声でただす。
「収二郎、本当に取り潰されるようなことはないのだろうな」
来た、と収二郎は思った。
「決して害が及ぶことはございませぬ」
そうか、と利直は考えに沈んだ。ただし、瞳に先ほどまであらわれていた迷いはない。もう決断しているのだ。
「収二郎、すべてまかせる。余に、老中の地位を与えてくれい」
そういってくれるのを収二郎は信じた。
「は。ありがたき幸せ。力の限り、やらせていただきます」
しかし利直の口から出た言葉は、待て、というものだった。
「よいか、収二郎、勝手な真似は許さんぞ。わかったな」
収二郎は利直の前を辞した。
今頃は高揚した気分が体を包んでいるはずだったのに、と思うと、よけいにがっくりした。

帰りの廊下はもっと長かった。
城内で行き合った者たちは収二郎の顔を見て、一様にそっぽを向いた。なかには唾を吐くのでは、と思えるような顔をする者までいた。
そんなことは慣れっこだが、今の収二郎にはかなりきいた。
しかしどうする。今日も殿の許しは得られなかった。
いや、ここでとまってたまるか。ことは進め、必ず殿から了承を得てやる。
事後に承諾をもらってもよい。そうすることで老中への道がひらけるのなら、利直は喜んで了承するだろう。
そうなれば、俺は出世の街道を突き進んでやる。さっきさげすむような目で見たやつらを、必ず見返してやる。
城を出たときには、空は厚い雲に覆われていた。太陽の位置を捜したが、どこなのかうかがい知ることはできなかった。
風が出てきている。雨を呼ぶような風で、湿り気が感じられた。付近の木々が揺れはじめている。ねぐらに帰るらしい数羽の烏の姿が眺められた。
もう日が暮れるのか、と収二郎は思った。いや、日は傾いているのだろうが、まだ夕暮れの気配は感じ取れない。
烏が帰ってゆくのは、やはり雨の気配をさとっているからだろう。
そんなことを考えているうちに、雲はさらに厚みを増してきた。

「雨になりそうですね」
従者の回之助が雲の動きを見て、いった。
「うむ、急ごう」
主従ははやい足取りで屋敷に向かった。
屋敷に帰るよりも、と収二郎は歩きながら思った。まずあの名無しの浪人に会い、どういう状況になっているかきいたほうがいいだろうか。
そうすべきだったが、今はなによりも妻の顔を見たかった。
どうしてこんなことを思うのか。やはり疲れているのだろうか。
その通りなのだろう。妻のおひさに自分の考えを話したくてならないのだ、と収二郎は気づいた。
苦笑を顔に刻む。そんなことができるわけがない。
もし豊広公の闇討ちなどと耳にしたら、おひさは卒倒してしまうだろう。
門をくぐり、玄関に入る。ここで回之助が、これにて失礼いたします、とそばを離れていった。
屋敷が寺社奉行の役宅となっているが、家臣の数はさして多くない。もし探索や捕縛などで手が足りないときは、与力として他家から借りることになっている。
ただ、他家の手を煩わせるほど寺社奉行としての仕事は多くない。むしろ暇といってよかった。それが収二郎には不満だった。

「お帰りなさいませ」
式台でおひさが両手をそろえている。
「うむ、ただいま戻った」
おひさの顔を見た途端、収二郎は幸せな気分に包まれた。
刀をおひさに預ける。廊下を歩き、自分の部屋まで来る。
着替えをおひさが手伝ってくれた。
「なにかいいことでもございましたか」
おひさが見あげてくる。
「どうしてそう思う」
だって、といっておひさがくすりと笑った。笑うと右の頬にえくぼができる。そのせいで、いまだに若く見える。目尻のしわもそんなに深くはなっていない。
目が生き生きと輝いて、とても美しい。ここで抱きたい、との思いを収二郎は持ったが、さすがに押し殺した。
「お顔がうきうきされていますもの」
収二郎はつるりと顔をなでた。
「別にいいことなどなかったのだが」
「そうですか。でしたら、私の勘ちがいかもしれませんね」
収二郎の着物をおひさがたたみ終えた。相変わらず手際がよく、きれいなたたみ方だ。

「お食事になさいますか。それとも汗をお流しなりますか」
「そうだな、風呂にしよう」
もうわいていた。たっぷりとした湯に存分に浸かり、収二郎はほっとした。
いい嫁をもらったものだ、と湯船で顔をざぶんと洗った。
出会いは八年前、利直が城内本丸の庭で主催した野点だった。その野点は、関宿の久世豊広が催したときいて、利直がほとんど真似したものだった。
一通りはできるものの、茶の湯にほとんど興味はなく、収二郎にとって退屈きわまりない野点だった。
それでも重臣たちや主だった家臣は茶の趣味を持つ者が多く、利直を軽んじているとはいっても、いずれも楽しそうにしていた。
収二郎は重臣や家臣のそういう顔を見るのもいやで帰りたくてならなかったが、利直からつかず離れずという場所に常にいた。
帰らずにいたのは、収二郎に一つの目的があったからだ。
それは千宏屋の娘、おひさだった。どうしても近づきたかった。
しかしどこにいるのか、わからなかった。そんなとき、声をかけてきた者があった。
「召しあがりませんか」
それがおひさだった。収二郎は声を失った。
その後、収二郎はすぐに縁談を申し入れた。誰も介さず、自ら店に行った。

最初は乗り気ではなかった千宏屋も、収二郎が利直の寵臣であるのを知って、すぐに了解してくれた。
知り合ってから縁談の成立まで、ほんの二月ほどしかかからなかった。
おひさも収二郎を見て、この人のお嫁さんになりたい、と一目見て思ったそうだから、運命といえば運命だったのだろう。
お嫁さんになりたいか、と収二郎は思った。いかにも町娘という感じだ。武家の娘ではこんなことはまず思うまい。
しかし、おひさを嫁にしたことで、家中の者からさげすまれることにもなった。金目当て、という言葉がついてまわることになったのだ。武士の風上にも置けぬやつ、そういうふうにもいわれている。
なんといっても、千宏屋は土井家に莫大な金を貸しつけているのだ。ときに政(まつりごと)を司る重臣にも辛辣(しんらつ)な言葉を発したりすることがあり、家中では千宏屋に対し、苦々しい思いを抱いている者も多い。
よりによって千宏屋か、という気持ちが収二郎に向けられているのだ。千宏屋の力を背景に、軽輩の分際で出世の階段をのぼろうとしている鼻持ちならぬやつ、と見られている。
いいたいやつにはいわせておけばよい、と収二郎は考えている。この世は、成りあがった者の勝ちなのだ。
「あなたさま、起きていらっしゃいますか」

板戸の向こうからおひさの声がした。長湯になり、湯船で寝ているのではないか、と心配して見に来たのだ。

「ああ、起きている」

「お背中流しましょうか」

昨夜もやってもらったばかりだが、今日も甘えたい気分だ。

「頼む」

板戸がひらき、袖と裾をたくしあげたおひさが入ってきた。

十

頭が重い。

伊之助は目を覚ました。

天井が目に入る。見慣れた天井だ。

頭を抱えるようにして起きあがる。どうして頭がこんなに重いのか。ふつか酔いだ。覚えがない。でもこの感じは何度も経験している。

そうか、と思いだした。昨夜は、名料亭石脇で岩八と飲んだのだ。

頭がそんなに痛くないのは、きっといい酒だったからだろう。

また潰れてしまったようだ。しようがないなあ。酒はいつまでたっても強くならない。

伊之助は布団から出ようとした。

しかし、まだ横になっていたい気分だった。寝床でぐずぐずしているのは好きだ。

伊之助は顔をしかめた。ふつか酔いのことではなく、なにかいやな気がしてならない。

なんだろう、この気持ちは。

考えたが、わからなかった。

いや、あのことかな。

思い当たったのは、関宿で町奉行所に留置されたことだ。

あれはいったいなんだったのか。

どこかへ行ってしまっていた枕を捜し当て、伊之助は頭の下に置いた。天井を見つめて、あらためて考えてみる。

なんとなくだが、久世家側に漏れているのでは、という気がする。実際、奉行所に押しこめられていたときもそう考えていた。

だから関宿からの帰り道、誰かがつけていないか、ずっと注意していた。しかし何者の姿も見えず、気配も感じなかった。

仮に漏れているとしても、久世豊広の命を縮めることを黙兵衛はやめはしないだろう。

一見、やさ男に見えるが、実は相当の一徹者なのではないか。漏れている——その程度のことでこの企てをやめるはずがなかった。

豊広が城から出たところを狙う。それしか手立てがないのは確かだ。

利根川を行くおびただしい舟を見て、気がついたのだが、豊広が好きな船遊びというのは、おもしろい、という気がしている。これはつかえるのではないか。

このことをいってみようか。そう思って起きあがろうとしたとき、障子に人影が映った。やせた影だ。

「あっ、旦那」

伊之助はあわてて立ちあがり、障子をひらいた。

「おはようございます」

伊之助は挨拶して、黙兵衛を見た。

「どうされたんです」

表情を見る限り、なにかいいたいことがあるようだ。

とにかく伊之助は布団をたたみ、壁際に押しやった。そこへ黙兵衛を座らせる。

座布団は、と思ったが、もともと武家というのは座布団の習慣がないからその必要はないのに気づいた。

「ちょうどよかったです。一つ思いついたことがあって、それを旦那に話そうと思っていたところだったんです」

伊之助はさっそく語った。

きき終えて、黙兵衛が深くうなずいた。目に深い輝きが宿っている。どうやら伊之助と同じことを考えていたようだ。

そのことを黙兵衛は伝えに来たのか。いや、それだけでは来ないだろう。

なにかいいたくて、来たのはまちがいない。それはなんなのか。

伊之助は必死に頭をめぐらせた。

そうか、とひらめくものがあった。

「船頭ですね。腕のいい船頭を捜せ、とおっしゃりたいんですね。それに、金で口をつぐむような男じゃなきゃ、駄目なんですね」

黙兵衛が、心当たりは、ときいているような気がした。

「ありますよ。まかせてください」

本当はなかった。だが、必ず捜しだしてやる、という思いで心は一杯だった。

まかせた、というように黙兵衛がうなずいた。ただし、眉をひそめている。

伊之助は気づいた。部屋は酒のにおいで満ち、息も酒くさいのだ。

大丈夫なのか。

「大丈夫です。まかせてください」

黙兵衛が部屋を出ていった。

伊之助はすばやく着替えをし、外に出た。三里の道を歩き、境河岸までやってきた。

ここまで来るのに、つけている者の気配を感じることはなかった。

歩いて汗をかいたことで、ふつか酔いもどこかに飛んでいってくれた。

渡し舟に乗り、関宿に着く。

伊之助としてはまず、豊広がつかう船というのがどこにつながれているのか、それを知りたかった。それと、船遊びをする場所も。

どうすれば知ることができるか。行きかう人にきけばきっと知れるだろうが、おとといの留置が伊之助は気にかかっている。

用心して、目の前を通りかかった十ばかりと思える男の子にきいた。

男の子は、船のありかも船遊びの場所がどこかも知っていた。

ありがとう。伊之助は男の子に五文を握らせた。男の子は予期せぬ駄賃に喜びの歓声をあげて、遠ざかっていった。

船は城近くで見つけることができた。

逆川から城に引きこまれた水路があり、それは城の奥のほうでおそらく内堀となっているはずだが、そのだいぶ手前が船溜まりになっていて、そこにつながれていた。

屋形船といっていいものだ。

逆川と水路のあいだには水門があり、今日はあけられていた。そのために船が見えたのだ。

水門のそばには船番所らしい建物が設けられており、船役人が常にいるようだ。

さすがに豊広のためだけにつくられた船だけに、かなり大きい。長さは十四、五間はあるのではないだろうか。百石ほどの荷なら、楽に積めそうだ。

屋根があるところはどうやら二階建てになっている。そこは眺望を楽しむためのものだろう。

船遊びは、城近くの逆川の流れがほとんどないところを選んで行うようだ。

それでも、あの船に近づくのには練達の腕を持つ船頭でなければならない。乗りこむだけでは駄目なのだ。

久世豊広の首を取り、屋形船から逃げださなければならない。そのとき腕のいい船頭なら、逃げきれるはずだ。それと、あとはとにかく口がかたい者でなければ。

信頼に足る、腕のいい船頭を一刻もはやく捜しださなければならない。

船頭を見つけるのはここ関宿では無理だ。敵地といえる場所で、あまりに危うい。

古河に戻って捜さなければならない。

どこか船頭を捜すのに、いいところはないだろうか。

そうだ、と気がついた。千宏屋なら、いくらでも腕のいい船頭はいるだろう。

だが、口がかたいとなるとどうだろうか。もちろんそういう者だっているのだろうが、こちらとしても少しは気心が知れているほうがいい。

伊之助は、千宏屋の船頭たちとはほとんど話をしたことがない。

そうだ、と一つ思いつき、伊之助は古河に戻った。

渡良瀬川の船宿である『船辰（ふなたつ）』に行く。ここは、町人たちに船遊びをさせるので名がある船宿だ。

夏は夕涼みや花火見物、春は渡良瀬川沿いに咲く桜の花見、秋の紅葉は川からではほとんど見えないが、舟に乗って酒を飲むには格好の季節だ。

暇なのは冬くらいのものだろう。さすがに寒風に吹かれて船遊びをしようという人はいないのだ。

船宿には十名以上の船頭がいる。ここのおかみと伊之助は懇意にしている。

ただ、頼み方はむずかしい。本当のことはいえない。嘘をいってあの豊広の船まで行ってもらうことになるのか。

「あら、伊之助さん、いらっしゃい。久しぶりじゃないの」

訪いを入れると、おかみのおせんが笑いかけてきた。

でっぷりと太っている。それだけに貫禄がある。丸い両目は小さく、盛りあがった頬のなかに埋めこまれているように見える。笑うと目尻に深いしわができるが、それが逆に娘のような若々しさを感じさせた。

おせんが座敷に入れようとしたが、伊之助は断り、風の通りがいい、自分のお気に入りの場所に足を運んでもらった。

そこは宿の西の端に当たり、廊下が外に突きだしたような格好になっている。長床机が置かれていて、渡良瀬川のゆったりとした流れを直下に見渡すことができた。

太陽はかなり傾き、あと一刻ほどで日暮れを迎えることになるだろう。やや白みを帯びた日射しが、川面できらきらとはねていた。

すぐそばが船着場となっていて、舟からおりてきた船頭たちが目の前を通りすぎてゆく。顔見知りの船頭が伊之助に挨拶していった。

伊之助とおせんは並んで長床机に腰かけた。

「ほんとに久しぶりね」

おせんが笑みを見せる。

「そうでもないよ。せいぜい半月ぶりくらいじゃないかな」

「半月なら久しぶりよ。子供の頃なんか、伊之ちゃん、舟に乗りたくて毎日来てたんだから。あんまり熱心だから、あたし、伊之ちゃんを養子に迎えようって本気で思ったこともあったのよ」

そうだったのか、と伊之助は思った。おせんには男の子がない。いるのは三人の娘だけだ。もし養子になっていたら、今頃は船頭になっていたことになるのか。それもまたちがう人生で楽しそうに思えた。

「俺、いい船頭になれてたかな」

「筋はとてもよかったから、まちがいなくなれたと思うわ」

「そう」

「お酒飲む？」

おせんが唐突にいう。伊之助はごくりと喉が鳴るのを覚えたが、昨夜も思いきり飲んだばかりなのだ。

いったい石脇でなにをしていたのか。なんの覚えもない、というのがとにかく気持ち悪い。今日は酒を避けたい気分だ。

「いや、遠慮しとくよ」
「そう。——ところで今日は？」
伊之助はどう切りだそうか、迷った。
「なにかよくない話なの」
「腕のいい船頭を紹介してもらいたいんだ」
「そんなのはお安い御用だけど……」
「ちょっと裏の仕事につかいたいんだ」
「裏の仕事？　どんな」
「それは、ごめん、いえない」
「お上につかまるようなこと？」
「そうなるかもしれない」
おせんの顔が曇る。
「困ったわねえ」
ちらりと目をあげ、伊之助を見た。
「親分はこのこと、知ってるの？」
「もちろん」
「そう」
ふと、左のほうに人影が立った。

「おかみさん、その仕事、あっしにまわしてくれませんか」
酒にやられたようなしわがれ声だ。
がっしりとした男が立っていた。顔は日焼けというより酒焼けしているようで、赤黒い。
細い目をしているが、そこからのぞく瞳には鋭い光が宿っている。
男がぎしぎしと床をきしませて寄ってきた。渡良瀬川から吹き渡る風が、男の鬢の毛をなぶってゆく。
「近兵衛さん」
おせんが長床机から尻をあげ、小さくつぶやいた。
「すみません、立ちぎきするつもりはなかったんですけど、ちょっと耳に入ってしまいました」
伊之助にとってはじめて見る顔だ。
そのことを察し、おせんがすばやく説明する。
「こちらは近兵衛さん。つい十日ほど前から、働きはじめてもらっているの」
伊之助はあらためて近兵衛という男を見た。
「腕はよさそうだね」
「すばらしいわ」
おせんはほめちぎる口調だ。
伊之助は立ちあがり、近兵衛と相対した。

「前はどこに」
「野田のほうですよ」
逆川を江戸方向へくだったところにある町だ。醤油づくりで有名だ。
「どうして古河に」
「いさかいを起こしちまってね。理由は酒ですけど」
「喧嘩でも？」
「ええ、女のことでもめましてね。相手をこてんぱんにのしちまったんですよ。それで、あの町にいるのはやばくなったんで」
確かに腕っぷしは相当強そうだ。それに、船頭が女のことでいさかいになるのは珍しいことではない。
船頭の楽しみは、なんといっても博打と女郎買い、といわれているくらいなのだ。
「危ない仕事をするんでしょ。口はかたいですよ」
近兵衛が唇をゆがめるように笑う。その不敵さがいかにも仕事ができる感じだ。
「気に入った。この人を借りたいんだけど、いいかな」
「近兵衛さんがいいのなら、あたしは別にかまいませんよ」
「あっしはもちろんいいですよ」
「ちょっと待っててくれるかい」
そういい置いて伊之助は家に戻った。

再び船辰にやってきたときには、黙兵衛を連れていた。
おせんに舟を借り、伊之助たちはさっそく乗りこんだ。まんなかに屋根がついた屋根舟だ。長さは四間ほど。
近兵衛が棹を突き、舟を動かしはじめた。黙兵衛は艫にいて、渡良瀬川の流れを見つめている。
久しぶりに舟に乗ったが、伊之助は気持ちよかった。川風もいいし、この広々とした感じはすばらしい。
ほかにも渡良瀬川をのぼったり、くだったりしてゆく舟は多い。米俵を満載した高瀬舟がほとんどだ。風をはらんだ帆が一杯に張られている。同じ水面から見る帆柱はさらに高く見え、まさに見あげるようだ。
不意に、黙兵衛が飼い主に呼ばれた犬のように岸のほうへ顔を向けた。
伊之助もつられた。
視線の先に、一人の人影がある。笠をかぶり、座って釣り糸を垂れている。距離は二十間ほどか。
どうして黙兵衛はそんなに気にしているのか。じき夕まずめになる頃で、ほかにも釣り竿を持つ者の姿はかなり見えているのに、なぜその男にばかり目を向けているのか。
伊之助のなかで答えが出ないまま、舟はその釣り人から遠ざかっていった。そのあいだ、黙兵衛はずっとその男を見ていた。

さすがにおせんが太鼓判を押しただけのことはあって、近兵衛は腕利きだった。まさに意のままに舟を動かす、という形容がぴったりだ。

おいらも、と伊之助は思った。船辰の養子になっていたら、こういう腕を持つことになったのだろうか。

もしおいらにこれだけの技があったら、なにも船頭を雇うような真似はせずともすんだのに。

四半刻ばかり近兵衛に技量を見せてもらってから、伊之助は黙兵衛にきいた。

「いかがです」

黙兵衛はしばし近兵衛を見つめていた。船頭のというより、人としての資質を見定めているかのような瞳だ。

近兵衛は、黙兵衛の視線を逃れるかのようにややうつむき加減だ。

やがて黙兵衛がかすかにうなずいた。

伊之助は近兵衛に向かっていった。

「よし、あんたに決めた」

報酬は金三十両。

「そんなにもらえるんですかい」

「ああ。前金で、と音無の旦那はおっしゃっている」

もっとも黙兵衛にそれだけの金はなく、あるのは収二郎からもらった為替手形だけなので、

郡兵衛が肩代わりすることになった。

十一

こちらから呼ぶまで船辰を動かずにいるということで、近兵衛との話はついた。

伊之助と浪人は連れ立って家路についた。

その頃にはもう夜がすぐそばまでやってきており、闇の幕が重なるようにしておりはじめていた。人の顔もだいぶ見わけがたいものになっている。

汗をだいぶかいた。歩きながら伊之助は湯屋に行きたくて仕方がなかった。

家に戻ったら、すぐに行きましょう、と黙兵衛にいった。

家に着くと庭のほうにまわって、なかにあがろうとした。そこへ子分の一人が寄ってきた。

「伊之助さん、お客人ですよ」

「どちらだい」

座敷で待っていたのは、寺社奉行の井上収二郎の使いだった。使いは、音無どのに至急千宏屋にきていただきたい、といった。

湯屋はあきらめなければならなかった。だが、この汗くささではさすがにまずいだろうということで、伊之助と黙兵衛は井戸で軽く汗を流し、着物も新しいものに替えた。

それから、使いとともに千宏屋に向かう。

収二郎はいつもの離れで待っていた。使いは、二人を連れてきたことを報告すると、その場を離れていった。

離れには大きな行灯が二つも入れられ、暗さに慣れた目には、真昼のような明るさに映った。

「よく来てくれた。さっそく座ってくれ」

収二郎にいわれて伊之助は正座し、刀を自らの右側に置いて黙兵衛はあぐらをかいた。

「伊之助、おぬしも膝を崩してよいぞ」

「いえ、大丈夫です。けっこうです」

「そうか」

失礼いたします。女の奉公人が茶を持ってきた。三人の前に湯飲みを置くや、その場にとどまるのが怖い、とでもいうようにすぐに立ち去っていった。

それも道理で、収二郎はやや苛立った顔をしていた。

「例の一件だが、どうなっている。進んでいるのか」

伊之助は、これまでどういうふうに進めてきたか、そしてどういう手を取るつもりでいるかを話した。

「ほう、豊広公の船遊びを狙うというのはいい手だな」

収二郎は顔をほころばせた。その表情には疲れが垣間見えた。

伊之助には、収二郎の苦労がしのばれた。

「なんだ、その目は」

収二郎が咎める。

「いえ、なんでもありません」

ふん、と収二郎が鼻を鳴らす。

「ところで、その近兵衛とか申す船頭は信用できるのか」

「わかりません」

伊之助は正直に答えた。

「どうしてそのような者をつかう」

「ほかにどうしようもないものですから」

伊之助は湯飲みを手にした。茶を飲むわけではなく、湯飲みからにじみ出るようなあたたかみを感じていた。

「あの男にはなにも教えません。船遊びの日、おそらく夜になるでしょうが、豊広公の船に近づいてもらう、ただそれだけです」

「そこを音無どのが乗り移り、豊広公の首をもらい受けるということか」

収二郎が満足げな笑みを見せる。

「それで、いつかかる」

伊之助は黙兵衛を見た。意を汲み、収二郎に伝える。

「次の船遊びのときに」

「なら近いな」
収二郎が身を乗りだす。
「豊広公がいつ船遊びをするか、調べはついているのか」
「いえ、まだです」
「そうか。こちらで探らせるが？　こういうこともあろうかと、関宿には手の者を放ってある」
「そうなのですか」
収二郎の用意周到ぶりを知らされた思いだった。
「放ってあるといっても、ほんの二名ばかりにすぎぬ。それに、殿や重臣たちから許しを得ておるわけではない。このあたりに、わしが家中の者にきらわれる理由があるのではあろうな」
収二郎が家中から浮きあがっている感じは、なんとなく伊之助にもわかった。目の前の人は考え方が家中のほかの者と、だいぶちがうのだろう。
今のような太平の世に向いていない、とでもいうのだろうか。どこか戦国の頃の策士という感じがある。
それだからこそ、千宏屋ほどの大店から妻をもらうことも平気でできるのだ。しかも側女ではなく、正妻として。
伊之助は、収二郎に話すべきことがあったのを思いだした。

「二日前のことですが、こちらの旦那と関宿へ行きました」
そこで町方役人にとらえられかけた話をした。
収二郎が露骨に眉をひそめる。
「それはたまたまなのか」
「わかりません」
「まさか漏れているようなことは？」
「それはないものと」
「だろうな。もし漏れていたら、おぬしたちはこうして無事に帰ってきてはいないだろうからな」
伊之助は、黙兵衛がなにかいいたそうにしているのに気づいた。
ようやくなにがいいたいのか理解して、伊之助は収二郎に問いをぶつけた。
黙兵衛のききたいことというのは、こちらの殿さまである利直も船遊びをするのか、ということだった。
「そんなにはおやりにならぬが、船はお持ちだ」
収二郎が苦笑を浮かべた。
「豊広公が船を持ったことに対抗してつくらせたものよ。だから、ほぼ同じ構造といってよかろう」
さすがに収二郎で、黙兵衛の意図をしっかりと見抜いていた。

「今度、図面を持ってこよう」

涼しい風が木々を騒がせて吹きすぎてゆく。

博造は背をぶるっと震わせた。

「話というのはなんです」

目の前に立つ岩八に語りかける。

「すごい話だぜ」

岩八がもったいをつける。

「だいぶ弾んでもらわなきゃ、駄目だな」

ここは古河の城下はずれの神社で、迫宮神社といった。無住で、境内は風以外はひっそりとして静かなものだ。暗闇だけが重く居座り、それが人が近づくのを拒絶しているように感じられる。

「十両では不足ですか」

「ちょっとな。いくらくれる」

「話の内容にもよりますけど、こいつをやってもいいですよ」

博造は懐から二十五両入りの包み金を取りだした。

岩八がごくりと唾を飲む。

「本当にそいつをくれるのか」

「内容次第ですがね」

「わかった」

岩八がややつっかえつつも、話した。

きき終えて博造は驚愕した。なにか企みがあるのだろうというのは見当がついていたが、いくらなんでもそこまでは予期していなかった。

岩八が、博造の驚きぶりに満足したような笑みを浮かべた。

「本当にまちがいないのですかい」

「まちがいないさ。あの浪人は、五百両で請け負ったそうだ」

五百両という詳細な金額まで調べている。これは信用してよさそうだ。

「どうやって調べたんですか」

岩八がにやりと笑う。いかにも卑しげな笑いだ。

「それはいえんな。秘密さ」

手を突きだしてきた。

「金をくれ」

博造は二十五両を手渡した。

「いやあ、すまんな」

いかにもうれしげに包み金の重みを確かめているようだった岩八が、じろりとねめつけてきた。

「博造、おめえ、知り合いに頼まれたといっていたが、本当はちがうだろ。こういうことを知りたかったんだよな。いったいおめえ、何者だい」

とん、と音がした。岩八の顔がいきなりゆがんだ。胸におそるおそる目をやる。

匕首が突き立っていた。

風が吹いた。その風に押されたかのように岩八が力なく地面に倒れこむ。腕を動かして、ごろりと仰向けになった。瞳が博造を捜す。

ど、どうして。岩八は唇の端から血のよだれを垂らして、絶命した。

博造はかがみこみ、匕首を引き抜いた。岩八の着物でていねいにぬぐう。鞘にしまって懐に入れる。

見ひらいている岩八の目を閉じてやった。

「いらんことに気づいたな。それに、これだけのことを知っている者を、さすがに生かしておくわけにはいかん。ほかの者にぺらぺらしゃべられたくもない」

博造はただの物と化した岩八の体を引きずり、背後の本殿の床下に持っていった。

まさか殺すことになるとは思わなかった。ここに置いておけば、しばらく死骸は見つかるまい。

博造は床下を出た。本殿に向かって手を合わせてから、鳥居をくぐった。

境内を振り返る。風が吹き渡り、土をわずかに巻きあげていった。

博造は背中を一つ震わせてから、早足で道を歩きだした。

第三章

一

言葉を失った。

「まことですか」

かろうじて出てきたのは、自分でも陳腐と思えるほどの言葉でしかなかった。

横山佐十郎は畳の上で身じろぎし、それからゆっくりと息をついて、背筋を伸ばした。

目付頭の平崎館左衛門が深くうなずく。

「まことにござる。確かに驚愕を禁じ得ないものでござるが、我が手下の調べによるもの。まず事実と考えて差し支えなかろう」

密談をきかれないために、庭に面した障子があえて大きくひらかれている。

ほんの四半刻ほど前、佐十郎は館左衛門の使いをもらい、平崎屋敷にやってきたばかりだった。

目付頭の呼びだしである以上、重大なできごとがあったのでは、という気はしていたが、まさかこのようなことをきかされるとは。

「手下といわれると？」

佐十郎の問いに、館左衛門が薄く笑う。

「それは申せぬ」

目付頭として、古河の町に何人もの草をひそませているのだろう。そのことは館左衛門自身か、目付の主だった者しか知らないのだ。

それにしても、と佐十郎は思った。あの浪人はそんなことを企んでいたのか。だが、この太平の世にそんなことを考える輩がよもやいようとは。

久世家と土井家のこれまでの軋轢は知っている。あの試合のこともあって土井利直のうらみが重なったのだろうが、それでも佐十郎にはにわかには信じがたい。

「殿のお耳に入れるか」

館左衛門がきいてきた。

「そのつもりです。これだけの重大事、お伝えしないわけにはいきますまい」

「殿にお伝えする役目、頼んでよいか」

「おまかせください」

館左衛門がぐいと顔を近づけてきた。

「やはりあのとき、有無をいわさず殺してしまったほうがよかったのではないか」

そうすべきだったか。佐十郎は自問した。

館左衛門のいう通りなのだろう。あの浪人は始末すべきだった。剣でやり合いたい、などという欲こそまず殺すべきだった。

「悔いている顔だの」

佐十郎はじっと見返した。気持ちを見抜かれたのが、少し腹立たしかった。

「怖いの、おぬし。燃えあがるような瞳をするわ」

にやりと笑って館左衛門が身を引く。

「お話はそれだけですか」

佐十郎は立ちあがろうとする気配をあらわにした。

「もう少しつき合ってもらいたい。まだ伝えることがある」

佐十郎は座り直した。

「あの浪人、船頭を雇ったようだ」

佐十郎は、自らの瞳がぎらりと光を帯びたのをさとった。

「いったいなにをする気かな」

そういいながらも、館左衛門はすでに見当がついている表情をしている。

そういう男に自らの考えを話すのはなんとも馬鹿らしかったが、佐十郎は今ひらめいたばかりの考えを語った。

「うむ、そういうことだの」

館左衛門が背筋をのばす。
「殿に、船遊びをせぬよう申しあげるのか」
「その逆にござる」
その言葉をきいて、館左衛門が唇をゆがめるような笑みをつくった。そういう顔をすると、この目付頭は本当に酷薄そうに見える。
「殿をおとりにする気か」
「その気はござらぬ」
館左衛門が満足したように脇息に身を預ける。
「とにかくこのこと、殿にお伝えしてくれ。わしはさらに調べを進めるゆえ」
平崎屋敷を出た佐十郎は登城した。
本丸御殿に入り、小姓に殿と面会したい旨を伝える。
しばらく待たされたあと、小姓とともに長い廊下を通って、豊広のいる座敷に向かった。
「よく来たな、佐十郎」
機嫌は悪くないようだ。ただ、酒が入っている。
小姓に注がせた杯を口に持ってゆき、ふと佐十郎の表情に気づいた。
「なんだ、ずいぶん険しい顔をしているではないか。これが気に入らぬのか」
杯を持ちあげてみせる。
「いえ、そのようなことでは」

佐十郎は豊広をじっと見た。
「なんだ、人払いか」
豊広は仕方なげに、二人の小姓に外に出るように命じた。
「これでよいか」
二人きりになるや、少しうるさげにいった。
「して、なに用だ」
佐十郎は膝を進めた。低い声で、だが豊広の耳にしっかり届くように告げた。
豊広はのけぞりそうになるほど驚いた。手にしていた杯が畳に転がる。酒が小さくしみをつくった。
豊広は立ちあがった。
「利直め。愚か者とは知っていたが、まさかそのようなことを企むなど……。取り潰してくれるわ」
ぎろりとにらみつけてきた。
「――佐十郎、その浪人者、殺すなっ。生かしてとらえよっ」
唾が顔面へ飛んできた。佐十郎は避けなかった。

二

するすると巻物のように広げられてゆく。
目の前にあらわれたのは、船の図面だ。
まんなかに屋根がつき、そこが二階建てになっている。この前、目にしたばかりの屋形船とほとんど同じだ。
黙兵衛は図面にじっと目を落としている。
「これが殿さまがお持ちの船ですね」
伊之助がきくと、井上収二郎はうなずいた。
「そうだ」
ここは千宏屋のいつもの離れだ。三人以外、誰もいない。
「長さは十四間ほど、幅はおよそ三間だ」
収二郎は、図面の端の折れたところを指でのばした。
黙兵衛が伊之助を見た。伊之助は横に置いておいた風呂敷包みを解き、紙を取りだした。
それを黙兵衛の前に広げる。
「なにをする気だ」
収二郎が怪訝そうにいったが、黙兵衛が矢立から筆を手にしたことで解したようだ。

「写すのか」
黙兵衛はうなずきを返すこともせず、筆を動かしはじめた。
その正確な描写に、伊之助はびっくりした。収二郎も目をみはっている。
とにかく筆に躊躇(ちゅうちょ)がない。すっすっとなめらかに動いてゆく。しかも筆遣いは力強い。
明らかに絵の心得がある。いったいどこでこれだけの技を習得したのか。
描きあげた図面を黙兵衛は手に取り、宙に広げた。
よかろうというように顎を引き、墨が乾くのを待って丸めた。懐にしまい入れる。
これで用は終わったとばかりに黙兵衛が立ちあがる。
「これにて失礼いたします」
伊之助はていねいに収二郎に挨拶した。
「これからどうする」
収二郎がたずねてきた。
黙兵衛の表情には一つの考えが浮かんでいるように思えた。
「これから関宿へ行ってみようと」
「関宿へ？　船を見に行くのか。場所は知っているのか」
「この前、見に行きました」
「そうか、やることはやっておるのだな」
ふと、庭を踏むやわらかな音がきこえてきた。伊之助が見ると、一人の女が近づいてくる

ところだった。

三つの湯飲みが置かれたお盆を捧げ持つようにしている。これまでお茶を持ってきてくれた奉公人とはちがう女だ。眉を落としている。

黙兵衛が見据えていた。それに気づいて女が体をかたくする。

「そんなににらまんでくれ」

収二郎が取りなすようにいった。

「妻よ」

黙兵衛が目から力を抜く。女はほっとしたように離れに歩み寄ってきた。

「おかわりをお持ちいたしました」

よろしいですか、といってなかにあがり、湯飲みを次々に置いた。

「では、これで失礼いたします」

去ろうとするのを収二郎がとめた。

「せっかくだ、挨拶だけでもしてゆけ」

女はつつましく正座し、両手を畳にそろえた。

「ひさ、と申します。どうぞ、よろしくお願いいたします」

「こちらこそ」

伊之助は頭をぴょこんと下げ、名乗った。黙兵衛のことを紹介しようとして、怖い目にぶつかり、あわてて口を閉ざした。

おひさが、ではこれにて失礼いたします、と離れを去っていった。

姿の見えなくなるまで伊之助はずっと見ていた。

「きれいな人ですねえ。今日は一緒にこちらまで？」

「そうだ。義父が風邪を引いて寝こんでいるというのでな、見舞いをかねて」

「そうでしたか」

無駄話はいらぬ、とでもいうように黙兵衛が茶を飲みほして、立ちあがった。

伊之助も茶を飲みくだした。

「どうもごちそうさまでした」

雪駄を履き、黙兵衛のあとを追った。

三里の道を歩き、二人は関宿の町へ入った。

屋形船のある場所に赴く。逆川の対岸から関宿城が見られる場所にやってきた。この前、伊之助が訪れたところだ。

「あそこですよ」

伊之助が指さしたのは水門だ。今日も水門はひらいていて、そのわずかに奥まった場所で水路がふくらみを帯びている。船溜まりで、そこに屋形船はつながれていた。

「よく見えますね」

伊之助は黙兵衛を見つめた。

「ここで図面を広げるわけにはいきませんね。人目が多すぎますから」

背後の道を旅人や行商人、百姓や人足などが繁く歩いているし、目の前の逆川にも多くの高瀬舟や荷舟が行きかっている。

黙兵衛は視線を一点に据えている。船の大きさや形を頭に叩きこんでいるのだ。

納得したようで、黙兵衛がその場をすっと離れた。

どこに行くのかたずねる真似はせず、伊之助は黙ってあとにしたがった。

しばらく逆川沿いの道を歩いていたが、やがて畑のなかの畦道を進みはじめた。

畑が切れて畦道はただの獣道（けものみち）に変わった。その道がやや曲がりながら通じているのは、背の低い木々がかたまって立っている林だった。

その林に黙兵衛は入りこみ、奥のほうまで行ってようやく足をとめた。そこは今にも朽ち果てそうな杉の老木がかろうじて立っているところだった。

黙兵衛が図面を広げる。さっき目にした屋形船と図面とを見くらべていた。

伊之助も横からのぞきこんだ。

まちがいなく似ている。これならこの図面をもとに斬りこんでも大丈夫ではないか、と自分が斬りこむわけではないのに、伊之助は自信を持った。

おそらく黙兵衛が頭に思い描いているのは、川での月見の際、夜陰に乗じて忍びこむ、ということではないか。

やれるのでは、と伊之助は思った。きっとこの人ならやれる。そんな気が強くした。

不意に横から人の気配がした。伊之助が驚いて見ると、近づいてきたのは薪拾いの百姓らしい男だった。

頭は白髪が一杯で、顔はしわだらけだ。やたら日焼けしており、肌がなめしたようにつやを帯びている感じだった。

黙兵衛が図面をたたんだ。

ようやく伊之助たちに気づいた様子の百姓が、驚いた顔で立ちどまる。

足を踏みだした黙兵衛がにらみつけた。百姓は逃げるように林を出ていった。

ふっと軽く息をついて、黙兵衛が歩きだした。古河に戻る気になったようだ。

伊之助は汗を一つふき、黙兵衛を追いかけた。

「よくやった」

博造は百姓をたたえた。

「こいつをやる。これで今日のことは忘れろ」

博造は百姓に金を渡した。一両だ。

「えっ、こいつをいただけるんですかい」

「そうだ。不満か」

「滅相もない。小判なんてはじめて見ましたよ」

「女房はいるのか」

「ええ」

「いいか、今日のこと、調子に乗ってしゃべるなよ」
「は、はい」
「もししゃべったら、どうなるか。おまえだけではない、女房もだ」
「わ、わかりました。決して誰にも話しません」
博造は百姓の肩を叩いた。
「ご苦労だった。行け」
背中を鉄砲で撃たれるのではないか、と思っているような勢いで百姓は竹藪を駆けだしていった。その姿は曲がっている道にかかり、あっという間に見えなくなった。
博造は視線を落とし、独りごちた。
「図面のようなものを広げていたか」
それがなんの図面なのか、見ずともわかる。やはり予期した通りだ。
ここしばらく博造は、ずっとあの浪人に張りついていた。決して二町以内の距離に入らなかった。
例外は、釣り人を装って、浪人と伊之助が乗った船を渡良瀬川の岸から見たときだ。あのときは笠をかぶっていたから顔は見られていないと思うが、もしかしたら化け物かもしれない男を相手にしている以上、どんな用心もしすぎということは決してない。
今日だって、何度着物を変えたことか。行商人、百姓、旅人。
今は百姓の身なりをしている。ちゃんと鍬も持っていた。

それにしても、と博造は思った。もはやまちがいない。浪人は屋形船に乗りこむ気だ。そこで久世豊広を討つ気でいる。
よし、と博造は一つうなずいた。すぐに平崎さまに報告しよう。
竹藪を出た博造は、道を関宿城下のほうに取った。

三

三日後の昼すぎのことだ。
軽い昼食を終えてすぐ、収二郎から呼びだしがあった。
伊之助と黙兵衛は連れ立って、千宏屋に向かった。
いつもの離れで、収二郎が待っていた。
「明日だ」
伊之助と黙兵衛が目の前に座るや、収二郎が目を輝かせて口にした。
「本当ですか」
伊之助は身を乗りだした。
「まことよ。先ほど手下から報告があった。明日の夕刻、豊広公は確実に船遊びをする」
収二郎が黙兵衛を見た。
「やれるな」

黙兵衛は相変わらず無言だったが、自信ありげに首をうなずかせた。
伊之助と黙兵衛はこの三日間、いつでも取りかかれるように、準備を万端ととのえていた。
一番むずかしいのは、どういう形で屋形船に近づくかだ。警護の舟がまわりにいないのであればそのまま音もなく近づくだけでよいが、警護の舟がいる場合、手立てを考えなければならない。
しかし、それもすでに解決ずみだった。もっとも、収二郎の手下によれば、これまで警護の舟がついたことはないそうだ。
誰も一城のあるじが襲われるなどと、決して考えはしない。屋形船のなかの警護を厚くしてあるのがせいぜいだろう。
千宏屋をあとにした伊之助と黙兵衛は家には戻らず、船辰に行った。
近兵衛の棹で渡良瀬川に出た。おかみのおせんが見送る。おせんはなにも知らないはずだが、祈るような目をしていた。
伊之助のなかでも不安が一杯だ。自ら屋形船に斬りこむわけではないから命の危険はほとんどないといっていいのだが、やはりこんなことをやるのではなかった、という後悔の気持ちがないわけではない。
それに、伊之助にはいやな予感があった。この前、とらえられかけたこともあるし、さらに新しい事実もある。
岩八が行方知れずになっているのだ。一緒に飲んでさほどときがたっていないだけに、なにがあったのか、心配でならない。
岩八の失踪は今度のことにはなんの関係もないはずだが、縁起でもない、との思いが強くある。

夜を待って、近兵衛の棹で予行をしてみた。これまで近兵衛とは、何度も同じことを繰り返している。
屋形船に見立てた岸近くの大木に向けて、船を音もなくそっと近づけるだけのことだ。それをひたすら繰り返した。
近兵衛は、自分がなにをさせられているか、まったくわかっていないだろう。
翌日も、昼すぎまで同じことを繰り返した。
くっきりと大気が澄み、空のどこを捜しても雲一つなかった。雨の気配はなく、これならいい月が拝めそうだ。
「夕刻になったら、また来る。それまで体を休めておいてくれ」
近兵衛にそういい置いて、伊之助と黙兵衛は家に帰った。
薄い流れるような雲に月が隠れた。
雲がうっすらと黄色に染められている。さっきまでの明るさが嘘のように、逆川の水面は夜の手のひらがおりてきたように暗くなっていた。
横山佐十郎は艫のところで腹這いになり、舵が取りつけられている隙間から川面をじっと

見おろした。

ひっそりと一艘の舟が、黒一色の水面を滑るように近づいてきた。

なんの音も立てていない。櫓を漕ぐ音すらきこえない。

こちらの船から漏れこぼれる明かりで、船頭を含め、三人の男が乗っているのがほんのりと見える。

やつらか、まちがいないか。佐十郎はさらに目を凝らした。

あたりにはほかに数艘の舟がいる。いずれも、これから逆川を江戸にくだってゆく夜舟だ。多くの客を乗せている。

それらの舟目当てに、食べ物や酒を売りつけようとする物売り舟も見受けられた。この屋形船に寄ってこようとしている物売り舟もむろんいる。

今、こちらに近づいてきつつある舟にも、なにか物が積んであるようだ。酒だ。

もし警護の舟に見咎められたら、屋形船に酒を売りつけるという名目を口にするつもりなのか。

笑止だった。そんな手で、大名が乗る屋形船に近づけると考えているのか。

いや、あながち笑止ともいえない。殿の豊広は、その手の舟から物を買ったりするのが大好きなのだ。

ということは、と佐十郎は思った。逆によく調べてあるのだ。

あらためて目を凝らす。

まちがいない。またあらわれた月に照らされて、浪人が舳に乗っているのが見えた。

来たぞ。

佐十郎はうしろを振り向き、小さく告げた。

この日のために家中から集められた選り抜きの手練が十名、うずくまるようにしている。

佐十郎としては万全を期すために、鉄砲を用意したかったが、暗いなか、味方を撃ってしまうかもしれず、それになにより、久世家の剣術指南役としての誇りが鉄砲を用意したい、との言葉を封じこめた。

十名の手練は深くうなずき、刀の鯉口をいっせいに切った。

「あれだ、あの船に近づくんだ」

伊之助は近兵衛に命じた。

「えっ、あれにですかい」

「そうだ。舟を近づけるだけでいい。できるだけ静かにな」

「あの船になにかするんですかい」

「船にはなにもしない。ただ寄せるだけでいいんだ」

「わかってますよ。あっしはなにもききませんよ。なにしろ、三十両ものお宝の仕事ですからねえ」

近兵衛は不敵に笑った。その笑いが、伊之助にはとても頼もしく思えた。

危惧していた警護の舟はいない。あたりを行きかっているのは、客を満載して江戸に向かう舟と荷売り舟だけだ。

それらの舟は、うまいことこの舟の目くらましになってくれた。

この舟がひそかに近づきつつあることなど、あの屋形船に乗っている者は一人として気づいていないにちがいない。

屋形船からは、女の嬌声や男の酔った声がきこえる。誰かが歌を歌っている。豊広かもしれない。

近くで見ると、屋形船は見あげるほどに大きかった。二階は、とても高いところに位置している。その場に、人がいるのかは定かではなかった。

もっとも、二階に豊広があがるのは、利根川沿いで祭りがあるときが主なようだ。そのとき打ちあげられる多くの花火を、その場から見物するのだ。

豊広自ら花火を打ちあげるときがあり、そのときも二階にあがって見るという。

さらに近づくにつれ、船はさらに巨大なものに変わってゆく。伊之助は、山のように見えるその大きさに声を失った。

近兵衛は意外に落ち着いている。櫓を漕いでいるが、まったく音をさせないその腕前には舌を巻く。

それでも顔中、汗が一杯なのがわかる。自分もそうであるのを伊之助はさとった。粘りつくような汗だった。またもいやな予感が胸のあたりを駆けめぐりはじめた。

とめようとするが、どうにもとめようがない。しかし、このいやな気持ちを黙兵衛に話すわけにはいかない。自分の気持ちの悪さで、まさに千載一遇のこの好機を逃すわけにはいかないのだ。

近兵衛が櫓から手を放し、棹を握った。それで舟の速度をゆるめ、さらに静かに屋形船に近づけてゆく。

とん、と軽く船首が屋形船に当たったが、すぐにするすると舟は動いて横づけされる形になった。

船は石垣のように立ちはだかっている。高さは二間はある。

舳にいた黙兵衛が立ちあがり、綱のついた鉤を屋形船に投げ入れた。

黙兵衛が力をこめて引くと、なにかに引っかかったような音がした。黙兵衛がぐいぐいと綱を引っぱっている。

鉤は落ちてこない。しっかりと引っかかったようだ。

歌声や笑い声、三味線の音はやまない。そんなに楽しいことがどうしてひっきりなしに続くのか、伊之助としては首をひねりたくなるほどだ。

その騒ぎはこの上なくありがたいものではあったが、どこかうまくいきすぎている、という感は否めない。

両刀を腰に差し、首桶を背中にくくりつけた黙兵衛が綱をのぼりはじめた。腕力とともに体のひねりをうまくつかい、あっという間に上にたどりついた。

ひょい、という感じで手すりを乗り越えた。それきり姿は見えなくなった。
心配で、伊之助の心の臓は痛いほどに強く打ちはじめた。

四

かつんと軽い音を立てて、綱のついた鉤が投げこまれた。それは船縁（ふなべり）に引っかかった。
すぐによじのぼってきた影が手すりを乗り越えた。
佐十郎たちは船の屋形のところにいた。やつが豊広の命を狙っているのなら、まちがいなくここにやってくるだろう。
背後の木の壁に仕切られた部屋で、腰元たちは笑い、歌い続けている。あらかじめどういうことか教えてあるために、恐怖はあるのだろうが、それが歌や声には出ていない。とても自然な感じだ。そのことを佐十郎はほめたたえたくなった。
影はまるで姿を隠す気はない足取りで、舟板の上を進んでくる。
もしなにか危うさを感じているのだったら、あんな足の運びはできまい。やはり腰元たちの歌や笑い声がきいているのだ。
影がそこまで来た。戸の向こうだ。気配をうかがっている。
佐十郎は息を殺した。ここでさとられたら、生け捕りなど夢になってしまう。
わずかに戸がひらいた。男が顔をのぞかせる。

積み重ねられた行李（こうり）のうしろに隠れている佐十郎はさらに身を低くし、男の視線を逃れた。
他の者は屋形のうしろのほうにかたまっている。
しばらく迷っているかのようにそこにとどまっていたが、やがて決意したのか男が踏みだしてきた。
よし、そのまま来い。あと二間。そうすれば生け捕りだ。
音をさせることなく、男が進んでくる。佐十郎がひそむ行李のそばまでやってきたところで足をとめた。
気がつかれたか。
佐十郎の鬢のところを、汗がたらりと流れ落ちてゆく。
佐十郎は飛びだしたい気持ちに駆られた。しかし、我慢しろ、と自らにいいきかせた。我慢しろ、ここは動くな。
男がまた進みだした。
足が見え、肩が見えた。横顔も見えた。
よし、今だ。
佐十郎は気合をかけることなく、すでに抜いていた刀を横に振った。
峰打ちなど狙うつもりは、はなからなかった。刀は人を斬るようにつくられている。峰打ちでは勝手がちがう。
他の者なら知らず、目の前の浪人ほどの遣い手に通用するはずがない。

佐十郎の狙いは足だった。足さえ斬ってしまえば、やつは動けなくなる。
それからとらえるのは、さほど難儀なことではあるまい。
足とはいえ必殺の気持ちをこめた斬撃だったが、どういう勘が働いたのか、浪人は跳びあがることで楽々と避けた。
なにっ、と佐十郎は愕然とした。
刀をよけた浪人はこちらに視線を這わすことさえせず、歌や笑い声がきこえる壁に向かって突進してゆく。
佐十郎としては、待ち構えられていたのを知って後退するのでは、と考えていた。自分が攻撃したら、そちらのほうへ家中の者たちにまわるようにいっておいたのだ。
目論見がはずれた。
まずいぞ。胸に焦りの汗が流れた。仮に壁が破られたといってもそこに豊広がいるわけではないが、八名の腰元がいる。
壁を突き破られれば、腰元たちは悲鳴をあげ、逃げ惑うだろう。
そこをやつに乗じられれば、逃がすことになりかねない。
刀を引き戻した佐十郎は浪人を追った。
浪人は案の定、壁に体当たりをかました。壁が、べきり、と音を立てて二つに割れた。
きゃあ。いやあ。腰元たちが悲鳴をあげて立ちあがる。
その弾みで、畳敷きの四隅に置かれていた行灯が次々に転がる。四つすべてがめらめらと

燃えはじめた。
一つの行灯の炎が一気にふくれあがり、横の障子に燃え移ろうとしている。
まずいぞ。この船を燃やしてしまったらなにをいわれるかわからん。
なんといっても刺客を罠にかけるという名目で、無理をいって借り受けたのだから。
「火を消せっ」
佐十郎は怒鳴ったが、腰元たちにはきこえない。ただ、座敷の外へ逃れようとしている。
腰元たちは、あっという間に座敷から姿を消した。相変わらずけたたましい悲鳴をあげ続けているが、それは徐々に遠ざかってゆく。
一人、座敷のなかで立っているのは浪人だった。障子の炎に横顔が照らされ、それがなぜか神々しく見えた。
その立ち姿のすばらしさに、佐十郎は今がどういうときか忘れ、目を奪われた。
浪人の眼は、豊広を捜していた。脇に階段がついているのに気がつく。
浪人が階段を見あげた。
のぼりかけて躊躇した。誰もいないことをさとったようだ。顔を戻す。謀られた、という表情だ。
佐十郎は浪人と対峙し、刀を八双に構えた。
天井は低く、上からの斬撃はつかえない。踏みこみ、刀を横に払った。
浪人はがきんと刀で受けとめた。ぐいっと顔を近づけてくる。

目は血走っていたが、冷静さも備えている。どうして襲撃がわかった、といいたげだ。
佐十郎は押し返そうとしたが、浪人は石の足でも生えたかのように動かない。
こんな相手ははじめてだ。予期した以上の遣い手であるのを佐十郎は知った。
胸はむしろ喜びにふくらんだ。これだけの相手にまさかめぐり会えるとは。
若い頃、江戸に行って剣術修行をした頃のことが心をかすめた。あの頃は出会う相手がすべて手練だった。
それが苦しみではなく、佐十郎にとっては喜びだった。関宿では決して得られないうれしさだった。
他の侍たちが情況に気づき、殺到してきた。
「火を消せっ」
浪人と鍔迫り合いをしつつ、佐十郎は命じた。
五名ばかりの侍が、火のついた障子を外の流れのなかに蹴飛ばした。燃えそうになっている屋根のところは、羽織ではたいて消しとめた。
火は消え、あとにはもうもうとした煙のみが残った。座敷は濃い霧が漂っているようだ。
船が燃えなかったことについては、佐十郎は胸をなでおろした。
しかし、今はそんな余裕を持ってはいられなかった。真剣で戦っている最中なのだ。
十名の剣士は刀を構え、佐十郎たちのまわりを取り囲んだ。
「刀を捨てろ」

佐十郎は浪人にいった。
「もう逃げられんぞ」
だが、浪人の瞳から力は失われていない。闘志がみなぎっている。
「きさま、どうしてこんなことをする。どうして大名の首を取ろうなどと考える」
だが、そのことは佐十郎にはすでにわかっていた。
この男は、人を殺すために生きているのだ。遣う剣は殺人剣だ。人を殺すのに、ためらいもなければ理由もいらない。
人を殺すのはこの男の性なのだ。
いきなり佐十郎は押された。巨大な岩が動きだしたような感じだった。
ついには突き放され、わずかにたたらを踏む形になった。
袈裟斬りがうなりをあげて落ちてきた。天井の高さを十分に計算した斬撃だ。
佐十郎は歯を食いしばって、浪人の刀をはねあげた。腕が潰れるような強烈な重さをともなっていた。
こんな刀ははじめて受けた。
驚いたが、やはり心には喜びがある。侍として生まれ、そして剣の才能を天から与えられた者だけが持つ喜びだろう。
だが、その喜びもつかの間だった。そばで、いきなり悲鳴があがったのだ。
佐十郎がはっとして目をやると、一人の侍が肩先から血をほとばしらせて畳に倒れこむと

ころだった。
どんと畳の上で弾むようにしたあと、うつぶせに倒れこみ、ぴくりとも動かなくなった。
なにっ。
佐十郎はさすがに目をむいた。人が斬られるところははじめて見た。
浪人は刀を握り返し、新たな敵を捜して挑んでゆく。
こやつは、と佐十郎は思った。人を斬ったのははじめてではない。
血を見たことで我を失ったか、鳥のような気合をかけて一人が浪人に向かってゆく。浪人が片膝をつきざま、刀を横に払う。
またも悲鳴があがり、侍は横転した。そばの障子に頭を突っこむ。障子の桟が破片となって川のほうへ飛んでゆく。
畳に横たわった侍はもだえ苦しんでいたが、やがて首を落として絶命した。
きさまっ。新たな侍が浪人と対した。浪人の重い刀を一度ははねあげたが、二度目は受けきれず、まともに顔に受けた。
左目から頬にかけて無惨に斬り割られ、そこから血がぱっと散った。すぐに、栓が抜けたように傷口からおびただしい血が流れはじめた。
侍はなにも見えていない目を押さえて、両膝を畳についた。なにか、あわあわと口のなかで叫んでいる。
その姿は、これが夢であってくれ、と祈っているように見えた。

独楽がまわるようにくるりと体をひるがえしてから、侍はどしんと畳に倒れこんだ。息はすでにしていない。
佐十郎は呆然と息を飲んだ。これが真剣のすさまじさだった。
背筋に震えがきたが、それを振り払うように浪人に躍りかかった。剣術指南役がおびえた姿など見せられない。
刀は弾き返された。さらに佐十郎は斬りかかったが、それもあっさりと受けとめられた。
また鍔迫り合いになったが、佐十郎を待っていたのはあの強力だった。ぐっと踏みこたえようとしたが、無駄だった。
佐十郎は下がらざるを得なかった。それに乗じて刀が胴に振られた。
佐十郎は刀で払った。下からすくうように刀を振りあげたが、そのときには浪人の姿はなかった。
別の侍とやり合っていた。いや、やり合うなどというものではなかった。
侍は胴を真っ二つに斬られた。はらわたがどろりと出てきた。
まるでなにかの生き物がそこから顔をのぞかせたようだ。侍は畳に突っ伏した。いや、はらわたにだった。
はらわたを自らになすりつけるように苦しがっていたが、それもすぐにやんで、侍は動かなくなった。
浪人はそこまで見届けていない。佐十郎もそうだった。船を走り抜けようとする浪人に追

いすがる。

舳まで来た。佐十郎は浪人の背中に刀を振りおろした。

届いた、と佐十郎が感じた瞬間、浪人はだっと身を投げだした。

刀は空を切り、浪人の姿は夜のなかに飛びこんでいった。

佐十郎は左手で手すりをつかみ、流れをのぞきこんだ。

水音はしない。代わりにきこえたのは、どんと板を踏む音だった。

目を凝らして見ると、そこには舟がいて、浪人がちょうどおり立ったところだった。

舟が大きく揺れている。大丈夫ですか、という若い男の声が耳に届いた。

舟には、浪人を入れて三人の男がいる。

佐十郎は脇差を抜き、浪人めがけて投げつけた。

当たった、と思った瞬間、浪人のそばで光が走った。きん、という音を残し、脇差がどこかへ飛んでいった。

佐十郎は、くっと唇を噛んだ。

「急いで」

また若い男の声がした。

棹が突かれ、舟が動きだした。みるみるうちに遠ざかってゆく。

船頭は相当の腕利きのようだ。脇差は、あの船頭を殺すために投げたほうがよかった。

舳に立って、佐十郎は手近の提灯を大きく振った。

それに応じて葦原からおびただしい舟が出てきた。いずれにも鉢巻に襷がけをした侍たちが乗っている。

浪人の乗る舟を追いはじめたが、果たして追いつけるかどうか。

仮に追いついたところで、舟の侍たちでは、束になってかかったとしてもあの浪人を討ち取るなど夢でしかなかった。

しかし、舟には矢の射手が乗りこんでいる。佐十郎の期待はそれだった。

「放てっ。矢を放てっ」

佐十郎は叫んだ。今は生け捕りなど考えていられない。殺すしかなかった。

佐十郎の声に応えて、次々に風を切る音が響き渡った。

当たったかどうか、屋形船の上からではわからない。佐十郎はもどかしかった。

自分でも射たかったが、弓矢の腕はさほどのものではない。

ただし、揺れる舟から射るのはとてもむずかしいものであるのはよく知っていた。

うしろを何度も振り返った。

矢が次々に飛来してきて、伊之助はものすごく怖かった。何本かは顔や体をかすめていった。

いまだに舟の群れは追ってきてはいるが、近兵衛の腕は確かで、どんどんと追っ手の舟は遠ざかってゆく。

気が気でなかったが、もう大丈夫ですよ、と櫓を握る近兵衛が笑いかけてきたことで伊之助はほっと息をつくことができた。

だが、まだ矢は飛んでくる。ときおりかたわらの水面に矢が突き立ち、死んだ魚のように力なく流されてゆく。

「しかし旦那」

近兵衛が軽い口調で呼びかけた。

「待ち構えられていましたね」

じろりとにらみつけられて、近兵衛が立ちすくむ。気がついて、あわてて櫓持つ手を動かす。

「いえ、あっしは誰にも話してはいませんよ。だって関宿に来ること、あっしは知らなかったんですから」

その通りだ、と伊之助は思った。だが、向こうにはばれていた。手ぐすね引いて待っていた。いったいどうしてなのか。

うぐっ。不意にうめき声がきこえた。

なんだ、今のは。驚いて伊之助はまわりを見渡した。

近兵衛がぐらりと体を揺らし、櫓に抱きつくような格好になった。

「近兵衛さん、やられたのか」

伊之助が叫ぶと、艫のそばにいた黙兵衛が近兵衛をかき抱くようにした。

月の淡い明かりに照らされて、近兵衛の右の太ももに一本の矢が突き立っているのが見えた。

逃がした。

佐十郎は呆然とした。あれだけの網を張ったのにあっさりと破られた。

あの浪人。予期した以上にすごい手練だった。家中の遣い手四人が命を落とし、二人が重い傷を負った。

とらえようとしたのがしくじりだった。はなから殺すべきだった。そのためらいが、やつを逃がすことになった。

しかも、自分の実戦経験のなさが響いた。真剣での戦いは、木刀を手にしての戦いともまったくちがっていた。

あまりのすさまじさに、俺は呑まれた。

しかし、もう経験した。二度と同じ過ちは犯さぬ。

そう決意したものの、佐十郎は疲れきった顔で船上を歩いた。

屋形船は、嵐の真っただなかにでもいたようなありさまだ。障子は飛び、壁は割れ、行灯が横倒しになっている。その上、畳は血で真っ赤に染められている。

もし殿が船にいらしたら、と思うとぞっとする。

死者はとうに運びだされ、重傷を負った者も医師の手当を受けているはずだ。

今度は必ず殺す。
やつはあきらめない男だ。あの獣のような瞳を見て、佐十郎はそうさとっている。
きっとまた襲ってくる。
そのときに必ず。

五

へとへとだった。
伊之助と黙兵衛、それに近兵衛の三人は古河に戻った。深夜の九つはすでにまわっていた。
伊之助なりに気を配って背後を探ったが、追跡してくる者はいなかった。
近兵衛が傷を負ったことで、黙兵衛が櫓をつかいだしたが、まるで舟は進まなかった。
それなら、と伊之助がやってみたが、黙兵衛よりはましといった程度で、船足は極端におそくなった。
このままだと追いつかれる怖れがあったので、舟を葦原に突っこみ、陸路で古河まで帰ってきたのだ。
近兵衛は黙兵衛が背負った。伊之助がやるつもりでいたが、黙兵衛がさっさと背中に乗せてしまったのだ。
古河の町に着き、まず医者に行った。やくざ者の常で怪我をする者は多いから、一家の者がよく世話になっている宋庵（そうあん）のところに近兵衛を連れていった。
深夜だったが、やくざ者の喧嘩やいさかいごとはときを選ばないから、宋庵は慣れっこで、すぐに診てくれた。
矢の刺さった太ももを目にしたときには、さすがの宋庵も眉根を寄せた。
「先生、あっしはもう駄目なんですかい」
布団の上にうつぶせに寝かされた近兵衛が必死の目で見あげる。
「大の大人がそんな情けない声をだしなさんな」
宋庵がたしなめる。
「でも……」
「大丈夫だよ。このくらいの傷で滅多に死ぬものじゃない」
近兵衛はほっとした色を顔に浮かべた。
「さて、抜くか」
宋庵が伊之助と黙兵衛を見た。
「動かないようにがっちりと押さえてくれ」
二人が近兵衛の体を抑えこんだのを見て、宋庵は矢に手をかけた。首を傾け、近兵衛がおびえた目でじっと見ている。瞳が震えている。
「これを噛みな」
宋庵が手ぬぐいを近兵衛の口に押しこんだ。

あらためて矢を握り、一気に引き抜いた。くぐもった悲鳴が部屋に轟く。
伊之助は、海老ぞりになりかけた近兵衛を見ていられなかった。
近兵衛はほとんど気絶していた。脂汗が顔に浮いている。いや、全身にだろう。
宋庵が傷口に焼酎を吹きかけ、毒消しをする。膏薬を押しこむようにしてたっぷりと塗り、晒しをぐるぐると巻いた。
近兵衛はぐったりしたままだが、矢が抜かれたことで顔色が少しはよくなったようだ。
「今日は動かさんほうがいいな。ここに泊めてやろう」
宋庵がいい、伊之助に手のひらを差しだした。
「いくらです」
「三両だな」
「今ないんですけど」
「なら、つけておこう。あとで親父さんのほうからもらう」
「助かります」
伊之助と黙兵衛は宋庵の家を出た。井上収二郎の屋敷に報告をしに行くべきだったが、さすがに疲れきっていた。
二人は家に戻った。
郡兵衛が心配して起きていた。
「どうだった」

高ぶりを感じさせない静かな口調できく。そのあたりは、いかにも一家の頂に立つ親分だ。
「しくじったよ」
伊之助は平静を装って答えた。
「そうか」
落胆の表情を見せたものの、郡兵衛はかすかな笑みを頬に浮かべた。せがれが無事に戻ってきたことには、この上ない喜びがあるようだ。
伊之助は黙兵衛に、おやすみなさい、といって自分の部屋に入った。
布団を敷いて横たわる。
考えるのは、やはり待ち伏せされていたということだ。おそらく黙兵衛も今頃、同じ思いを抱いているはずだ。
どうしてなのかさっぱりわからない。久世家の者はどうやって襲撃を知ったのか。あの屋形船は周到に用意されていた。
あの船に久世豊広はいなかった。
おかしい。なにかおかしい。
そんなことを考えているうちに、伊之助の意識は暗黒がのばしてきた腕に持ちあげられ、運び去られた。
翌朝、伊之助と黙兵衛が向かったのは、井上収二郎の屋敷だ。

さすがに収二郎は首尾を気にしていたようで、ろくに寝ていなかった様子だ。目がずいぶんと赤い。

「よく無事だった」

二人を広い座敷に導いた。座敷のなかは、障子によってさえぎられた陽射しがかすかに入りこみ、うっすらとした明るさに包みこまれている。

妻のおひさも収二郎につき合ってずっと起きていたようで、目が赤い。

「これから大事な話がある」

収二郎が、おひさに席をはずすように命じた。おひさは静かに部屋を出ていった。

「して、首尾はどうであった」

収二郎が低い声できく。もっとも、黙兵衛が首桶を持っていないことで、どういうことか想像はついているはずだ。

伊之助はしくじりを伝えた。無念で涙が出そうになった。

「そうか」

収二郎も残念そうではあるが、口調は淡々としていた。

「内通者がいます。もしくは策が漏れています」

伊之助は思いきって口にした。

収二郎が瞳を光らせる。

「昨夜の襲撃を知っているのは俺だけだ。殿もご存じない。むろん妻も知らぬ」

「では、井上さまのほうからは漏れてはいないと？」

「むろん調べてはみるが、おそらく漏れてはいないだろう。内通者も考えられん」

収二郎の言葉なら信用できた。

となると、と伊之助は思った。漏れたのは自分たちのほうか。

久世豊広の首を狙う。そのことを知っているのは、あとは郡兵衛のみだ。

まさかとっつあんから。

いや、まさか、そんなことは考えられない。

郡兵衛の口はかたい。どんな脅しにあったところで、口を割る男ではない。口を割るくらいなら死を選ぶ。

だからこそ一家を束ねていられるし、ほかの一家の攻勢に負けることなく古河で一家を立て続けてこられたのだ。

収二郎が案じ顔をしている。

「無理なら、やめてもいいぞ」

黙兵衛が黙って見返した。

その瞳には異様なぎらつきがあり、ちらりと見たにすぎなかったのに、伊之助は背筋が寒くなった。

黙兵衛が伊之助を見ている。伊之助は黙兵衛のいわんとするところを読み取った。

「一度頼まれたら、音無の旦那は必ずやり遂げるそうです」

「殿」
襖の向こうから声がかかった。
「どうした」
「入ってもよろしいでしょうか」
「かまわん」
失礼いたします、と収二郎の家臣が座敷に足を踏み入れた。収二郎になにごとか耳打ちする。
収二郎は顔色一つ変えずにきき入った。
「そうか。あとで行く」
家臣が出てゆくと、収二郎が真剣な顔を向けてきた。
「伊之助。一家の子分らしい者が、死骸で見つかったぞ」
伊之助は、まさか、と思った。
「心当たりがあるのか」
「はい、この前から岩八という者が行方知れずになっているのです」
「そうか。まだ名はわかっていないようだ。伊之助、一緒に来てくれ」
「井上さま自ら行かれるのですか」
「常は家臣にまかせてあるが、こたびは郡兵衛一家の者だからな。気になる」

城下はずれの無住の神社。ここは確か迫宮神社といったはずだ。
この本殿の床下から、死骸が見つかったのだ。たまにこの社を掃除にくる年寄りの氏子が妙なにおいに気づいたのだ。
郡兵衛たちも、すでに境内にやってきていた。一家の者はいずれも目を血走らせている。
「とっつあん」
伊之助は駆け寄った。
「おう」
本殿の階段のそばにいる郡兵衛が力なく手をあげた。
「手を合わせてやってくれ」
伊之助は、階段下の石畳に横たえられている死骸を見た。死後、かなりたっているように思えたが、岩八にまちがいなかった。無念そうな顔をしているように見えた。
合掌し、岩八の冥福を祈る。
横に黙兵衛がやってきて、死骸のそばに片膝をついた。かなりにおっているが、かまうことなく顔を寄せてじっと見ている。
岩八は胸を一突きにされている。おそらく匕首だろう。
「お奉行」
本殿近くの灯籠のそばに立つ収二郎の家臣が手をあげた。
「こちらにいらしていただけますか」

収二郎が歩み寄る。伊之助と黙兵衛も寺社奉行のあとについていった。
「どうした」
「これをご覧ください」
なにかを引きずったような跡だ。それが本殿の床下まで続いている。
「死骸はここから運ばれたのか」
「そういうことだと思います」
引きずったような跡は灯籠のすぐそばからはじまっている。まちがいなく岩八は、この灯籠近くで刺し殺されたのだ。
ということは、と伊之助は思った。犯人は、最初から殺そうとしたわけではない。でなければ、もう少し死骸を隠す工夫をしただろう。なにか理由があって、ここで岩八を殺す必要に迫られたのだ。
郡兵衛は階段のそばを離れず、岩八の死骸を悲しそうに見ている。その姿を見て、伊之助は今にも涙が出そうになった。
「この前、はじめて飲んだばかりなのに」
思わず口をついて出た。そのときの面影が目の前に浮かび、本当に涙が出てきた。
その言葉を耳にしてか、黙兵衛が顔をさっと振り向けてきた。厳しい表情をしている。
「どうかしたんですかい」
伊之助は涙を手の甲でぬぐってたずねた。

黙兵衛が怖い顔で顔を寄せてきた。
どうやら、はじめて、ということに引っかかっているのが理解できた。
伊之助は息を一つ飲みこんだ。
「ええ、そうですよ。あっしはこの前、岩八とはじめて料亭に行って飲んだんです」

六

飲みに行ったのはいつのことだ。黙兵衛の顔には刻まれている。
「あれは、いつだったですかね」
伊之助は必死に思いだした。
「この前、あっしがふつか酔いだったときです。ですから、七日前でしょうか。飲んだのは石脇という料亭です」
よく行くのか。
「とんでもない。高くて」
岩八が連れていったのか。
「そういうことです。岩八のほうがはじめて誘ってきたんです」
石脇に案内しろ。
「はい、お安い御用です」

収二郎と郡兵衛に、旦那の用事をすませてくる、と伊之助は告げた。
「すぐに帰ってきます」
石脇はまだひらいていなかった。それでも、伊之助と岩八が飲んだ晩、店の離れを担当した女中に話をきくことができた。
「ええ、あの晩のことならよく覚えていますよ」
伊之助は、そのときのことを詳しく話してくれるように頼んだ。一朱を握らせると、途端に女中の口は軽くなった。
伊之助と岩八はかなり飲んでいた。伊之助がよく話し、岩八はきき役にまわっていたとのことだ。
「もう一人のお方は、盛んにこちらのお方にお酒を勧めていらっしゃいましたよ」
それはよく覚えている。
「もう一人の男がおいらになにをきいたか、覚えてないかい」
女中が不思議そうにする。
「覚えていらっしゃらないんですか」
「実はそうなんだ」
「なにを話していらっしゃいましたかねえ。もう一人の、その岩八さんというお方にはおききになったんですか」
「ちょっと遠いところに旅立ってな」

「そうなんですか」
女中は真剣に考えはじめた。
「ああ、そういえば」
ぽんと手を打つ。
「久世さまのお話をしていたような気がします。なにかそのお名が耳に飛びこんできて、古河で久世さまのお名をきくなんて、と頭に残っていました」
「久世さまか……」
まさか、という思いが脳裏にこびりつく。
あまりのことに愕然として、立っていられない。膝に力をこめ、なんとか立ち続けた。
黙兵衛を見た。険しい表情をしている。
伊之助は女中に視線を戻した。
「ありがとう」
礼をいって、石脇の門を出た。
「あっしの口から漏れたんですね」
岩八はどうしてか、伊之助からききだすことを目的に飲みに誘ったのだ。
「申しわけございませんでした」
伊之助は路地のまんなかで土下座した。額を土につける。いや、顔全体をつけた。
「あっしがへまを犯したせいで、旦那を危険な目に遭わせちまって」

あまりに情けなくて涙が出てきた。
「あっしの酒のだらしなさが……もう酒はやめます。二度と飲みません」
そのあとはもう言葉にならなかった。
肩が叩かれた。やわらかな叩き方だった。
伊之助は土にまみれた顔をあげた。黙兵衛が膝をついている。
手が握られ、ぐっと引かれる。伊之助は暗い水底から一気に引きあげられたような気分になった。
黙兵衛の目がすぐそばにあった。もう泣くな、と語っている。
「わかりました」
しくじりは自らの手で取り返せ、とも黙兵衛はいっていた。
「わかりました」
伊之助は体に力が宿ったのを感じた。手でぐいっと涙をぬぐう。
考えろ。そんな言葉が頭のなかにこだました。黙兵衛がいっているのだ。
なにを考えろというのか。
伊之助はすぐに思いついた。
どうして岩八は自分を飲みに誘ったのか。どうして自分が今度の企みに関わっているのを知ったのか。
そうだ、考えなければならない。今自分にできるのはこれだけだ。

伊之助はじっと下を向き、しぼりあげる気持ちで頭を働かせはじめた。
岩八の背後には誰かがいる。それはまずまちがいないだろう。
その者に命じられて、あるいは金で釣られて岩八は近づいてきたのだ。
その何者かが岩八を殺したのだろうか。
そうだとして、どうして殺したのか。
伊之助は必死に考え続けた。
そうか、と気がついた。いや、気がついたのは、黙兵衛のほうかもしれない。その考えが自分の頭に移ったにすぎないのだろう。
岩八にきだすように頼んだ者も、まさか予期していなかった重大事がもたらされて、思わず岩八の口封じをしたのではないか。それで岩八が本殿の床下にいたのもわかる。
伊之助と黙兵衛が関宿で町奉行所に連れていかれたのは、偶然ではなかったのだ。それまでのあいだに、岩八を殺した何者かは土井家のなかでなにか企みがあるのでは、とにらんでいたのだろう。
伊之助と黙兵衛。この二人がその中心にいるらしいことは、久世家側ではきっとつかんでいたのだ。
ふと伊之助は視線を感じた。黙兵衛が見つめている。
石脇へ戻れ、といわれている気持ちになった。伊之助は素直にしたがい、さっきの女中をまた呼びだした。

「忙しいところ、すまないね」
また一朱を渡した。
「ありがとうございます」
女中がさすがに恐縮して受け取る。
伊之助は黙兵衛の顔をじっと見てから、女中に問いをぶつけた。
「この前おいらと一緒に岩八が来たときだけど、岩八は慣れた感じだったね。岩八がここに来たのははじめてじゃないね？」
石脇は、岩八程度のやくざ者が繁く利用できる店ではない。それなのに、岩八は伊之助を自信たっぷりに連れてきた。
「確か、前にもいらっしゃいましたよ」
「誰かと一緒だね」
「そう思いますけど」
「誰と一緒だった」
「あれはどなただったかしら」
女中は思いだそうと努力してくれたが、やがてあきらめたように首を振った。
「私ではなくて別の者が、その日は離れを担当していたと思うんです。今、その者を呼んできます」
かなり待たされた。四半刻とはいわないが、それに近いあいだ待った感じを伊之助は受けた。

さっきの女中が再びやってきた。一人だ。
「ちょっと今、手を放せないというんで、話だけきいてきました」
伊之助は耳を傾けた。横で黙兵衛も同じ顔だ。
「博造さんとのことです」
「ひろぞう？　何者だい」
「小間物屋さんですよ。行商をしているんですけど、そういえばあたしの長屋にも来てくれたことがあります」
伊之助と黙兵衛は石脇を辞し、迫宮神社へ戻った。
「おう、用事は終わったか」
郡兵衛が近づいてきた。
検死医師による検死は終わり、岩八の死骸は今、運びだされようとしていた。
「なんだ、伊之助、どうした、なにかあったのか」
郡兵衛がきいてきた。
「えっ？　どうして」
「いや、目が赤いからよ」
「なんでもないよ」
伊之助は父親のもとを離れ、収二郎に声をかけた。

「なんだ」
「お願いがあります。岩八の死骸が見つかったことは伏せておいていただきたいのです」
これはむろん黙兵衛の考えだ。
「どういうことだ」
そうきかれても、黙兵衛からはそれ以上のことは読み取れなかった。黙兵衛は伝えたいこととそうでないことを、自在にだし入れができるようだ。伊之助としては答えようがなかった。
「そうか」
伊之助にもわかっていないのを理解して、収二郎が静かにうなずいた。
「とっつあん」
伊之助は郡兵衛に話しかけた。
「岩八の葬儀は行わないように、とのことだよ。ひたすら静かにしているようにって」
「葬儀をするなってどういうことです」
郡兵衛が黙兵衛にただした。
「――いや、なにも話してもらえないんじゃ、きいても仕方がないな」
わかりました、と郡兵衛は黙兵衛に向かっていった。
「旦那がいいといわれるまで、じっとおとなしくしてますよ」
「親分、そうなんですかい」

「岩八の仇を討たないんですかい」
ほかにも何人かの子分が文句をいいかけたが、郡兵衛がじろりとにらみつけると、黙りこんだ。
伊之助と黙兵衛は迫宮神社を離れた。
歩きながら伊之助は考えた。
小間物売りの博造。この男が久世家の手の者であるのはまず紛れもないだろう。
それにしても黙兵衛は、どうして収二郎と郡兵衛にあのようなことをいったのか。
ここは自分で考えるしかなかった。
必死に頭を働かせているうち、こうではないか、というものが浮かんできた。
岩八の死骸が見つかったことを、まだ博造に知られたくない、ということではないか。
ということは、今は博造を泳がせておくつもりなのだ。
そうだよな、と伊之助は思った。ここで博造をとらえるのはそうむずかしいことではないだろうが、そんなことをしたところでなんの益もない。
伊之助は、うしろを黙って歩いている黙兵衛を振り返った。
畏敬の念で一杯だった。この旦那は、常においらたちより一歩も二歩も先のことを考えている。
黙兵衛に博造の家に行く気はないのだろう。
ここは、まだこちらはなにも気がついていないふりをすることこそ大事だろう、と伊之助

は感じ取っていた。

七

なんとなく熱を感じた。

自分の熱ではない。伊之助は黙兵衛に目を向けた。

ぎょっとした。

黙兵衛の眉尻はあがり、目は鋭い輝きを帯び、唇はぐっと嚙み締められている。気迫が全身に満ちていた。

どうしたんだろう、と伊之助は思ったが、すぐに理由がわかったような気がした。

黙兵衛は闘志をたぎらせているのだ。その熱がこちらにも伝わってくるのだ。

伊之助は黙兵衛の顔をじっと見た。

必ずやり遂げてやる、という思いをまず感じた。

俺を引っかけようとしたつけは必ず払わせてやる。

伊之助はその迫力に肝が縮みあがった。黙兵衛はついに本気になったのだ。

むろん、これまで本気でなかったということはないのだろうが、そのさらに上に行こうというのだ。

気がつくと、黙兵衛がにらみつけるようにして見ていた。

伊之助は唾を飲みこんだ。

「なにか……」

いった途端、伊之助は黙兵衛の考えが理解できた。

屋形船を襲うなどという、単純な手ではもはや通用しない。

なにか策を考えなければならない。

その通りだ、と伊之助は心でうなずいた。

「もう一度関宿へ行きますか」

黙兵衛がかすかに首を振ってみせる。

伊之助は頭をめぐらせた。そうか、と思った。もし伊之助たちが姿を見せたら、今度は横山佐十郎は有無をいわさず殺しに来るはずだ。ここは、ほとぼりを冷ましたほうがよさそうだ。

だが、久世豊広についてさらにいろいろな話や噂を集める必要がある。今は、豊広について徹底して知ることが最も大切なことに思えた。

伊之助と黙兵衛は連れ立って、井上収二郎の屋敷に向かった。

収二郎は屋敷に戻っており、来客用の座敷ですぐに会ってくれた。

「来ると思っていた」

ぐいっと顔を近づけてきた。

「伊之助、おぬしらなにをつかんでいる」

「なんのことでしょう」
「とぼけるな。岩八殺しのことだ。なにかつかんだからこそ、岩八の死を隠すようにいったのだろうが」
伊之助は黙兵衛に視線を当てた。黙兵衛からは、いってもよい、という言葉が返ってきた気がした。
伊之助は説明した。
ほう、と収二郎は小さく声をあげた。
「そういうことだったか」
収二郎がため息をつきかけたが、そっと飲みこんだ。
「ふむ、漏れたのはおぬしからだったか」
伊之助はがばっと畳に両手をついた。
「申しわけございません」
「わしに謝っても仕方がない。それに、もうすぎたことだ。すべてはこれからだ」
「……はい」
「その博造という久世家のまわし者、しばらく泳がせておくと申したが、見張りをつけなくてよいのか」
「今はほっておけばよいと」
収二郎がちらりと黙兵衛に視線を流した。

「岩八を殺害した犯人がわかっているというのに、それを捕縛もせずにいるというのは、なんとも居心地が悪いものよな」
「これも豊広公の首を取るためです」
収二郎が首をかしげる。
「博造を泳がしておくことが、どうして豊広公の首につながるのかわしにはわからんが」
収二郎が黙兵衛を再び見やる。
「おぬし、もうなにか考えがあるのではないのか」
伊之助も同感で、そっと黙兵衛の表情をうかがった。
しかし、黙兵衛はなにも語ってくれず、得るものはなにもなかった。
「それで、どうしてここに」
収二郎がきく。
「岩八のことを話すためだけではないだろう」
「ああ、それでした」
伊之助は首をうなずかせ、声を低めた。
「井上さまは、関宿に手の者を配しているということでしたね。そのお人に、豊広公に関するどんな噂でもいいから拾ってきてほしいのです」
「なるほど」
収二郎が納得した声をだす。

「豊広公の習慣を知ろうというのか。よかろう、すぐに命じよう」
「よろしくお願いいたします」
伊之助は深々と頭を下げた。
用件がすみ、井上屋敷を辞した伊之助と黙兵衛は家に戻る道を歩いた。
ふと、黙兵衛が道をそれてゆく。
「音無の旦那、どちらへ行かれるんです」
きいたところで無駄なのに、伊之助はいまだに口をついてしまう。
黙兵衛はすたすたと歩いて、渡良瀬川の河原にやってきた。
風が一気に吹き渡ってきた。顔にぶつかる感じだ。涼しくて気持ちがいい。
広々とした天地が目の前に広がっていた。川沿いにはさほど高い木がなく、どこまでも遠く見渡せた。
渡良瀬川は今いるところから見ると、左に蛇行し、その先は右に曲がっているように見えるが、あまりに遠くて定かではない。
水面には行きかう舟の姿がとにかく多い。ほとんどが帆を掲げた高瀬舟だ。下流に向かう舟は強い風をはらみ、力強さを感じさせるはやさで行く手を目指している。
「いい眺めですねえ」
伊之助はうーん、とのびをした。
いきなり腹に響くような風切り音がした。

なんだ。驚いて横を見ると、抜き身を手にした黙兵衛がちょうど振りおろしたところだった。
伊之助はびっくりして跳びすさった。
黙兵衛はそんな伊之助などお構いなしに、何度も刀を振りおろし続けた。
鬼気迫るものがあり、伊之助はただ呆然として見ているしかなかった。あまりの迫力に声すら出なかった。
やがて、黙兵衛の顎から汗がしたたり落ちてきた。体もまるで川にでも入ったかのようにびっしょりになっていた。
動きをとめ、口から太い息を吐いた黙兵衛は肩を大きく震わせた。鞘に刀をおさめる。
その刀を伊之助に鞘ごと預けてきた。
「なんですかい」
きいたが、黙兵衛の表情はなにも告げようとしていない。
いきなり帯を解き、着物を脱いだ。あっという間に下帯一枚になった。
その筋骨隆々とした体は、人には見えなかった。なにか別の獣を見ている気分だ。
黙兵衛が足を進ませ、流れに体を沈めた。
伊之助がぽかんと見ているうちに、泳ぎはじめた。
泳ぎは達者だった。どんな流儀を習ったのかは知らないが、流れと仲むつまじく泳いでいる。

どう見ても、子供の頃から泳ぎを得意としているとしか思えない。海で泳いでいたか、あるいはもっと急流で鍛えていたのか。

顔を水面にだして、手足をゆったりと動かしているさまは、いかにも気持ちよさげだ。いったいどこの出なんだろう。伊之助は思ったが、その答えが出るはずもなかった。

黙兵衛は結局、四半刻ほど渡良瀬川の流れを相手に遊んでいた。岸にあがってきたときはもっと泳ぎたかったような顔をしていたが、さすがに体が冷えてきたようだ。

伊之助は腰につるした手ぬぐいを貸した。黙兵衛は黙って受け取り、体をふいた。手ぬぐいを返してくる。

身支度をととのえた黙兵衛は伊之助が差しだした刀を腰にぐいとねじこんだ。いかにもさっぱりした顔をしている。

「音無の旦那、おなかはお空きじゃないですかい。この前の鰻はいかがです」

八

昨日と同じように、黙兵衛は渡良瀬川の河原で刀の稽古をし、そのあと流れで泳いだ。泳ぎに関しては昨日よりはるかに長く、半刻以上は流れに浸かっていた。

伊之助は泳げないことはないが、さほど得意でもなく、それにまだ水は冷たく、つき合う気にならなかった。

また鰻屋で飯にした。二日連続で飽きるかと思ったがそういうこともなく、そのうまさにあらためて満足した。

その後、矢で傷を負った近兵衛の見舞いに行った。

医者の宋庵によると、治りきるまでおそらく二月近くはかかるのでは、ということだ。

「そんなにですか」

伊之助は傷の重さに暗澹（あんたん）とした。なんといっても、この結果を招いたのは自分なのだ。そのことを、近兵衛にはいいだせなかった。卑怯なやつだな、と伊之助は自分を責めたが、やはり口からは出てこなかった。

「二月ものあいだ、ずっとここにいるんですか」

伊之助は宋庵にたずねた。

「あと四、五日はいたほうがいいだろうが、そのあとは家に戻ってもらってけっこうだ」

「そうですか」

近兵衛に体を向けた。

「二月のあいだ、おいらのほうで面倒を見させてもらうよ。金のほうも心配しなくていいよ」

「そうですかい。そりゃ、ありがたいですねえ。働きに出なくてすむというのは、うれしいですよ」

近兵衛は無邪気に喜んだ。その笑顔が伊之助の胸をちくりと刺した。

伊之助と黙兵衛は家に戻ってきた。
その直後、収二郎からの呼びだしが来た。
千宏屋で待っているということで、二人は使いとともに道を急いだ。
離れで収二郎が待っていた。瞳を輝かせている。耳よりの話をきいてきたというのだ。
「どんなことです」
伊之助も興味を惹かれた。
「今日の夕方、豊広公がわずかな供を連れて、横山佐十郎の屋敷を訪れるというのだ」
「どうして豊広公が」
「剣の稽古よ」
伊之助は眉をひそめた。信じられない。剣の稽古なら、佐十郎のほうが城に行くのではないか。
それに、今日というのもなにかおかしい。おとといい、屋形船であんなことがあったばかりなのに、わずかな供を連れて城を出るなどあり得ないような気がする。
剣術指南役の横山佐十郎としては、城内にいるように風流人の殿をむしろいさめなければならないはずだ。
「どう思います」
伊之助は黙兵衛にただした。
黙兵衛の顔には、今日というのはおもしろい、というものが浮かんでいるように思えた。

これはなんなんだろう、と伊之助はいぶかった。いつものように考えるしかなかった。
下を向き、必死に頭をめぐらせる。
ふと、ひらめいたものがあった。
罠だと黙兵衛が考えているのは紛れもないことだろう。
横山佐十郎は、おとといあのようなことがあったばかりなのに、罠を仕掛けてきたことになる。
これはどういうことなのか。
つまり横山佐十郎は、黙兵衛がほとぼりを冷ますことなく、間髪入れず仕掛けようとしていると考えていることになるのか。
佐十郎としては、駕籠に乗った豊広が城を出てからのわずかな道中のあいだ、黙兵衛が狙ってくるのでは、と思案しているのだろう。
となると、佐十郎は道中、おそらく豊広からつかず離れずという位置にいるはずだ。
いや、駕籠の中身は豊広ではない。駕籠に乗っているのは身代わりだろう。
豊広自身、城内で厚く警護されているのだ。
こいつを逆手に取れないだろうか。
佐十郎が豊広のそばにいないのなら、と伊之助は考えた。城に忍びこみ、豊広を討てないだろうか。
そこまで考えてきて、横山佐十郎の狙いが伊之助は読めた気がした。

佐十郎は城内にいるのだ。そして豊広にぴったり張りついている。そこで、黙兵衛がやってくるのを待っているにちがいない。

その考えにまちがいがないか、伊之助は心のなかで確かめてみた。

まちがいない、という確信が胸にすんなりとおさまった。

伊之助は顔をあげ、自分の考えを黙兵衛と収二郎に語った。

「なるほど、そういうことか」

きき終えて収二郎がぽつりとつぶやく。

黙兵衛のほうは無表情だ。だが、すでにここまで考えていたことはわかった。いや、自分などよりもっとはやく結論に達していたのだろう。

「どうされます」

伊之助は黙兵衛にはかった。

おまえはどうしたい。

「あっしとしては、ここはおとりの駕籠を見てやろう、という気持ちで一杯です」

いってから、大丈夫だろうか、と伊之助は危ぶんだ。関宿に赴くのはあまりに危険すぎないか。

もし見つかったら、その場で斬り殺されかねないのだ。

刀を手に、黙兵衛がすっくと立ちあがった。その顔は生気に満ちている。黙兵衛は関宿に行く気満々なのだ。

その顔を見て、大丈夫だ、と伊之助は思えるようになった。黙兵衛と一緒にいれば、なにも怖れるものはない。

道中、襲ってくることはないだろう、と佐十郎は踏んでいた。

だから、ずっと豊広のそばを離れずにいた。

あの浪人は、きっと城内に忍びこんでくる。城に忍びこむのは練達の忍びならさほどの苦労はないだろうが、そこから大名を闇討ちにするというのはまずできることではない。

だが、あの獣の瞳を持つ男なら、そのくらい平然とやってのけるだろう。この横山佐十郎が豊広のそばにいないのなら、絶好の機会と見て。

城内に忍びこんでくれば、佐十郎は取り囲んで斬り殺すつもりでいた。斬り殺す――その一点に集中するつもりだ。

浪人の首は塩漬けにして土井家に送る。それで、こちらの意図は伝わるはずだ。

一晩待ったが、浪人はやってこなかった。さすがに城中まで入りこむつもりはないということなのか。

いや、それとも、と佐十郎は思った。こちらの意図を読まれたか。

十分に考えられた。

目付頭の平崎館左衛門の手の者によれば、夕闇が立ちこめる前、あの浪人は従者も同様の伊之助という若者を連れて、古河の町を出たということだった。

残念ながら、二人の姿は夜の闇のなかに消えてしまったそうだ。
しかし、おそかれはやかれ、いずれやつとはやり合える。今度こそおくれを取らぬ。
その自信が佐十郎にはあった。
今度やり合えば、勝つのは俺だ。
「横山佐十郎どの」
夜が明けて間もなく、豊広の小姓が佐十郎の部屋にやってきた。
「殿がお呼びです」
佐十郎は小姓とともに対面の間に向かった。
一段あがった畳敷きの上に豊広は座っていた。すでに着替えをすませている。
ただし目が赤く、寝不足のような顔色をしている。そのせいか、やや不機嫌そうだ。
「昨夜は静かだったようだの。おかげで熟睡できたわ」
開口一番、形のいい口から吐かれたのは皮肉だった。佐十郎は黙って頭を下げた。
「来なかったのだな」
「御意」
「余をおとりにした策にははまらなかったか。残念だの」
「申しわけございません」
豊広が脇息から身を持ちあげ、にらみつけてきた。
「そちのために、余は別邸に行けなかった。田奈にも会えなかった」

田奈というのは、豊広が今最も気に入っている側室だ。
「申しわけございません」
佐十郎としては、同じ言葉を繰り返すしかなかった。
「おとといは船を燃やしてくれたしの」
たいした火ではなかったが、佐十郎はまたもこうべを垂れるしかなかった。
「佐十郎、今宵も余は足どめか」
「いえ、そのようなことは」
「そうか。ならばよい。下がれ」
佐十郎は平伏してから、対面の間をあとにした。
廊下を歩きつつ、舌打ちしたい気分だった。浪人に策を見破られた情けなさと、豊広の失笑を買った自らの不甲斐なさだった。
考えてみれば、だいぶ無理のある策だったように思える。やつを城内に誘うなど。
だが、そのくらいのことをしないと、あの浪人を討ち取れない、という思いがあったのは事実だ。
やつを本丸御殿まで誘いこめれば、いくらあれだけの手練といえども、逃げ場を失うに決まっている。
だがそれも、やつが乗ってこなかった今ではむなしいものでしかない。
少し眠気が出てきた。

一眠りするか。佐十郎は城を下がった。
城からほんの一町ほどのところに屋敷はある。小さいながらも切妻屋根がついた門をくぐり、玄関に入った。
「お帰りなさいませ」
妻の優那が出てきた。気がかりそうな顔をしている。
「あなたさま、大丈夫ですか」
「なにが」
式台にあがり、両刀を手渡した。
「とてもお疲れになっているようですから」
佐十郎は微笑した。
「たいしたことはない。ちょっと徹夜しただけだ」
「そうでございますか」
優那の顔から心配は取り払われない。
「美雪に佐智はどうしている」
佐十郎は話題を変えた。二人の子供。いずれも女の子だ。
「朝餉をとっています」
まだ幼い。七つと五つだ。
佐十郎は台所の脇の部屋に向かった。

「おはよう」
声をかけると、二人の子供は箸を置き、つつましく背筋をのばした。それから、父上、お帰りなさいませ、とややたどたどしさを感じさせる声でいった。
佐十郎はほっと息をつき、二人のそばに腰をおろした。
二人とも、はにかんだような笑顔で父親を見ている。
佐十郎は両腕をのばし、二人の子の頭をなでた。二人の笑顔が広がる。
佐十郎は、一気に疲れが抜けていったような気がした。

九

関宿の城下に着いたのは夕闇が深まり、一日が夜に色を変えてゆく直前だった。
伊之助にしてみれば、当然、駕籠が出る城に向かうと思ったのだが、黙兵衛はちがう方角へ足を踏みだした。
「旦那、駕籠を見に行かないんですかい」
むろん、その問いには答えてもらえない。黙ってついてゆくしかすべはない。
黙兵衛は城下をいろいろと歩きまわった。最初はただ道に沿って歩いていただけだったが、やがてせまい路地を急に入ったり、不意に道を右に折れたり、唐突に小さな神社に足を踏み入れたりした。

「誰かついてきているんですかい」

さすがに伊之助も、黙兵衛が尾行している者を撒こうとしているのを理解した。

もちろん尾行者などおらず、ただつけられているのでは、と仮定してのものかもしれない。

伊之助が問うた途端、黙兵衛は足をとめた。もう十分だろう、という表情に思えた。

そのときだった。一人だな、という黙兵衛の声が伊之助はきこえたような気がした。

一人というのはなんだろう。尾行している者のことにちがいない。

黙兵衛がまた足を進めはじめた。

今度こそ城に向かうのだろう、と伊之助は思ったが、黙兵衛は船着場に足を運んだ。そこはさっき来たばかりのところだった。

境河岸に向かう渡し舟に乗る。舟は当たり前のことながら、利根川を渡りだした。

「音無の旦那、駕籠は見ないんですかい」

伊之助はまわりをはばかって、ささやくようにきいた。

黙兵衛にその気はないようだ。すっかり暗くなりつつあるまわりの光景を楽しんでいるようにさえ映る。

その顔を見る限り、もともと駕籠などには興味がなかったとしか思えなかった。

どういうことだろう。伊之助は必死に考えたが、重い石をかぶされたみたいに答えは出てこなかった。

結局、利根川沿いの左岸を歩いて黙兵衛は古河に戻ってきてしまったのだ。

その後、伊之助と黙兵衛は湯屋に行って汗を流した。夕餉をとり、伊之助は自室で寝についた。

行灯を吹き消し、目をつむったとき、一人だな、との黙兵衛の声を思いだした。

ああ、こういうことなのかな、と伊之助は漠然とした答えを得たように思った。

今日の黙兵衛の関宿行きは、自分たちを監視している者が何人なのか、確かめることにあったのかもしれない。

だとすれば、あの動きも理解できるというものだ。

どうして尾行者の数を確かめたかったのか、伊之助にはさっぱりわからないが、黙兵衛のすることに無駄やまちがいがあるはずがなかった。

翌朝は気持ちのよい目覚めだった。だるさが体を包んでいたが、それも朝餉を食べればすっきりするだろう。

井戸で顔を洗ってから、伊之助は台所横の部屋に向かった。

黙兵衛がいて、朝餉を食べていた。

「おはようございます」

伊之助は、うなずきを返してきた黙兵衛の向かいに座った。すぐに勢次が膳を持ってきてくれた。

納豆が主菜だ。伊之助の好物であるしじみの味噌汁がうれしかった。

「うまそうだね」
伊之助は勢次に笑いかけてから、いただきます、と勢いよく食べはじめた。
「昨日のことをききたいんですけど、よろしいですか」
箸を置いて、黙兵衛にたずねる。黙兵衛は箸をとめようとしない。
「あの、音無の旦那、どうしてすぐに引き返されたんです」
黙兵衛は納豆をたっぷりかけたご飯を、大口をあけて一気に流しこむようにした。
うまそうに咀嚼している。残念だったが、教える気がないのなら仕方がない。
「音無の旦那、これからどうするんですかい。まだやるんですよね」
伊之助は新たな問いをぶつけた。
当然だ、と黙兵衛の顔には記されている。
「手立てはお考えになっているんですかい」
むろん。
「どんな手です」
黙兵衛が右手の人さし指を立てる。
伊之助はその意を解しかねた。じっと人さし指を見続ける。
脳裏に一筋の光が走ったかのように、黙兵衛のいいたいことがわかった。
「もう一度という意味ですね。もう一度とおっしゃいますと？」
考えろ。

考えるまでもなかった。台所にいる勢次をはばかって、小声でたずねる。
「また豊広公が船遊びをするところを狙うんですかい」
そういうことだ。
「同じ手は無理じゃあないですか」
黙兵衛の表情が微妙に動く。同じ手だからいいんだ。
「どうしてです」
黙兵衛はこれには答えてくれなかった。
「確かに、向こうも同じ手をつかうとは思わないでしょうから、油断を衝くということにはなるかもしれないですけどねえ」
伊之助は考え続けた。
頭をひねっているうちに、なんとなく答えらしいものが浮かんできた。
「音無の旦那がおっしゃりたいのは、こういうことでいいんですかね」
伊之助はそう前置きしてから語った。もちろん声を低めるのは忘れない。
「豊広公は今、城に押しこめられているも同然ですね。別邸には行っているようですけど、遊びはまったく許されていないはずです。いずれ我慢がきかなくなり、今度こそ船遊びをするにちがいない。そこを狙うんですか」
そうだ。
「でも船頭はどうするんですか。近兵衛さんが治るのを待つんですか」

黙兵衛が伊之助を指した。

「は？　なんです」

人さし指は動かない。じっと伊之助を指し続けている。

「あっしが船頭を、ということですかい。あっしには無理ですよ」

やるんだ。

「でも――」

やるんだ。俺が鍛えてやる。

黙兵衛に抜き身を突きつけられたようににらみつけられては、逃げ場はなかった。やるしかなかった。

朝餉を終えると、伊之助と黙兵衛は渡良瀬川に舟を浮かべた。

黙兵衛としては、できるだけ人目につくところは避けたいようだった。

それはそうだろう。舟を操る鍛錬をしているところを久世家側の者に見られたら、狙いは見え見えになってしまうのだから。

しかし、こんなことになるとは伊之助は思いもしなかった。

黙兵衛は舳にいて、厳しい視線を送ってくる。

棹で水底を突いて船を進ませることについては、そんなにむずかしいものではない。それでも、赤子が歩くようなたどたどしさがあったが。

問題は櫓のほうだ。こちらはそうはうまくいかない。なにしろほとんど進まないのだ。

半町ほどの幅を持つ渡良瀬川は今日も穏やかで、ほとんど流れがないのだが、まるで激しい流れに逆らっているかのように、舟は前に行かない。

この体たらくで、船辰の養子になっていたらなどとよく思ったものだ、と伊之助は自嘲した。船頭としての素質など、まるでないではないか。

それでも伊之助は必死に漕ぎ続けた。

ひたすら揺れ続ける舟の上で踏んばっているせいでまず腰が痛くなり、次いで太ももにも痛みが広がってきた。さらに、腕が重くなってきた。手のひらもすりむけてきた。

それでも、習うより慣れろ、という言葉もあるくらいだ、やり続けていればいずれこつがつかめるのでは、と思った。

だが、初日はまったくものにならなかった。

その夜はもうへとへとで、湯屋に行く気にすらならなかった。

井戸で水をかぶって、汗を流した。そこら中がしみた。それで少しは疲れが取れたような気がしたが、勘ちがいにすぎなかった。

布団に横たわったときは極楽に思え、これならすぐに眠れると感じたが、逆に目は冴えるばかりだった。

伊之助は、あまりに体を激しくすり減らしすぎると、眠気がやってこないというのをはじめて知った。

それに、まだ体が舟の上にいるかのように揺れている。

実際には動いていないのだろうが、体が本当に左右に持ちあがったり、腰のあたりが逆に沈みこんだりしている感じだ。

伊之助は我慢して、目を閉じ続けていた。眠れないにしても、こうして体を休めてやれば、きっと疲れは取れるはずだった。

十

廊下を静かに歩く足音がきこえた。

収二郎は顔をあげた。文机の上の本を閉じる。妻だろう。

「おまえさま」

襖越しに声がかかる。

「どうした」

「お客さまです」

収二郎は立ちあがり、襖をひらいた。おひさが廊下に正座している。

「どなただ」

「あの、前にいらしたことがあるお侍なのですが、お名を申されないのです」

収二郎は眉根を寄せた。そういう者で心当たりは一人だ。

「一人で来たのか」

「はい、お一人です」

伊之助はどうしたのだろう。

「今、何刻かな」

「先ほど了乗寺（りょうじょうじ）の鐘が鳴りました。五つを少しすぎたところだと思います」

ならば、そんなにはおそくない。ただ、収二郎にとってこんな刻限の客は珍しい。

収二郎は来客用の座敷に向かった。

そこにいたのは、やはりあの浪人だった。音無黙兵衛。背をのばして正座している。

「失礼する」

収二郎は黙兵衛の前に座した。

「なに用かな。一人で他出するなど、珍しいではないか」

軽口をいうようにいったが、黙兵衛は押し黙ったままだ。

「伊之助はどうしたのかな」

むろん返事はない。

「せっかくおいでになってくれたのはうれしいが、なにもいわれんのではそれがしとしても、ちょっと困るな」

収二郎は、本当にこの男、口がきけないのでは、と思わざるを得なかった。

じっと黙兵衛を見て、なにかいいたがっていることがあるか、見定めようとした。

しかし、なにもわからなかった。

伊之助はすごい、と収二郎は感嘆した。あの男こそ、特異な才を持っているのではないだろうか。

「なにか用があってまいられたのはまちがいないだろうが、どんな用かな」

一人で来たということに、なにか意味があるのだろうか。

あるのかもしれないが、子供ではないのだから、黙兵衛だって一人で出歩くことはあるだろう。古河に来る前も、一人で旅してきたのだろうし。

まさか、とふと収二郎は思った。腹を空かしているのではないのか。

「夕餉は召しあがったか」

黙兵衛がうなずいたように見えた。

そうか、すませてきたのか。

おっ。収二郎は光明を見た思いだった。黙兵衛と気持ちが通じた。

そうか、こうやって問いを繰り返していけばいいのだ。

収二郎は一つ階段をのぼった気分だった。

「伊之助は家かな」

うなずいた。

「ここに来たのは、なにか用があってのことですな」

またうなずく。

「知らせたいことでも？」

首を横に振る。

「なにかほしい物でも？」

うなずいた。

おう、と収二郎は一安心した。大きく前に進んだ。

それにしても、ほしいものとはなんだろう。

そういえばこの前、伊之助を通じてこの男がほしがったものがあった。

あれは屋形船の図面だ。また同じような類のものが、ということは考えられないか。

「ほしいのは図面かな」

深くうなずいた。

いきなり当たった。

なんの図面だろう。また屋形船ということはまずあり得ない。

「また船でござるか」

一応きいたが、首が振られた。図面を必要とするものというとほかになにがあるか。

建物だ。

この男は豊広を標的としている。だとすると、一つ考えられるものがある。

「関宿城の図面でござるか」

首が振られる。

とすると、どこか。

「関宿城の本丸御殿の図面かな」
そこに久世豊広は住んでいる。
それもちがった。確かに、本丸御殿は忍びこむには広すぎる。
ここ古河城の本丸御殿でも、建坪で優に一千五百坪はあるのだ。久世家の本丸御殿も一千坪はくだらないだろう。
だが、黙兵衛の表情からだいぶ近くなってきたような感触がある。
本丸御殿が近いとなると、それに似たようなものとなるとなにか。
そうか、と収二郎のなかでひらめいたものがあった。
「久世家の別邸の図面でござるな」
だが、黙兵衛はうなずかない。
当てがはずれた。どういうことだ。どうしてちがうのか。
収二郎は戸惑った。
ああ、そうか。
黙兵衛は久世家の別邸の図面が、土井家では手に入らないのを理解しているのだ。
つまり、この前の屋形船と同じでいいのだろう。収二郎は今度は確信を持って、言葉にした。
「土井家の別邸のものでよろしいのですな」
黙兵衛が大きくうなずく。

やはりそうだったか。うれしさが収二郎の心に満ちた。
「しかし、今ここにはない。明日中にきっと用意しよう。用意ができたら郡兵衛の家へ届けさせるが、それでよろしいか」
黙兵衛が深く顎を引いた。
「では、そうさせていただこう」
収二郎がいうと、黙兵衛はすっくと立ちあがり、用は終わったといわんばかりにさっさと座敷を出ていった。
収二郎は見送るのも忘れた。
やれやれ、とそこに脇息があればもたれたいくらいだった。
相手をしていて、あれだけ疲れる者も珍しい。気むずかしい殿の相手をしているほうがはるかに楽だ。
酒が飲みたくなった。座敷を出た収二郎は、黙兵衛を見送ったらしいおひさに酒の支度を命じた。
「冷やでよい」
すぐに徳利と湯飲みを持って、おひさが収二郎の部屋にやってきた。
おひさが杯を持たせてくれた。酒がそっと注がれる。
一息に飲んだ。うまい。五臓六腑にしみ渡る、という言葉がぴったりだ。
「たまらんのう」

おひさはそんな夫を見つめ、微笑している。
収二郎は杯を突きだした。
「おひさ、おまえもつき合え」

第四章

一

「もう我慢できんぞ」
叫びざま、一段あがった畳の上に豊広が立ちあがる。脇息を蹴りつけた。
脇息が、佐十郎のそばに転がり落ちてきた。
小姓の一人がすぐさま立ちあがり、脇息を抱えた。もとの場所に戻る。
ほかに三名の小姓がいる。いずれもはらはらしてあるじを見ていたが、非難めいた視線を佐十郎にちらちらと向けてきている。
殿をこんなに怒らせるなど、いったいなんなのですか。
佐十郎が豊広にさとられぬようにじろりとにらみつけると、四人の小姓たちは目をそらすか、面を伏せるかした。
佐十郎は豊広に視線を当てた。

外に出て、遊びたくてたまらないのを、豊広は隠そうともしていない。
佐十郎に、その気持ちはわからないでもなかった。
別邸に行く以外、鷹狩、野点、船遊び、遠駆けなど、あの浪人の標的になりそうなものはすべて禁じているからだ。
「どうか、おこらえに」
今、城外に出るのはあまりに危険すぎる。あの浪人の腕のほどがわかった今ではなおさらだ。
「どうしてだ」
「お命を狙う者がおるからです」
「そんなのはとうにわかっておるわ。余の命を狙う者ということで公儀に訴え出たらどうだ。余の言なら、公儀とて動いてくれよう。土井家は取り潰しよ」
「証拠がございませぬ。証拠もないままに訴え出たところで、下手をすれば讒訴と受け取られかねませぬ」
「証拠ならあるではないか」
佐十郎は遠慮がちに見あげた。
「船よ」
「屋形船のことにございますか」
「座敷が燃えたのであろう。それが襲撃のなによりの証となるではないか」

あれでは無理だ。あの浪人が火をつけたわけではない。
「お言葉ではございますが……」
「証拠にならぬと申すか」
「御意」
豊広が、ちっと舌打ちする。
「だから、あのとき取り押さえておけばよかったのだ」
それは、骨身にしみて感じている。佐十郎は平伏した。
「申しわけございません」
「そちのしくじりよな」
「その通りでございます」
豊広がどすんと腰をおろす。
「佐十郎、手立ては考えてあるのか」
「手立て、と申されますと？」
豊広のこめかみに筋が浮いた。
「そんなに鈍い頭であったか。刺客をとらえる手立てに決まっておろうが」
「考えている最中です」
豊広が畳を蹴り、再び立ちあがった。
「佐十郎」

目を怒らして怒鳴りつける。
「こちらから行って、殺してしまえ」
「は？」
「居場所はわかっておるのであろう。とらえるなどという、手ぬるいことはもうよい。さっさと殺し、余の自由を取り戻せ」
こちらから襲撃し、殺す。それしかあるまい、と佐十郎も踏んでいた。向こうに仕掛けられるのを待つのは得策ではない。
それに、屋形船での戦いで浪人に殺された四名の家族や一族が仇を討ちたがっており、その声を抑えられない。
やつの居どころを急襲し、首をあげる。それが最善の道だろう。
あの浪人は今、郡兵衛というやくざ者の世話になっている。
郡兵衛の家を襲うか。
家中の士を引き連れて、土井領に入りこむのはさしてむずかしいことではない。
ただ、襲撃の際、一人でもとらえられるのはまずい。仮に死者が出たとして、身元が知れるのもうまくない。
家中の者をつかうと、そういう危険がある。
浪人者を雇うか。だが、あの浪人を屠れるだけの手練を、江戸ならともかくここ関宿で集められるとはとても思えない。

浪人など関宿には一人もいないといっていいし、仮にいるとしても、それは旅の途上にある者だろう。その上、腕が立つとは限らない。
「どうした、なにを考えておる」
声が降ってきた。
佐十郎は顔をあげて、豊広を見た。怒りに燃える瞳にまともにぶつかった。
「佐十郎、今宵も余は田奈のもとに行くぞ。よいな」
本来なら、これもとめたいところだった。別邸までの道中が気になるし、別邸では城並みの警護の網を敷けない。
「なぜ黙っておる」
「どうぞ、お運びに」
豊広はまた座りこんだ。その顔には、いわれずともそうするわ、と書いてあった。
佐十郎は豊広の前を辞した。襖を抜け、廊下に出た。
いきなり哄笑がきこえた。豊広が小姓たちと佐十郎のことをいい合っているのだろう。
「いつまでもあやつのいいなりになってたまるか。余は余の道を行く」
「さようでございます。剣だけの男の言葉を、殿がおききになる必要などございませぬ」
「剣だけの男か。よういうたものよ」
佐十郎は情けなかった。この前の将軍御前試合が嘘のようだ。
あのとき、豊広は将軍にほめられたことを、大喜びで伝えてくれた。佐十郎も感激で胸が

一杯になったものだ。
あれからさほど日はたっていないのに、この変わりようはなんだろう。
今、佐十郎が豊広のそばにいる必要はない。豊広が外出するときだけつけばよい。
佐十郎は一度、屋敷に戻り、一休みしようと思った。城中の自らの部屋にいったん寄った。
佐十郎は剣術指南役として、控え室が与えられている。
そこで身繕いをしていると、襖越しに声がかかった。
「横山さま、いらっしゃいますか」
襖をひらいた。そこに立っていたのは、目付頭平崎館左衛門づきの小者だった。
「お頭がお呼びです」
小者とともに廊下を進む。
目付衆の殿中での詰所は玄関近くにある。
「しばらくお待ちください」
小者が詰所から十間ほど離れた廊下で、佐十郎をとめた。
目付は機密事項を扱うこともあり、目付以外の侍の詰所への立ち入りは禁じられているのだ。佐十郎も例外ではあり得なかった。
詰所に吸いこまれるように入っていった小者が待つほどもなく戻ってきた。
「こちらにおいでください」
詰所とはちがう方向に連れていかれた。

着いたのは、目付衆の詰所から半町ほど北へ行った一室だった。
八畳間だ。四方はすべて襖で、それらには色とりどりの草花が描かれていた。
「すぐにお頭はいらっしゃいます」
小者が出ていった。
佐十郎は正座し、刀を畳に置いた。
「失礼するぞ」
廊下から声がかかり、襖がひらいた。
「待たせたな」
いえ、と答えて佐十郎は館左衛門を迎えた。
「古河に放っている者から報告が入った。あの浪人のことだ」
佐十郎はやや緊張した。体から力を抜いて、耳を傾ける。
「やつが今、やくざ者の世話になっていることは存じておるな」
「はい、郡兵衛と申す者の家に」
「あの浪人は郡兵衛のもとにはおらぬぞ」
初耳だった。
「では、どこに」
「郡兵衛の三男を存じておるか」
「確か、伊之助とかいう男でしょう」

「そうだ。あの浪人は伊之助とともにある小屋に籠もっているとのことだ」
「小屋ですか」
「そうよ。人目につかぬその場所で、舟の鍛錬をしておるわ。伊之助に船頭をさせているのよ。かなり熱が入っているそうだぞ。伊之助は毎日くたびれ果てているそうな」
館左衛門がのぞきこむようにしてきた。
「どういうことだと思う」
「すでにおわかりなのでは？」
館左衛門がうなずく。
「やつはまた、屋形船を襲う気でいるのだな。この前と異なるのは、今度は殿がお乗りになっている船を狙う気でいるということだ」
「その通りでしょう」
佐十郎は同意し、館左衛門に確かめた。
「人目につかぬ小屋に二人きり、というのはまことですか」
「前にも申したが、腕のいい者が探っている」
館左衛門が自慢げに鼻をうごめかせる。
「人目につかぬところを選んだはいいが、あの浪人はわしが放った者の腕のよさを知らなかったと見える」
「そういうことでしょうね」

館左衛門が瞳を光らせる。
「横山どの、小屋を襲おうというのか」
佐十郎は答えなかった。
「わしに隠し立てすることはあるまい」
館左衛門の瞳には深い色が見えている。それは、佐十郎に対する同情心らしかった。
この人は、殿のことを思いながら、うとまれつつある佐十郎に好感を抱いてくれているのだ。
佐十郎は首を縦に振った。
「その通りです」
「こちらから襲いかかること、殿はお許しになったのか」
佐十郎は豊広とのやりとりをきかせた。
「なるほど、殿はなかなか短気におわせられる。我慢がもはやきかぬか」
館左衛門は苦笑を浮かべたが、すぐに表情を真剣なものに戻した。
「きっとあの浪人は、殿が船遊びをはじめるということが伝わるまで、鍛錬を繰り返すのであろうな」
「まちがいないでしょう」
よし、これはつかえる。
佐十郎は確信した。その小屋を多勢で囲み、一気に襲えばやつを討てるにちがいない。

人目につかない場所なら好都合だ。仮にこちらに死者が出たとしても運びだせる。
「その小屋はどこにあるのです」
「渡良瀬川の岸辺だそうだ。葦原のなかにひっそり建っているという」
それなら、舟で行けばいいだろう。古河領内を徒歩で行かずにすむのはますます都合がいい。
問題は、その小屋を襲うために俺が関宿を離れなければならないということだ。
家中の選り抜きの手練を集め、どんなに強力な布陣を組んでも、俺抜きではやつを仕留められぬ。
豊広のそばを離れることに一抹の不安があったが、どうせその小屋であの浪人を始末してしまえばすむことだ。
「横山どの」
館左衛門が声をかけてきた。佐十郎は見つめ返した。
「頼む、殿をしっかり守ってくれい」
この人はわかってくれている、と佐十郎は思った。殿とはちがう。あの浪人の真の恐ろしさを理解しているのだ。
「わかりました」
体に力がみなぎってきた。
よし、この人のためにも俺はやるぞ。

佐十郎は、襲撃の策を考えはじめた。

二

揺さぶられている。
勘弁してくれ、と伊之助は思った。もう少し寝ていたい。あとちょっと寝させてくれ。お願いだよ。
あれ、誰が揺すっているんだろう。
思い至った瞬間、伊之助は目が覚めた。がばっと身を起こす。
目の前に黙兵衛の顔があった。やっと起きたか。
体から、疲れは完全には取れていない。それでも一晩ゆっくり寝たことで、だいぶ楽になっていた。
渡良瀬川の葦原のなかに隠れるようにして建つ小屋で、黙兵衛と二人、泊まりこみはじめてからもう四日だ。
この小屋で寝るのにもだいぶ慣れた。最初は寝つきが悪かったが、今はもう家にいるのと変わらない。
この泊まりこみは黙兵衛の命だ。もちろん黙兵衛がしゃべるわけがないから、いいたいことを伊之助が察した結果なのだが、まさかここまで徹底してやるとは思いもしなかった。

黙兵衛にしてみれば、家から渡良瀬川までやってくるまでのときすらも惜しいということらしい。

渡良瀬川の流れで顔を洗った。朝餉は勢次が昨夜、届けてくれた握り飯三つだ。中身は梅干し。たくあんが四切れついている。

茶がないのが残念だが、別になくても死にはしない。

ややかたくなった握り飯で腹を満たし、竹筒の水で口を洗い流した。それで、伊之助は十分さっぱりした。

よしやるか。とうに食べ終えていた黙兵衛がぐいと顔を近づけてきた。

せめてもう少し腹がこなれてから舟に乗りたかったが、黙兵衛に逆らうことはできない。

葦原のなかに隠すように置いてある舟を、流れに押しだす。

まず黙兵衛が乗りこみ、伊之助は軽やかな足取りで続いた。

櫓を漕ぐのはまだまだだが、舟自体にはだいぶ慣れた。寝ているときも体が揺れている感じはしなくなっているし、ときおり他の舟に起こされる波を受けても、体勢が崩れることはまずなくなった。

だんだん船頭らしくなっているのは、まちがいない。

考えてみれば、行きかっている舟の船頭たちも、最初から鮮やかに舟を操れたわけではない。誰もが必死に漕ぎ続け、自由に流れを往き来できる腕を持つに至ったのだ。

だから、自分もいつかは同じようになれるはずだ。

問題は、豊広が次に屋形船に乗るまで、ときが限られていることだ。それだけの短いあいだに、どのくらいの腕前になれるものなのか。

黙兵衛が満足するほどの腕になれるとは思えないが、黙兵衛が名指ししてきた以上、それなりの素質はあると思っていいのだろう。でなければ、黙兵衛はほかの船頭捜しを命じたはずだ。

舟は流れのまんなかに出た。ここまでは棹をつかって来たから、楽なものだ。

ここからだった。

伊之助は棹を船底に置き、櫓を握り締めた。

黙兵衛が小さく首を振る。そんなに力を入れるな。

これまでよくいわれたことだが、どうしても力で舟を動かそうとしてしまう。

黙兵衛がいいたそうにするのは、力まかせではなく、体全体をつかってやわらかく漕げ、ということだった。腰と足をつかえ。

両者をうまくつかうことで体にやわらかみが生まれ、それが櫓に乗り移ってゆく。櫓と一体となれば全身になめらかな波が生まれ、舟は力を入れずとも進んでゆくはず。

まずは力を抜くことから伊之助は注意することにした。

そうはいってもやはりうまくいかず、舟はもたもたしている感じで、あまり進んでいかない。

黙兵衛はじっと見ていたが、つと立ちあがると伊之助に寄ってきた。

櫓を握る腕と足の位置を、少し変えてみるように仕草でいわれた。
いわれたとおりにしてみたら、驚きだった。体にしこっていたようなかたさがすっと消えたのだ。
「これは――」
顔をあげて、黙兵衛を見つめる。これならうまくいきそうだ。
そう思ったものの、さすがにそんなに簡単にいきはしなかった。力みがなくなり、櫓を漕ぐのにしなやかさが出てきたといえ、最初の一歩をようやく踏みだしたも同然だ。
だが、伊之助にしてみれば生き返った気分だった。これならやれる。自分の力に半信半疑だったところに、確信を持てたというのは喜びだった。
櫓を漕ぐことがこれまでは苦痛でしかなく、黙兵衛に命じられたものでなかったら、とうにやめていたはずだった。今は、舟を動かすうれしさに満ちている。
すいすいというわけには相変わらずいかず、よたよたしている感は否めないが、舟はまっすぐ進んでくれるようになった。
その日が暮れる頃には、伊之助の舟の操り方はだいぶさまになってきた。
いいぞ、もう一息だ。
黙兵衛の顔には、励ましの言葉が記してあるようだ。
そう、まだ一息も二息も残っているのだ。それを考えると、げんなりするものがないわけではないが、昨日にくらべたら格段にうまくなったことの喜びのほうがはるかに大きく、明

日になればもっとよくなる、との期待が伊之助の胸をふくらませている。
疲れきっているはずだが、今日はくたくたというほどではなかった。体もだいぶ慣れてきたのだろう。
黙兵衛が伊之助を鍛えはじめたのは、舟だけではなかった。万が一のことを考え、剣も教えだしていた。
これは伊之助の願いでもあった。伊之助には、侍になりたい、という望みがあった。
夜のとばりが完全におりてきてからの、月明かりを頼りにしての稽古だった。
伊之助は木刀を持たされた。まずは形から入るのかと思ったが、黙兵衛はいきなり対峙の姿勢を取ったのだ。正眼にすっと木刀を構えてみせた。
黙兵衛は胸を叩く仕草をし、かかってこい、と手招きするようにした。
伊之助としては打ちかかっていきたかったが、眼前に大きな壁が立ちはだかっているようで、まるで踏みこむことはできなかった。足がかたまってしまっている。
それ以上に、黙兵衛が発する気が伊之助をがんじがらめにしている。
これが殺気というものだろうか。
どうした、来い。
黙兵衛が叱咤の表情を見せる。
伊之助は唾を飲んだ。ここは行くしかない。
どうりゃあ。気合をこめて頭の上から木刀を振りおろした。

よけるのは簡単だっただろうが、黙兵衛はしっかりと受けてくれた。
鍔迫り合いになる。目の前に黙兵衛の顔がある。顔色一つ変えておらず、いかにも余裕があった。
伊之助が押しこもうとした途端、黙兵衛の姿が消え失せた。
伊之助は知らないうちに葦原に転がっていた。あれ、どうしてだ。
すばやく立ちあがり、黙兵衛の姿を捜した。
駆け寄り、木刀を振りおろした。これもあっけなく受けとめられた。
ぐいっと押し返され、伊之助はたたらを踏んだ。必死の思いで踏ん張り直し、打ちかかってゆく。
またも楽々とはね返された。
それが何度も続いた。
四半刻も続けているうちに伊之助は疲れきった。木刀がとても重いものに感じられた。まるで鉛の棒でも手にしているようだ。
どうした。月に照らされた黙兵衛の顔がそういっている。もう終わりか。
くそっ。負けん気に火がついた。
「まだまだ」
伊之助は木刀を振りあげ、突っこんでいった。黙兵衛めがけて振りおろす。
また受けとめられるのだろう、と思っていたが、木刀はあっさり空を切った。

足が払われたようで、伊之助は葦原に倒れこんだ。即座に立ちあがり、黙兵衛を目で捜す。
また打ちかかっていった。だが、またも葦原に突っこまされた。
顔についた葦の切れ端を取り、黙兵衛に向かって突進する。
こういう形のものが何度も繰り返された。
伊之助はふらふらで、まっすぐ立っていられなくなった。汗が目に入りこみ、黙兵衛の姿はほとんど見えなくなっている。
喉になにかつまったかのように息が苦しく、心の臓の鼓動も太鼓でも乱打されているかのように激しいものになっている。
それでも伊之助は気力を振りしぼって、ようやく見えた黙兵衛に向けて、木刀を構えた。
木刀を振りあげようとして、黙兵衛が右手をあげた。
意味がわからず、伊之助はぼうっと見ていた。いつの間にか、体を締めつけているようだった殺気らしいものがなくなっていた。楽になっている。
「おしまいですか」
伊之助はかすれ声でたずねた。
黙兵衛がうなずく。伊之助はうしろにぶっ倒れそうだった。
黙兵衛が歩み寄り、そんな伊之助を支えるようにしてくれた。
渡良瀬川の流れに足を浸け、二人は体を洗った。岸にあがり、勢次が持ってきてくれた新しい着物に着替えると、生まれ変わったような気持ちよさが体を包んだ。

あれだけ厳しい稽古のあとなのに、こんなに爽快なのははじめてだ。いや、つらい稽古のあとだからこそ、こういうふうに感じられるのだろう。

小屋で夕餉をとったのは、五つ近かった。竹皮包みをひらく。

これも昼間のうちに勢次が持ってきてくれたもので、中身は握り飯だ。

塩のきいた飯が甘く感じられ、これまで米の飯がこんなにうまく思えたことはないほど美味だった。たくあんもこりこりと歯応えがよく、大根の旨みが嚙むとあふれだすようで、握り飯に実に合った。

黙兵衛もうまそうに食している。頬がややゆるんで見えるのが、伊之助にはほほえましく思えた。

食事を終えると、黙兵衛はなにかを考えはじめた。

囲炉裏の炎に照らされたその横顔が厳かな感じがして、見つめている伊之助はなんともいえない幸福な気分を味わった。

この瞬間がずっと続けばいいな、とすら思った。

黙兵衛が顔をあげた。

あれ、と伊之助は思った。これまでとなにかちがう。

今までは黙兵衛の顔には薄い膜が張りついていたような感じだった。そのせいで、黙兵衛の気持ちがわかったり、わからなくなったりしていたのだが、その膜がなくなっているのだ。

これはどういうことなのか。

どこか、黙兵衛と気持ちが通じ合っている気がしてならない。

もしや、木刀をまじえ続けてきたせいだろうか。そうかもしれない。

黙兵衛の気持ちを完全に解する日が来るのも、そう遠くはないようだ。

伊之助の胸の壺は、喜びの蜜であふれんばかりになっている。

ついにやったぞ。

収二郎は寝床で身じろぎした。部屋は暗いが、どこからか入りこんでいるかすかな光があるようで、自身の影が壁に映りこんでいる。それが小さく揺れた。

「眠れませんか」

妻のおひさが片肘をついて、体を起こした。物憂げな感じが表情にあらわれている。さっき抱いたばかりの余韻を残している。

「ああ」

収二郎はおひさを抱き寄せた。

「今日、殿に呼ばれた」

「はい」

「うれしいことがあった」

「そう思っていました」

「どうして」

「帰宅されてから、とてもうきうきされているように見えたものですから」
おひさとしては、夕餉の最中にでもききたかったのだろう。しかし、収二郎が話すまでは、と我慢していたのだ。
「そうか、そんなに顔に出ていたか。うれしいことというのはな――」
おひさには話してしまいたかった。
「とうとう殿に仕事をまかされたのだ。殿が老中になるための仕事だ」
腕のなかでおひさが目をみはる。
「そのような大事なお仕事ですか」
「そうだ。俺はずっと説き続けていた。それがついに認められたのだ」
夕刻、収二郎は利直に呼ばれ、登城した。
収二郎が目の前に平伏するやいなや、利直は人払いを命じた。
「近う寄れ」
一礼して収二郎はにじり寄った。そのときにはどういうことか、収二郎には見当がついていた。いや、すでに確信があった。利直は決断したのだ。
「例の一件、まだ大丈夫か」
「例の一件、といわれますと？」
「とぼけるでない、収二郎。余を老中につけるための策よ」
収二郎はにっこりと笑った。

「むろんです。殿のお許しが出れば、いつでも進められます」
「そうか」
利直はさらに声を落とした。
「余はな、そちにいわれたことの意味を考えていた。ずっとだ。余はあの久世豊広に負けとうない。――収二郎、本当にあの男を剣術指南役ともども殺せるのか」
「確実に」
「もし万が一しくじった際、余にはなにも及ばんのだな」
「この井上収二郎、お家に咎が及ぶような真似は決していたしませぬ」
「そうか」
利直が脇息に半身を預け、目を閉じる。考えている。目をひらいた。
「収二郎、まかせた。やれ」
まかせた、という言葉が寝床に横になっている今でも、はっきり頭に残っている。
ことが成就すれば、競争相手が消えた利直はまちがいなく老中になるだろう。そうなれば、最大の功労者として収二郎は利直にさらに引き立てられることになる。
執政入りだって夢ではないだろう。まずは中老あたりになり、いずれ家老として政に辣腕を振るえるにちがいない。
その日が間近に迫ったようで、収二郎は思わずにんまりとした。
「どうされたのです」

おひさが不思議そうにきく。
「思いだし笑いだ」
暗闇のなか、おひさは笑わない。
「どうした。なぜそのように心配そうにする」
おひさが胸に顔をうずめてきた。
「心配です。この幸せな暮らしが壊れてしまうのでは、と思えて……」
「案ずるな」
収二郎はおひさに乗りかかるようにした。着物の前をはだけると、白い乳房が見えた。
「もっと幸せにしてやる」

三

古河城下から鐘の音が響いてきた。九つを告げる鐘だ。
伊之助は黙兵衛の合図で、舟を岸に向けた。櫓づかいは昨日にくらべても段ちがいにさまになってきており、すんなりと岸に着けることができた。
小屋で昼食にした。今日も勢次が持ってきてくれた握り飯だ。
伊之助と黙兵衛はすぐに食べ終えた。腹がこなれるまでの四半刻だけ、黙兵衛は休息を与えてくれる。伊之助にとってほっとするひとときだ。

伊之助は水を飲んで、茶の代わりにした。
竹筒の水を飲みほし、しばし呆けたようにのんびりしていると、小屋の壁にもたれて目を閉じている風情だった黙兵衛が、ぴくりと顔をあげた。
ああ、もう休みは終わりか。伊之助は黙兵衛にうながされる前に、立ちあがろうとした。
黙兵衛がその前に立ちあがっていた。扉をあけ、外に出る。
「どうしたんですかい」
伊之助は黙兵衛のあとに続いて、葦原に足を踏みだした。
いつしか風が強くなっていた。小屋がぎしぎし鳴っている。葦が次々になぎ倒されるようになるが、風がすぎ去った瞬間、あっという間に立ち直る。川面も、魚の群れが騒いでいるかのように波立ってきていた。
誰かが土手をおりて、こちらに向かってきていた。あの男の気配を黙兵衛は感じたのだ。
黙兵衛は走ってくる者を見つめている。
伊之助も眺めた。誰だろう。勢次が夕餉を持ってきてくれたのかと考えたが、それにはまだかなりはやい。
近づくにつれ、見たことのない顔であるのがはっきりした。
この小屋を目指しているということは、ここに誰がいるのか、わかっているのだろう。
男は伊之助と黙兵衛が小屋の前に出ているのを認め、やや走りをゆるめた。目の前までやってきて、立ちどまる。

若い男だ。といっても、伊之助より十は上だろう。鼻が高く、眉がすっとあがった精悍な顔つきをしている。

かなり駆けてきたようで、汗びっしょりだ。ただし、息づかいはさほど乱れていない。よほどの鍛練を積んでいる。

黙兵衛の前に立ち、一礼する。

黙兵衛が小さくうなずきを返したのに、伊之助は驚いた。お互い顔見知りなのだ。

「お知らせするようにいわれて、まいりました」

男が黙兵衛にいった。

「あさっての宵、船遊びが行われるとのことです」

えっ、と伊之助はびっくりした。本当なのか。それにしても、どうしてこの男はそんなことを知っているのか。

そう考えたら、目の前の男が誰か知れた。関宿で働く井上収二郎の配下だろう。

「確かにお伝えしました。では、これにて」

頭を深く下げた男が身をひるがえし、再び駆けだしてゆく。その姿はあっという間に土手の向こう側に消えていった。

黙兵衛がふっと息をつき、伊之助を見つめた。

「音無の旦那、とうとうですねえ。でも、あっしに船頭がつとまりますかねえ」

大丈夫だ、案ずるな。伊之助の頭にはそんな言葉が明瞭に響いてきた。

だが、あさって、というのはあまりに急すぎる。とてもではないが、ときがなさすぎる気がする。

そんなことを思ったら、心の臓がどきどきしてきた。胸が痛い。

逃げだしたくなった。しかし、そんなことは許されるものではない。黙兵衛を落胆させるわけにはいかない。

ここで踏んばらずにどうする。

伊之助は自らを叱咤した。ここで逃げることを覚えたら、これから先、なにかあるたびに逃げる男になっちまうぞ。

その日も舟の鍛練は続いた。

午後の鍛練だけでも伊之助の櫓の漕ぎはさらに力強くなり、波立つ流れを風に逆らいつつ舟を進めるのにもさして苦労しなくなった。

一皮むけたのを、伊之助自身感じている。

今日も昨日と同様、鮮やかな夕焼けが西の空を染めた。夜が完全にやってくる前に、今日の鍛練は終わりを告げた。

さすがに伊之助はくたびれ果てた。それを察してか、黙兵衛は剣の稽古をやろうとはしなかった。

夜のあいだも風は鳴っていたが、そのことは苦にならず、伊之助は眠りに落ちた。

翌朝、伊之助が目覚めたときには風はおさまっていた。流れはいつもの静けさを取り戻し、

行きかう舟も穏やかな水面に安心したかのようにゆったりと進んでいる。

勢次がやってきた。うしろに別の男が続いている。

父親の郡兵衛だった。家を離れてまだ六日ほどにしかならないのに、ずいぶんとなつかしい気持ちに伊之助は包まれた。

郡兵衛も同じ気持ちのようで、どこか照れくさそうな笑みを浮かべている。

「朝餉と昼餉を持ってきたぞ。着替えもだ」

郡兵衛が、風呂敷包みを背負っている勢次に小屋に入れるように命じた。へい、と勢次が風呂敷包みをおろす。

郡兵衛は伊之助を見て、目をみはった。

「ずいぶんと引き締まったな。顔も変わった。男らしくなっている。まるで別人だぞ。音無の旦那の魂が乗り移ったみたいだな」

郡兵衛はせがれの変わりように、好々爺のようににこにこした。

「どうした、伊之助。顔がかたいな。わしに会えたのがうれしくないのか」

「うれしいよ」

伊之助は父親に、もう明日に迫ったことをいうべきか迷った。黙兵衛を見たが、どちらでもいい、といっている気がした。

伊之助は心配はかけたくなく、黙っておきたかったが、伝えないわけにもいかない。

伊之助は父親に教えた。

郡兵衛はかなり驚いたようだが、そうか、と一言だけいった。心を必死に落ち着けているように見えた。

「舟はうまくなったのか」

平静な声できいてきた。

「だいぶね」

郡兵衛の瞳には案ずる色が出ている。せがれをできれば行かせたくないようにも見える。しかしもう一つあらわれている色は、このことが伊之助をきっと大きくしてくれるのを解している顔だ。

一家を仕切る親分として、後者の思いのほうがまさったようだ。

「わしにできることがあれば、なんでもいえ。必ず望み通りにしてやる」

「ありがとう。必ずそうするよ」

郡兵衛が伊之助の肩を叩き、それから黙兵衛に視線を移した。じっと瞳をのぞきこむようにしてから、ではこれで、ときびすを返した。勢次を連れて、早足で帰ってゆく。

とっつあん、と心のなかで伊之助は呼びかけた。見ていてくれ。俺はきっと男になる。

その夜ははやめに就寝した。

伊之助は、郡兵衛の背中が忘れられない。どこか丸まっていた。前はあんなことはなかった。大きくて広かった。

郡兵衛は歳を取ってきている。それがとてつもなく寂しく思えた。

それでも、しばらく眠っていただろうか。伊之助ははっとして目を覚ました。今、何刻だろう。感じとしては八つくらいでは、と思えるが、もしかしたらまだ九つにもなっていないかもしれない。

横で黙兵衛が身じろぎした。そっと布団から起きあがった。

扉がひらかれ、伊之助には外が見えた。今夜も月が出ているようで、暗い光が小屋のなかに射しこんできた。

一瞬、光がさえぎられた。黙兵衛が外に出ていったのだ。

どうしたのだろう。目をこすりつつ伊之助も起きあがり、黙兵衛のあとに続いた。

黙兵衛は川岸ぎりぎりに立っていた。風に吹かれながら関宿のほうを眺めている。強風がばたばたと裾をめくりあげていた。

「どうかされたんですかい」

伊之助はうしろ姿に声をかけた。

一際強い川風が吹き渡ってゆく。懐に匕首のように入りこんできたその涼しさに、伊之助はぞくりとした。

いや、ぞくりとしたのは、黙兵衛から発されている殺気のせいかもしれなかった。

黙兵衛が外に出てきたのは、体の熱を冷ますためだろう。どうにも寝つけないにちがいない。

黙兵衛が振り返った。月明かりに照らされて、厳しい顔をしている。

最初は自分を見ているのか、と伊之助は思ったが、黙兵衛は土手のほうを見ていた。

伊之助も振り仰いだが、土の盛りあがりが延々と続いているのが目に映っただけだ。

黙兵衛が小屋に戻る。伊之助も続いた。

布団に横たわると、すぐに眠気がやってきた。

四

よし、今ならいいぞ。

土手の下の道におり、博造は浪人の視線から姿を隠した。

見られたとは思わない。月夜といっても、十分すぎるほど距離を置いた。見つめていたことをさとられたはずがない。

博造は必死に道を駆けた。

馬を用意しておけばよかった、と思ったが、走りもかなりのものだ。

急げっ。自らにいいきかせて、尻に鞭打つような思いでさらに足をはやめる。

三里の道を半刻かからずに走った。

目付頭の平崎館左衛門の屋敷の前に駆けこむ。平崎屋敷の門のくぐり戸の右手に向かって、声を張りあげる。

博造はすぐさまなかに入れてもらった。玄関脇の座敷で、館左衛門を待つ。

寝巻きではなく、しっかりと着替えて館左衛門がやってきた。
「あの浪人か」
「今、小屋に二人でいます。急襲するなら今夜が最もよろしいかと。どうやら眠れない様子でしたが、明日に備え、二人とも小屋に戻りました。今頃はぐっすりと寝入っているはずです」
「そうか」
瞳をきらめかせた館左衛門が立ちあがる。
「博造、横山佐十郎のところへまいるぞ」

「集まったか」
佐十郎は声を発した。
「はい、全員そろいました」
一人が答える。
その者のうしろにいるのは九名。この十名はこの日に備え、ここ豊広の別邸に三日間泊まりこんでいた。いずれも手練ぞろいだ。
これに俺が加われば、いくらあの浪人といえどもよもや討ち漏らすことはあるまい。
十名の顔を順繰りに見まわして、佐十郎は確信した。
一刻を争うために今すぐにでもこの別邸を出たかったが、その前に豊広に報告をしなけれ

ばならない。
佐十郎は豊広に取り次いでくれるように、宿直の小姓に依頼した。
少し待たされた。
対面の間に、寝巻き姿の豊広がやってきた。
「どうした」
少し酒が香った。
佐十郎は伝えた。豊広の顔が朝日でも受けたように輝いた。
「まことか。よし佐十郎、討ち漏らすな」
「おまかせください」
力強くいって、佐十郎は豊広の前を辞した。
別邸の門を出た。一瞬だったが、佐十郎はどこからか視線を感じた。
一瞬で消えたが、今のはなんだ、と考えこんだ。
「どうされました」
侍の一人がきいてきた。
「いや、なんでもない。行こう」
利根川の河原に舟が支度されている。古河に行くなら馬で行くほうがはやいだろうが、十一騎が馬蹄を轟かせて古河の町に入れるものではない。舟なら音もなく行ける。
江戸で見るような猪牙舟が三艘だ。この日のために練達の船頭を三名、用意した。あわて

て船頭を育てあげるようなあの浪人の方法は、迂遠でしかない。

佐十郎を入れて十一人の侍が乗りこみ、最後に平崎館左衛門の手下である博造という男が佐十郎と同じ舟に乗った。

次々に舟が岸を離れる。平崎館左衛門が見送っている。

心配そうな目だ。安心させるために、佐十郎は笑みをつくって右手をあげた。

橙がかったやや暗めの月が出ている。それが波のない水面に鮮やかに映っていた。船が進むたびに揺れて形を崩すが、またすぐに寄り集まるようにもとの形に戻る。

佐十郎の舟が先頭だ。風もなく鏡のように凪いでいる水面を、ぶら下げられた提灯の灯が淡く照らしだす。ときおり驚いたようにはねるのは鯉だろうか。

それにしても静かだった。舟が波を切る音、櫓のきしむ音。それくらいしかきこえない。

その静けさが逆に胸を打つようで、舳にいる佐十郎はどきどきしてきた。

動悸を静めるために刀を抜き、異常がないか確かめた。この日のために何度もしてきたことだが、やってやりすぎということは決してない。

それを見たほかの者も、目釘をあらためはじめた。

「どのくらいかかる」

佐十郎は艫の船頭に声をかけた。これも何度もきいているから知っている。

「一刻ほどです」

船頭は緊張した声で答えた。

三人の船頭になにをするかは教えていないが、鉢巻に襷がけの物々しい格好をした侍が乗りこんでいるのだ。

しかも全員が殺気立っている。人を斬りに行く、くらいは誰だって見当がつこう。

佐十郎の気持ちとしてはもっとはやく着きたいが、こればかりは無理をいっても仕方がない。

不意に櫓を漕ぐ音がはやまった。舟の速度が明らかにあがった。まるで佐十郎の気持ちが船頭に伝わったかのようだ。

いや、確かに伝わったのだろう。佐十郎はなにげなく目をやったつもりだったが、船頭にはそれが射抜くような目に見えたのではなかろうか。

佐十郎は手をあげ、船頭に速度を抑えるように命じた。無理をして、逆にときがかかるようなことはあってほしくない。

夜はまだたっぷりと残っている。ここで焦る必要はなかった。小屋の二人は今頃、ぐっすり眠っているにちがいないのだから。

眠っているのなら、と佐十郎は思った。とらえられるのではないか。

そんな誘惑にちらりと駆られたが、いや、殺したほうがよい、と考え直した。そのほうがまちがいない。

侍の一人が首桶を担いでいる。あれにきっとやつの首をしまい入れてやる。

ふと、行く手の左手の河原が明るくなっているのに気づいた。大きめの火でも焚かれてい

るかのように、空がぼんやりと赤い。
「あれはなんだ」
佐十郎はつぶやいた。
「火事でしょうか」
一人がいう。
「かもしれんな」
同意した途端、かんかん、という半鐘らしい音が響いてきた。
「やっぱり火事のようだな」
「あれは、栗橋の宿あたりではないでしょうか」
別の侍が口にした。
「そのようですねえ」
やや息を切らした感じで船頭がいった。
「火事か」
佐十郎はぽつりとつぶやいた。
まだ火は燃えているが、どうしてか半鐘はきこえなくなっている。
そのことになんとなくいやな予感がして、佐十郎はじっと目を凝らした。
そうこうしているうちに、火は水でもかけられたようにふっと見えなくなった。
「消えましたね」

「ああ」
三艘の舟が栗橋の宿の前を通り、方向を北に変えて渡良瀬川をさかのぼろうとしたときには、どこで燃えていたのかすらもわからなかった。
ただ雲にかすんでいる月が暗く沈んだ川岸を照らしているだけで、あたりはどこまで行っても無人だった。

五

最初は気がつかなかった。
だが、また黙兵衛が小屋を出ていったのが伊之助にはわかった。
どうしたのだろう、とさすがにいぶかるしかなかった。
いったん川岸から引きあげてから、これまで三度も黙兵衛は小屋を出ていっている。
そのたびに渡良瀬川の下流のほうを眺めていた。見つめているのは、渡良瀬川が利根川に合流するほうだ。ちょうど栗橋宿となるあたりだろう。
いったいなにが気になっているのか。きいてみたが、黙兵衛は表情を見せてくれない。
伊之助は昼間の疲れがようやく出てきたのか、眠くてたまらず、黙兵衛のあとを追おうとは思わなかった。明日に備えて、今はとにかく眠りたかった。
どのくらい寝入っていたのか、かんかん、というかすかな音をきいた気がした。どうやら

半鐘のようだ、と伊之助は夢のなかでなんとなく思った。
そのとき、肩を揺さぶられていることに気づいた。
伊之助は目を覚ました。
目の前に黙兵衛の顔。闇にぼんやりと浮かぶように見えている。
「どうかしたんですかい」
起きろ。
「どうしてです」
はやくしろ。
黙兵衛の顔に切迫したものを感じて、伊之助は布団からはね起きた。黙兵衛はすでに両刀を帯びている。
伊之助も身支度をした。
行くぞ。黙兵衛が手を振る。
「どこへ行くんです」
黙兵衛は歩きながら舟を指した。
「舟でどこへ」
頭に届いたのは、関宿、という言葉だった。
「えっ、今からですかい」
黙兵衛はさっさと舟に乗りこんだ。わけがわからないままに伊之助も続く。

あっ、と目をみはった。いつの間にか舟底に首桶らしい物が置かれていた。
襲撃は今日だったか、と伊之助は思った。いや、紛れもなく明日の晩のはずだ。
はやくだせ。
「わかりました」
伊之助は棹を持ちあげ、川岸を突いた。ぐん、という感じで舟が動く。
さらに水底を突いた。舟はゆっくりと進んでゆく。
おや。伊之助は目を凝らした。行く手で火が燃えているようだ。
まちがいなかった。夜が少しだけ明るくなっている。
さっききこえた半鐘は勘ちがいではなかったのだ。
「あれは、栗橋の宿あたりですねえ」
伊之助は櫓をつかって舟を流れに乗せた。
「火事ですかね。その割には火が小さいようですけど」
それにもう半鐘もきこえなくなっていた。
「ぼやですんだみたいですね」
舟は渡良瀬川のまんなかを進みだした。
黙兵衛がまた手を振った。脇へ寄れ、という合図だ。
どうしてそんなことをする必要があるのか。さっぱりわからなかったが、伊之助は櫓を動かして、舟を右手の葦原近くまで導いた。

黙兵衛に船をとめるようにいわれ、伊之助は櫓を握る腕から力を抜いた。
黙兵衛はあたりの様子をうかがっている。
どういうことなのか。どうして今から関宿へ行くのか。それに、黙兵衛のこの警戒ぶりはなんなのか。
よし、進め。
伊之助はうなずき、櫓を握る腕に再び力をこめた。
舟は、利根川に合流するところまでやってきた。
その手前でまた船をとめるように命じられた。伊之助が櫓を漕ぐ手を休めると、黙兵衛がさらに指示してきた。
伊之助は葦が多いところに舟を突っこみ、ほとんど葦に隠れるようにした。
葦のあいだから、黙兵衛は利根川の方向にじっと視線を注いでいる。ぴくりと顔を動かし、遠くを見る。
やがて伊之助の目に、提灯らしい明かりが飛びこんできた。あれは、と目を凝らした。
利根川をさかのぼってくる舟のようだ。提灯は一つではない。三つだ。舟は三艘ということか。
舟の提灯がひどく揺れているということは、かなりの速度をだしているということだろう。
ぎーぎー、という櫓の音が水面を滑るように低く伝わってくる。
動くな、というように黙兵衛が手のひらを向けてきた。伊之助は息もとめるようにした。

三艘の舟は渡良瀬川に入り、流れをのぼってゆく。伊之助たちがいるのとは反対側の、右岸近くを進んでいる。距離はおよそ半町。
三艘とも、侍らしい者がたくさん乗っている。月明かりに照らされた侍たちは、いずれも鉢巻に襷がけをしていた。
先頭の舟の舳に乗っている者は、流れに身を乗りだすようにしていた。
三艘の舟に乗った者たちはこちらには気づかず、ゆっくりと遠ざかってゆく。
なんだ、あれは。
伊之助は呆然とした。明らかにこれから戦いに行く格好をした者たちだ。
戦いでなくても、誰かを殺しに行くのはまちがいない。
いったい誰を。
そう思った瞬間、答えは出ていた。
俺たちだ。いや、黙兵衛を殺しに行くのだ。
となると、舟に乗っていたのは久世家の侍か。先頭の舟にいたのは、横山佐十郎ではないのか。
あの闘志満々の姿は、横山佐十郎しか考えられない。
黙兵衛が小屋から舟をださせたのは、横山たちが襲いかかってくることを知っていたからか。
どうして黙兵衛は知り得たのか。

あの火と半鐘だ。あれが合図になっていたのだろう。
誰が知らせたのか。収二郎の手の者に決まっている。
関宿にいる収二郎の手の者は、横山佐十郎を見張っていたのだろう。
佐十郎が関宿を出たことを知らせるために火をおこし、半鐘を鳴らしたにちがいない。
関宿からでは距離があって、いくら半鐘を鳴らしてもきこえない怖れがあるし、火を燃やしたところでまちがいなく見えない。
だから手の者は、わざわざ渡良瀬川が利根川に合流するそばの栗橋宿まで出てきたのだろう。
あれはきっと、河原にある川漁師の小屋でも燃やしたのではないか。
よし、行くぞ。
黙兵衛が手を振った。伊之助は棹を水底に突き刺し、舟を動かした。
すい、と進む。伊之助はすぐに櫓に替えた。もう舟を動かすことに関して、まったく不安はない。
腕を動かしながら、伊之助は高揚したものに体と心を包まれていた。櫓がこれまで感じたことがないくらい軽い。
勝ったのではないか。いや、まちがいなく勝った。
伊之助はすでに確信していた。黙兵衛は横山佐十郎の裏をものの見事に取ったのだ。
今は黙兵衛の狙いが完璧にわかっていた。黙兵衛は、佐十郎の裏だけを取ることをひたす

ら狙っていたのだ。
あの小屋に籠もったのも、博造に佐十郎へ注進させるためだろう。そして、その狙い通り、佐十郎は豊広のそばを離れた。
すごい。伊之助は体が震えた。この人についてゆけば、きっとなんでもできる。
「わかりましたよ、音無の旦那」
興奮を隠さず呼びかけた。
「今夜、襲うんですね」
川風を受けて黙兵衛が振り返る。
襲うのは屋形船であるはずがない。となると、どこか。
すんなり答えは出た。久世家の別邸だ。
豊広気に入りの側室がそこにはいる。ほぼ毎晩、豊広がその側室のもとに行っているというのもきいている。
横山佐十郎がいなくとも、別邸には大勢の侍がつめているはずだ。その者たちを打ち破って豊広の首を打てるのか。
やれる。伊之助にはわかっていた。音無黙兵衛なら、まちがいなく討ち果たせる。
利根川に出た。さすがに坂東太郎と呼ばれる暴れ川だけのことはあり、雄大だ。
ほとんど流れは感じられないが、それでもくだりだけにさっきのぼっていった三艘の舟よりははるかに楽だろう。

いや、今の伊之助にはのぼりもくだりも関係なかった。利根川を一気にくだった。舟は風を切って進んでいる。信じられないくらいのはやさだった。

櫓に力を入れずとも舟は進む。誰かちがう者が櫓を握っているかのようだ。

黙兵衛がいっていた、体と櫓が一体になるというのがはじめてわかった。

逆川が利根川に流れこんでいる前を通りすぎる。もともとここは利根川から逆川に水が流れていたそうだが、それだと大水が出たとき、江戸のほうまで水に浸かりかねない、という怖れがあるために大普請が行われ、逆川の流れが利根川のほうに向くようにしたときいている。

逆川の名もこのあたりから出ているのかもしれないが、伊之助はそれ以上詳しいことは知らなかった。

本当なら別邸は関宿城の南にあるから、逆川に入っていったほうが都合がいいが、逆川を行くとなると、途中、水関所がある。

この刻限では夜舟は少ないとはいえ、宿直の者が流れに厳しい視線を投げているだろうことは容易に察しがつく。

境河岸からの渡し舟が着く河岸から、東へ一町ほどのところに舟をとめた。

ここも葦が一杯に繁っている。舟はまわりからは見えないだろう。

黙兵衛が葦をかきわけて舟を飛びおりる。伊之助を振り返った。

ここにいろ、といっている。

「一緒に行かせてください」

伊之助は頼みこんだ。

黙兵衛が顔をしかめ、仕方ないな、という表情に変えた。ついてこい、というように手を振った。黙兵衛が姿勢を低くして走りだす。方向としては西南だ。

伊之助はほっとしてあとを追った。

横山佐十郎とすれば、と駆けながら伊之助は思った。自分が留守にするあいだ、豊広には城にいてもらいたかったのだろう。

しかし、豊広は気に入りの側室とともにときをすごしたくてならないのだ。もっというならば、抱きたくてならないのだろう。

月はいつしかあらわれた厚い雲に隠されて、ほとんど見えない。ときおり雲の合間から透けて見えることがある程度だ。

闇に沈んだ関宿城下を避けるように、伊之助と黙兵衛は走り続けた。

途中、いくつかの村があった。どれも小さな村で、家々がかたまるようにしている村もあったし、点在している村もあった。どの村も朝に備えて、深い眠りのなかにいるのは共通していた。

どこを走ってもほとんど平坦だが、やや道がのぼりはじめた。それに加え、伊之助の鼻は水のにおいをとらえはじめていた。

おそらく逆川が近くなっているのでは、と思えた。豊広の別邸は逆川近くにある。

黙兵衛がふと道をそれ、林に入っていった。
林を抜け、ほんの半町ほど進むと、小高い場所に竹藪があった。黙兵衛は躊躇することなく、その竹藪に足を踏み入れた。
竹藪を出ると、すぐそばに細い道をはさんで、左右に長くのびる塀が建っていた。
「別邸ですか」
黙兵衛はうなずきもしなかったが、どうやら着いたのはまちがいない。裏手だった。
一度この別邸にやってきたときも裏にまわったが、林から竹藪、という人目につくことなくこの場所に出られることに伊之助は気がつかなかった。というより、まったく気がまわらなかった。
この建物をじっくり眺めたとき、まわりの風景から黙兵衛はそうと見極めたのだろう。
あたりがふと明るくなった。見あげると、月が雲間から姿を見せたところだった。
だがすぐに別の雲に隠れ、地上に光は届かなくなった。
足を踏みだした黙兵衛は道の両側に誰もいないことを確かめてから、背伸びをするようにして塀に手をかけた。
本当なら一度くらい忍びこんで、下調べをしたいところだったのだろう。しかし一発勝負でも、黙兵衛には久世豊広を討つ自信があるのだ。
黙兵衛は、伊之助が見守るうちに猿のように身軽に塀の上にのぼってしまった。
黙兵衛が手をのばしている。なかまで連れていってもらえるのか。

意外だった。伊之助としてはここまでで十分と考えていた。ここでなかの様子をうかがいつつ、黙兵衛の帰りを待つ。そのつもりでいたが、ここまで来た以上、そういうわけにはいかないようだ。
俺は役に立てるのか。足手まといにならないのか。
そうならないと考えているから、黙兵衛は手を差しだしているのだろう。
うれしかった。むしろ頼りにされているのではないか。信用されていることに、伊之助は涙が出そうだった。
がっちりと手を握った。強い力でぐいと引きあげられる。
気づいたら、伊之助は塀の上にいた。そこからうっすらと別邸内の景色が見渡せた。
静かだ。吹き渡る風だけが、深い木々をかすかに揺らしている。枝が触れ合ってかさかさと音を立てる。
黙兵衛が塀を蹴った。音もなく着地する。走りだした。
伊之助もならったが、うまくいかず、転んだ。すぐに立ちあがって黙兵衛に続く。
黙兵衛は、別邸のつくりを知っているのだろうか。
知っているのだろう。この別邸のものは無理だろうが、収二郎に土井家の別邸の図面を見せてもらっているくらいはしているかもしれない。
別邸など、どこも似たようなつくりだろう。黙兵衛に宮仕えの経験があるのかわからなかったが、もしあるとするなら、この別邸がどういうつくりなのか、図面がなくとも熟知して

いるのはまちがいなさそうだった。

六

「あれか」

土手の上に片膝をついて佐十郎は指さした。

「そうです」

博造がうなずく。

丈の高い葦に隠されるように、一軒の小屋が建っていた。薄衣を通したような月光に照らされて、黒い屋根が影となって見えている。

それなりにうまく隠しているのだろうが、見え見えの位置にあるようにも思える。

佐十郎は違和感を覚えた。鬼神のような剣をつかうあの浪人にはにつかわしくない。

しかしここまで来て、襲わないわけにはいかない。

なかにやつはいるのか。

いるはずだ。やつは明日に備えて、眠っているはずだからだ。

佐十郎はうしろを振り返った。十名の侍たちはいずれも緊張している。誰もがじっとりと手のひらに汗をかいているだろう。

「行くぞ」

佐十郎は声をかけ、立ちあがった。

風がわずかに吹きすぎてゆく。どこかで蛙の声がしている。佐十郎たちが近づいてゆくと、驚いたように黙りこんだ。

刀を引き抜き、小屋の三間ほどまで近寄った。他の者も佐十郎にならう。

葦原のなかで片膝をついて、佐十郎は小屋のなかの気配を嗅いだ。

なにも感じられない。

佐十郎は首をひねった。

どういうことだ。あの浪人の気配は仕方ないとしても、もう一人、浪人にべったりの伊之助の気配を感じ取れないというのはなぜなのか。

もしやいないのか。いや、そんなことはあるまい。

だが、べたつくような汗が背筋に浮いた。

もしいないとしたら、どういうことになるのか。あの浪人はどこに行ったのか。

まさか。

いやな予感が脳裏に描きだされた。佐十郎は足音もあらわに扉の前に走り寄り、扉を蹴破った。

やはり。佐十郎は呆然と立ち尽くした。

小屋はもぬけの殻だった。

やられた。佐十郎はさとった。罠だ。

くそっ、俺としたことがこんな単純な手を見破れぬとは。
「仕掛けたつもりが仕掛けられていたか」
佐十郎は唇を噛んだ。
地団駄を踏みたい思いだった。だが、そんなことをしているいとまはない。
急ぎ別邸に戻らなければならない。しかし間に合うか。間に合わせるしかない。
「舟をだせ」
佐十郎は叫んだ。
「戻るぞ。急げ」
佐十郎は舟に飛び乗った。舟は大きく揺れ、船頭が必死に揺れを静めた。
他の者が乗りこんでこようとするので佐十郎は、うしろに乗れ、と命じた。ここは船足をはやめなければならない。何人も乗っては関宿に着くのは確実におそくなる。
「だせ。関宿だ」
佐十郎は船頭に命じた。はい、と船頭が棹で川岸を突く。舟は動きだしたが、そのときあわてた船頭が棹を取り落とした。
「なにをしておる」
佐十郎は怒鳴りつけた。
「申しわけございません」
船頭が必死の形相で、棹を流れから拾いあげた。

「急げっ」
舟は流れに乗った。
佐十郎は往きと同じように舳に乗った。どうして鳥のように飛べないのか、人というものがうらめしかった。
叫びたい思いが腹の皮を破ろうとしているが、佐十郎は我慢し、ひたすらじっと流れの先を見つめているしかなかった。

広いな、と伊之助は思った。どこに寝所があるのか。
黙兵衛は躊躇することなく足を進めている。どこに豊広がいるか知っているのだ。
しかし静かだ。人が立てる音はなにもきこえない。耳に入るのは、風のささやきに応える木々の枝が擦れ合う音くらいだ。
心の臓の鼓動は静まらない。むしろ前より大きくなっている。伊之助は次の瞬間にも誰何(すいか)の声がかかるのでは、とはらはらし通しだった。
黙兵衛がつと足をとめた。黙兵衛の肩越しに大きな建物が見える。あれが主殿だろう。
建物に沿って南に歩いた黙兵衛が再び足をとめた。少し考えている。
さらに十間ほど進んだあと、不意に手近の濡縁にあがり、なかの気配をうかがう仕草をした。障子が閉じられていて、部屋に明かりはついていない。
黙兵衛は無造作に障子をあけ、なかに入ったが、すぐに出てきた。

その後、黙兵衛は同じようなことを何度か繰り返したが、いずれも徒労に終わった。

これだけ部屋を執拗に調べているということは、このあたりに豊広はいるという確信があるからだろう。

だが、その割にこの静けさはどうだろう。むろん、もう深夜といっていい刻限だから、屋敷の者すべてが寝入っているということは考えられたが、人けがまったく感じられないというのはどう考えてもおかしい。宿直の者の気配さえまったくしてこないのだ。

黙兵衛は足を進ませ、渡り廊下があるところに来た。廊下に足を乗せ、右手へ向かう。新たな建物だ。ここはどこか。伊之助にはさっぱりわからないが、もしや豊広気に入りの側室が住む場所では、という気がした。

だが、こちらにもまったく人がおらず、まるで人の気配はしない。

こちらの建物はこぢんまりとしていた。

黙兵衛に続いて伊之助もなかに入ってみた。

黙兵衛が次々に襖をひらいてゆく。

全部で十近くの部屋があった。黙兵衛はすべての部屋を見てまわったが、人は一人もいなかった。

豊広はどこに行ったんだ。伊之助の胸は痛くなった。

もしや、横山佐十郎がそばを離れたということで、城に戻ったのではないだろうか。

「旦那」

伊之助は、我慢できず背中にささやきかけた。いつあの横山佐十郎が戻ってくるか、気が気ではない。焦りの汗が全身に噴きだしている。

黙兵衛が振り向く。厳しい顔をしている。

「すみません。でも旦那、ここに人はいないんじゃないですかね」

黙兵衛が庭に出て、立ちどまる。どういうことか、考えている。

そのときだった。不意に夜気を裂くように、しゅるしゅる、という音がかすかにきこえてきた。

どん、と腹に響くような音が続く。はっとしてそちらを見ると、夜空に大輪の花がひらいたところだった。

すぐ近くだ。まともに花火を見あげる格好になった。

黙兵衛が走りだした。

「旦那、どこへ行くんです」

伊之助はあわてて追った。

黙兵衛は入ってきた裏ではなく、別邸の表側に向かっている。

石畳の先に門が見えてきた。あいてはいないが、門番らしい者の姿もない。

黙兵衛は門の脇についているくぐり戸をぐいと引いて、外に出た。

伊之助は続いて戸をくぐり、すぐに閉めた。それを合図にしたかのように、また花火があがった。

黙兵衛は道を西に向かって駆けていた。花火の方向を目指している。
そういうことか、と伊之助はようやくさとった。あの花火は豊広があげているのだ。
そういえば、船遊びのとき、花火をあげることもある、ときいたことがある。
豊広は船だ。こんな夜中に船遊びをしているのだ。
伊之助と黙兵衛は逆川の河原に出た。また花火があがり、夜空を明々と染める。
そのおかげでどこに屋形船がいるか、よく見えた。
逆川の流れのちょうどまんなかあたりだ。ここからだと距離は半町ほどか。
酔っ払ったような高い声や女の嬌声、甘え声が風に乗ってきこえてきた。この前の船遊びのときと同じだ。
あのなかに豊広はいる。それは確実だろう。しかし、舟は手近にない。今から舟を置いた場所に戻るのか。
だが、そんなことをしていたら確実に横山佐十郎が戻ってくるはずだ。
「どうします」
伊之助がきいた途端、黙兵衛がだっと走りだした。ざばざばと流れに足を踏み入れ、腰の深さになったところで泳ぎだした。
えっ。伊之助は驚愕した。泳いであの船まで行こうというのか。
だが、それしか手立てがないのは事実だ。
黙兵衛の背中にくくりつけられた首桶が浮きのように見えている。それがどんどん遠くな

ってゆく。
どうする。伊之助は迷った。
ままよ。伊之助も流れに駆けこんだ。
しかし着物を着たままというのは、ひどく泳ぎにくい。溺れそうな心持ちになってきた。
黙兵衛の姿は見えない。どこにいるのか。
必死に手足を動かしているうち、伊之助は疲れてきた。舟の鍛錬はさんざんしたが、泳ぎはまったくしなかった。
屋形船はまったく近づいてこない。むしろ遠ざかっている。
ああ、音無の旦那のいう通り、舟のそばでじっとしていればよかった。そうすれば、こんなところで溺れ死にすることはなかった。
ふっと意識が途切れ、伊之助は水に顔を突っこんだ。たゆたうような感じが心地よい。
川の奥底の流れに、伊之助は体を引っぱられたような気がした。体が沈みはじめる。
ああ、死ぬのか。
いきなり強い力が働き、ぐいと肩のあたりを持ちあげられた。続いて顔があげられる。
水が顔を滑り落ちてゆく。視線の先にぼんやりとした丸い物が見えた。月だ。
どうしたのか。と思ったら、間近で荒い息づかいがきこえた。
なにげなく見ると、黙兵衛の顔があった。しっかりしろ、といわれていた。
「ありがとうございます」

口に水が入ってきてうまくいえず、咳きこんだが、伊之助は我に返り、再び泳ぎはじめた。むろん疲れが消えたわけではなく、さらには着物が体に絡んでくるせいで、黙兵衛の助けを借りずに泳ぐことは無理だった。

黙兵衛は力強く伊之助を導いてくれた。気がつくと、屋形船の黒々とした巨体が目の前にあった。

位置としては、艫の近くに当たるようだ。

これからどうするんだろう、と伊之助はぼんやり思った。

船底につながる舟板が見えているだけで、上から縄が垂れているということはないのだ。立ち泳ぎをしながら、黙兵衛が脇差を引き抜いた。逆手に持ったそれを舟板の上のほうに突き刺す。

どん、とかなりの音がしたが、酔っ払ったような声や女の声は相変わらずきこえてくる。祭りのようなさんざめく雰囲気にまったく変わりはない。

黙兵衛は、そう簡単には脇差が抜けないのを確認している。脇差を右手でつかむや、腕の力で一気に体を持ちあげた。右足を脇差の峰に置き、上へ腕をのばす。

船縁には届かない。脇差に乗せたかかとを思いきりあげた。体はのびきり、さらに腕がのびてゆく。

だが、まだ届かない。

伊之助は水のなかでのびをし、脇差の柄を押しあげるようにした。

黙兵衛の指が船縁にかかったようだ。やもりのように体を持ちあげてゆく。

やがて、黙兵衛の体は向こう側に消えた。

伊之助としては、脇差をつかんでいる限り溺れはしないが、さすがに心許ない。もし脇差が抜けたら、水中に沈んでゆくしかない。

ぽとん、となにかが顔を打った。綱だった。上に黙兵衛の顔が見える。伊之助はあわててつかんだ。

黙兵衛がなにかを指さしている。脇差だった。持ってこい、といっていた。

伊之助は苦労して脇差を抜き、それから上に引きあげてもらった。

舟板に足が着いたときは、この上なくありがたかった。はあはあ、と荒く息をする。

黙兵衛は脇差を受け取り、水気をていねいに取ってから鞘におさめた。

黙兵衛が屋形のところに進みはじめた。伊之助は息をひそめてあとをついていった。

小窓があり、そこから黙兵衛がなかをのぞきこんだ。伊之助も黙兵衛の肩越しに見た。

恰幅のいい男が、しつらえられた座敷の上に座っている。脇息が向こう側にあるようで、体をやや倒し気味にしていた。

あれが豊広だろうか。杯を手にしている。赤い顔で、明らかに酔っていた。

「うるさい男がいないからの、皆の者、今のうちに騒いでおけ」

やや甲高い声でいった。

うるさい男。横山佐十郎のことしか考えられない。やつは主君にうとまれているのだ。必

死に命を守ろうとしているのに哀れだった。

まわりには腰元も多い。あとは小姓たち。そばに屈強そうな侍が四人いる。選び抜かれた手練だろう。

豊広はいかにも楽しくてならない様子だ。立て続けに杯をあおっている。

音無の旦那はどうするのだろう、と伊之助は考えた。座敷に斬りこむのだろうか。

だが、まだ刀は抜いていない。

もう花火はあがっていない。三発ほどあがっただけだったが、花火は高価ときくから、きっといつもこんなものなのだろう。

やがて豊広がふらりと立ちあがった。座敷を出てゆく。

豊広のあとを四人の侍がついてゆく。豊広はうるさそうにしているようだが、なにもいわない。

豊広は艫のほうに歩いてゆく。右手にある小さな箱のような建物に近づいていった。

厠のようだ。

ここにいろ。仕草で伊之助に命じてから、黙兵衛が姿勢を低くして早足で進む。

厠に豊広が入った。扉が閉められる。入口を四人が守っていた。

まさに風のようだった。夜陰に巧妙に紛れこんだ黙兵衛はあっという間に四人を倒した。

どうやら脇差の鞘をつかったようだ。

四人はなんの抵抗もすることなく、まるでこんにゃくのように横たわった。気絶している。

黙兵衛が扉に手をかける。あかないようだ。蹴破った。ばん、という音を立てて扉が奥に向かって倒れた。

床に行灯が灯されているようで、外にかすかな光が漏れている。

「佐十郎っ」

さっききいた、やや甲高い声が伊之助の耳に届く。悲痛な叫びだ。

「佐十郎っ」

もう一度きこえたが、今度は途中で声が途切れた。

その後はなにも耳に届かなかったが、なにが起きているのか、伊之助には想像がついた。

少し気分が悪くなった。

異変を察した腰元や小姓たちが近くに寄ってきた。

首桶を手にした黙兵衛が厠を出てきた。きゃあ、という悲鳴をあげて、腰元たちがあとずさる。小姓たちがぎくりとする。

あのなかに首が入っているのだ。さすがに黙兵衛も蒼白な顔をしているようだ。

黙兵衛は腰元や小姓たちをにらみつけると、伊之助のほうへ歩み寄ってきた。

七

夜空にいきなり花が咲いた。

なんだ、あれは。

佐十郎は見あげて、考えた。こんな刻限に花火をあげることができる者は、領内に一人しかいない。

しかしどうして。まさか。いや、そうにちがいない。豊広は船遊びに出たのだ。今の花火を浪人も目にしただろう。やつは屋形船に向かうはずだ。

「急げっ」

佐十郎は船頭を怒鳴った。

「死ぬ気で漕げ。さもなくば、殺すぞ」

は、はい。船頭は必死の形相で櫓を激しく動かしはじめた。後続の舟はさらに遠くになった。

花火は、それからあと二発あがったきりだった。その後、あがらないのが佐十郎は気になった。

それが豊広が殺られたせいなのか、ただもう花火がなくなったにすぎないのか。

豊広がいつもあげる花火はせいぜい二、三発だ。花火が切れた、と佐十郎は願うしかなかった。

やがて舟は利根川から逆川に入り、城の方向へ進んだ。

屋形船がどんどん近づいてくる。佐十郎は舳で立ちあがった。

かすかに腰元らしい女たちの嬌声がきこえてきた。

ということは、と佐十郎はほっとした。殿は生きておられる。

だが、すぐに愕然とすることになった。嬌声などではなく、悲鳴であることに気づいたのだ。

殺られたのか。

どうしようもない焦りの気持ちが、胸の奥底からわきあがってくる。

「急げっ」

船頭は息も絶え絶えで顔は汗びっしょりだが、それでも櫓を握る手をゆるめようとはしない。

「船首にまわれ」

佐十郎は船頭に指示した。

「二本の棹が突いてあるはずだ。そこに寄せろ」

船頭に操られて、舟は正確に棹に近づいていった。

「よし、いいぞ」

佐十郎は手を伸ばし、川底に突き立ててある棹をつかんだ。船縁のところで綱が巻かれ、屋形船が動かないようにとめてあるのだ。

佐十郎は両手両足でぶら下がるようにして、棹をあがった。

焦りはあるが、ここで落ちたらまた最初からはじめなければならない。慎重に棹を伝ってゆく。

頭のすぐそばに船縁が近づいてきた。左手で棹を持ち、右手をのばす。右手が船縁に触れる。

棹を放し、飛ぶようにして佐十郎は屋形船の上におり立った。

殿はどこにおわす。やつはどこだ。

船上を捜した。

屋形船は腰元たちの悲鳴で大騒ぎになっていた。腰元たちはどうすべきかわからず、船上で右往左往している。

やはり殺られたのだ。

佐十郎はそうさとった。守りきれなかった。負けた。力が抜けそうになる。

いや、ここでへこたれてたまるか。あの浪人を討たなければ。

暗い船上で何名かの腰元は、厠の近くに寄り集まって号泣していた。そのなかには豊広気に入りの側室である田奈もいた。

厠の扉がひらいている。二本の足が外にはみだしていた。

なにが起きたのか、佐十郎は理解した。

力がうまく入らない膝を励ますようにして、厠に近寄る。

思わず顔をしかめた。

首なしの死骸がうつぶせにされていた。

さすがに声が出なかった。怒りがわいてきた。どうして殺されなければならぬのか。

憤怒の思いが顔から噴き出そうだった。ぎりと唇を噛む。血の味がしてきた。

だが豊広を亡骸にされてしまった今、血気にはやっても仕方がない。佐十郎は腹に力をこめ、無理に冷静になった。

「やつはどこに行った」

少しは落ち着いているように見えた腰元の一人にきいた。だがいきなり泣きだし、なにもいえそうになかった。

ふと、佐十郎は気配を感じた。いや、気配というより殺気だった。

なんだ、これは。

殺気を感じたほうに目をやる。

信じられなかった。思わず息を飲んだ。

あの浪人がいた。そこは、舳近くの船の幅がややせまくなりつつあるところだ。刀は抜いていないが、鯉口は切っている。

すぐうしろに首桶を担いだ若い男がいて、不安そうにこちらを見つめていた。

「待っていたのか」

佐十郎は足を踏みだしつつ、浪人に語りかけた。

「どうしてだ。――そうか、俺も殺すようにいわれているのだな」

闇のなか、浪人の目には武人としての光が色濃く宿っているように見えた。

殺すように命じられたからというより、一対一で横山佐十郎とやり合ってみたい――そん

な瞳の色をしている。

その気持ちは佐十郎にもわかった。自分もこの浪人に対して、同じ気持ちを抱いているからだ。理屈では決して説明できない。

ふつうなら、やつが船上で待っていることはあり得ない。とっとと首とともに逃げればいいことだ。

流れに飛びこむなりして岸に向かったにしても、佐十郎が追いつくことはできなかったはずだ。

やつのほうから戦いを挑んできた。

それは、やつと勝負したいという気持ちを除いても、佐十郎にとって望むところだった。豊広の命を守るという仕事にしくじり、もはや生きていられない。

殿を死なせておいておめおめと生き残りおって。

嘲(あざけ)りのなかで、生きているつもりなどなかった。

あの世への道連れが目の前の浪人であるなら、不足はない。

伊之助は胸がどきどきしてきた。

どうして黙兵衛がこの屋形船から離れようとしないのか、不思議でならなかったが、その謎が今解けた。

黙兵衛は横山佐十郎と戦うためにとどまっていたのだ。

その気持ちは、どうやら横山佐十郎にも通じたようだ。佐十郎の瞳が閃光でも走ったかのようにきらめいたのが、その証だった。

伊之助自身は怖くてならない。もし万が一、黙兵衛が倒されたら、自分も殺されるだろう。そんなことを思ったら、足ががくがくしてきた。腰にも震えがきた。逃げだしたい。逃げだしたくてならない。

黙兵衛も、逃げていい、と思っているのだろう。だから首桶を預けてきたのだ。勝負に邪魔だから、という理由だけではあるまい。

いや、ここは負けてなるものか。伊之助は体に力を入れ直した。自分との戦いでもあるのだ。

この勝負は見届けなければならない。音無の旦那が負けるはずがないのだ。

きっと旦那は勝ってくれる。いや、まちがいなく勝つ。

八

広いとはいえない船上で、抜刀した二人は向かい合った。二人とも、刀を正眼に構えた。

伊之助は息をするのを忘れたかのように身じろぎ一つできない。ただ、立ちすくんだように見守ることしかできなかった。

二人の距離はおよそ二間。二人のあいだの空にちょうど満月があり、雲の切れ間から淡い

光を投げかけていた。

二人は足場を踏みかためたように動かない。剣尖を向け合い、視線をぶつけ合っている。

伊之助はごくりと息を飲んだ。

まるでそれが合図になったかのように、佐十郎がだんと舟板を蹴った。

一気に黙兵衛に走り寄る。刀が袈裟に振りおろされた。

伊之助は目を閉じかけたが、がきん、という鋭い音にあわてて見ひらいた。

黙兵衛は見事に打ち返していた。火花が夜のなかにぱっと散る。

今度は逆袈裟に刀が振られた。これも黙兵衛は弾いた。佐十郎の刀が横に流れる。

黙兵衛は一歩踏みだし、胴を狙った。それをあっさりと払い、佐十郎がまた袈裟に刀を振るってきた。

黙兵衛はそれを受けとめ、力まかせに佐十郎をうしろへ押しやった。

佐十郎の体が、黙兵衛の強力の前にやや崩れる。黙兵衛は上段から刀を落としていった。

佐十郎が両断される。ここでも伊之助は見ていられず、目をつむった。

きん、という音がし、佐十郎が弾き返したのを知った。

目をあけると、佐十郎が攻勢に出ていた。逆胴に刀を振っていたのだ。黙兵衛はびしりと打ち払い、すばやい足さばきで佐十郎の懐に飛びこもうとした。

それを許さず佐十郎は距離を取った。だが、それは黙兵衛を呼びこむ結果になった。

黙兵衛の足は鋭さを増し、黙兵衛は佐十郎の横を刀を振りざま駆け抜けた。

着物のどこかをかすったかもしれないが、佐十郎は平然としている。

いや、かすってもいないようだ。着物にはどこも切れているところがない。

黙兵衛はすばやく振り返り、今は佐十郎に刀を向けている。

今度は自分の番だ、といわんばかりに、佐十郎が猛然と突っこんでいった。

袈裟に刀が落とされる。目にもとまらぬはやさで、黙兵衛が顔から血を噴きださせて倒れるという光景が脳裏に浮かび、伊之助はまた目を閉じそうになった。必死に我慢して、目をひらいていた。

黙兵衛の刀がまるで生き物のようにしなやかに動き、佐十郎の刀に絡みついた。

がっちりと受けとめた黙兵衛は、一呼吸置いたあと両腕をぐいと手前に引くようにした。

あれは、と伊之助は思った。話にきいたことがあるが、相手の刀を巻きあげるようにして奪う刀法なのではないか。

佐十郎は刀を持っていかれそうになったが、体をひねることでなんとかこらえた。黙兵衛の刀は、獲物をばらした釣り竿のようにすっと上にあがった。

刀を手に残した佐十郎がまたも突進してきた。間合に入るや、刀を今度はすくうように下段から振りあげた。

うしろに下がることで黙兵衛は避け、袈裟斬りを見舞った。

かすかな体の動きだけでよけてみせた佐十郎は、さらに胴を狙ってきた。

これを黙兵衛は間合を完璧に見切ってかわし、再び袈裟に刀を落とそうとした。

だが、その前に佐十郎の逆胴がやってきていた。黙兵衛はびしりと刀ではたいた。
それだけでは佐十郎の勢いはとまらず、さらに上段からの打ちおろしがやってきた。
黙兵衛が受けとめようとしたが、刀は胴へ変化し、脇腹に迫った。
黙兵衛は落ち着いて刀を動かし、打ち返した。鉄の打ち合う、ぎん、という音が響き、火花が散った。鉄がこげるにおいを伊之助は嗅いだ。
その火花が消えないうちに佐十郎が逆胴へ刀を振った。これも黙兵衛は打ち払った。
今度は突き。黙兵衛は首をそむけ、体をひねって避けた。
黙兵衛の脇の下をかすめるように抜けていった刀は、すぐに反転し、黙兵衛の首を刎ねるような動きをした。
黙兵衛は体をかがめてこれをかわしたが、佐十郎の刀はその動きを知っていたかのように黙兵衛の頭上に落ちてゆく。
黙兵衛は横に跳んだ。刀は舟板を叩くことなくさらに黙兵衛を追った。
黙兵衛は背をそらして刀をやりすごしたが、伊之助から見ても体勢を崩されていた。
刀をいったん手元に引き寄せた佐十郎は、ほとんど間を置くことなく刀を袈裟に振りおろした。
旦那っ。伊之助は心のなかで悲鳴をあげた。危なくて見ていられなかった。若い娘のように手で目を覆い、しゃがみこみたいくらいだった。
黙兵衛は袈裟斬りを弾きあげ、胴に振ったが、佐十郎は軽々とそれをよけ、またも突きを

繰りだした。
矢のようにはやい突きで、鷹が獲物の喉笛に食らいつくように見えた。
黙兵衛は刀を盾のようにあげざま、首をひねることで佐十郎の刀の向きを変えた。かつん、という軽い音とともに突きだされた刀は黙兵衛の首の横を抜けていった。
佐十郎の刀はまたも鋭く動いて、黙兵衛の顔を狙った。
黙兵衛は立てた刀で払ったが、佐十郎の刀はすでに胴に向かって放たれていた。
牙をむいた獰猛な獣が脇腹に食らいつく。そんな思いにとらわれた伊之助は、危ないっ、と叫んだような気がしたが、実際に声は出ていなかった。
黙兵衛はうしろに跳びすさることでかわしたが、佐十郎も跳ぶようにして間合をつめ、再び刀を上段から浴びせた。
黙兵衛はよけながら佐十郎の胴を斬ろうとしたが、佐十郎は黙兵衛の斬撃をものともせず逆に胴へ刀を持っていった。
お互いの体が交わったように見えた瞬間、がきん、と激しく刀が鳴り合った。
二人は次の斬撃を用心したようにさっとうしろに下がったが、黙兵衛の懐を狙った佐十郎が体を丸めて突っこんだ。まるで縄で引かれたかのような鋭い出足だ。
またも突きだ。深々と腹を突き破るだけの威力を秘めたものだったが、黙兵衛は刀で払いのけた。
それが、かろうじて、という感じがして、伊之助の心の臓はきゅんと縮んだ。

佐十郎はまたも刀を横に振った。黙兵衛の肩のあたりを打とうとしている。
黙兵衛は体をひねってそれをかわし、刀を下から振りあげた。佐十郎は見切ったようにそれを避け、またも刀を打ち落としてきた。
佐十郎の剣技はすごかった。斬撃のはやさはおそらく黙兵衛を上まわっていると素人目にも見えたし、それよりもなによりも疲れを知らない。
あれだけ攻勢に出続けていれば、疲労が湿った雪のように重く積もるはず、というのは伊之助にもわかる。
だが、佐十郎は疲れなど微塵も見せない。ひたすら刀を振り続けている。
あれだけの力を体につけるのに、いったいどれだけの鍛練を積んだのか。
むろん、豊広を殺された怒り、というものがこれだけの動きを生みだしている大本なのだろうが、佐十郎が身につけた底力というものはすさまじい。
こんな化け物のような男に、音無の旦那は勝てるのだろうか。
勝てる。旦那ならそうに決まっている。旦那も佐十郎に負けない鍛練を積んできたに決まっているのだ。
きん、とまた音がした。打ち合わされた二本の刀がすぐに離れた。佐十郎が刀を振りかぶる。黙兵衛が下がる。
佐十郎が大きく踏みだした。勝ち誇った顔をしているように、伊之助には見えた。

勝てるぞ。佐十郎は確信を持った。
この前、この同じ舞台でさんざんに動きまわられたのは、はじめての真剣での戦い、というのがやはり大きかったのだ。
あれを経た今、俺に怖いものなどない。真剣での戦い方をすでに自らのものにしている。
佐十郎は、将軍の御前試合をふと思いだした。あのときはあまりの実力差に、戦う前から結果はわかっていた。
いつでも打ち倒せるという自信があった。それまでは遊んでいたも同然だった。
豊広の、行け、という声を合図にあの笹田八之丞という男を叩きのめした。あのときの膝と肩を打ち据えた感触。今もはっきりと覚えている。
行けか、と佐十郎は思った。あまりにうるさくいったせいで、最近ではうとまれていたが、死んでしまった今、どうしようもなくあの声がなつかしかった。
もし今、同じように、行け、といってくれたら、目の前の浪人をあっという間に斬り殺してやるのに。
佐十郎はあらためて目の前の男を見つめた。
今は少し息をつかせてやっているが、あれだけの連続技を浴びせられたのははじめてだろう。
もっとも、と佐十郎はかすかに眉をひそめて思った。すべて受けられ、かわされたというのもはじめてだった。

よし、行くか。

佐十郎は、再び力が満ちはじめているのを知った。泉からわき出たばかりの新鮮な水が、体に注ぎこまれているような気分だ。

鍛錬が生きている。あまりの厳しさに投げだしたくなるほどのつらさだったが、これまで続けてきてよかったということだろう。

佐十郎は浪人の呼吸をじっと見た。肩で息をしている。

舟板を蹴り、佐十郎は怪鳥のごとく跳んだ。あっという間に浪人の体が迫る。自分でも信じられないほどのはやさだ。

浪人の肩に隙が見えている。つくられたものかもしれなかったが、かまわなかった。つけこむだけだ。

それに、今のやつの疲れぶりなら、返しの技が放たれたとしてもさして怖くはない。

佐十郎が狙ったのはまたも突きだった。師匠直伝のもので、まず大技の突きから入り、つけいる隙を与えない連続技で相手の体勢を一気に崩しさり、とどめを刺す、というものだ。

浪人は佐十郎の刀を上に弾いた。それが浪人の頭上でひらりと蝶のように舞い、袈裟斬りに変化する。

浪人はこれも打ち返したが、脇の下に大きな穴ができた。

佐十郎はそこへ刀を振りおろした。浪人は体をひるがえすような動きでかわしきった。

浪人のこの見切る力というのはかなり厄介だ。これだけの眼を持つ者は、これまで一人たりともいなかった。

佐十郎は、浪人のうしろ頭に刀を打ち落とした。これもぎりぎりで弾かれた。

浪人がこちらに向き直る。その瞬間を狙って、佐十郎は突きを繰りだした。

浪人は避け、刀を振りだそうとした。佐十郎には浪人のその動き自体が隙に見えた。

浪人の刀を封ずるように体を寄せ、すれちがいざま胴に刀を見舞った。

これも浪人はかわした。すっと動いて距離を取ろうとする。

佐十郎はそうはさせじと突っこんだ。浪人の逆胴を狙って、刀を振り抜く。

だが、それも空を切った。どうもいやな感じだった。慣れられたか。

佐十郎は鬢から頬に伝ってきた汗が気になった。しかしぬぐっているいとまなどない。

いや、慣れられたなどそんなことはない。それが証拠に、浪人は相変わらず肩で息をしているではないか。

そう自らにいいきかせて、佐十郎は再び舟板を蹴って跳んだ。

浪人はまたも距離を取ろうとする。それがずいぶん弱気に感じられた。

この男は俺に突っこまれるのをいやがっている。ならば、とことんそうしてやるまでだ。

佐十郎はさらに突進を続けた。浪人がせまい船上を動きまわり、距離を取り続ける。

逃がすものか。佐十郎は舌なめずりする思いだった。

もうじき、この男を倒せる。いったいどれほどの喜びがあるのだろうか。

佐十郎が追い続け、黙兵衛はうしろに下がって刃を逃れようとしている。
どうしたんだ、と伊之助ははらはらして思った。どうして旦那は逃げまわってばかりいるんだ。
さっきから押されっぱなしだ。どうしたのか。逃げてばかりでは勝つなんて決してできないのに。
だが逃げ続けるというのも、ついに最後の場面が訪れたようだ。船は広いが、佐十郎が徐々に黙兵衛を船首のほうへ追いつめているのだ。
船首のところはくびれたようになっており、かなりせまい。そこに追いつめられたら、黙兵衛に逃げ場はない。
そして実際にそうなった。
黙兵衛は逃げ場をなくした。うしろに下がるとしたら、逆川に落ちるしかない。
佐十郎がにやりと笑った。自信満々の笑み。これで殺れると確信したのだ。
あとはいつ殺すか、とときをはかっているだけのようだ。
おいらにできることはないか。伊之助は必死に考えた。
だが、できることなどあるはずもなかった。ここで突っこんだところで、勝負に影響を与えられるとは思えない。
いや、一か八かやってみるか。伊之助は、うしろから佐十郎の腰のあたりに組みつくつもりになった。

よし、やるぞ、と思った瞬間だった。佐十郎が動いた。
突きが繰りだされる。黙兵衛はきん、とはねあげた。佐十郎の刀が上から落とされた。
黙兵衛は弾き返すことはせず、がっちり受けとめた。
当然、佐十郎は刀を引いてさらなる攻勢に出るものと思えたが、そうはしなかった。
鍔迫り合いになったのだ。いや、佐十郎のほうは必死に刀を引こうとしているように見えた。しかし、まるで鳥もちでも絡められたように黙兵衛の刀から離れようとしない。
佐十郎の顔には、驚愕と狼狽が刻まれていた。
いったいどうしたのか、と伊之助は思った。そういう剣法なのか。
だが、相手の刀をひっつけるなどいう剣法があるのか。刀を巻きあげる刀法をさらに工夫を加えたものではないか、そんな気がした。
しかし、この刀法がどんな役に立つのか。伊之助としては、固唾を呑んで見守るしかなかった。
佐十郎が歯を食いしばっている。ぐっと力をこめ、ようやく刀を手元に引き寄せた。ただ、黙兵衛の刀が一緒にひっついていったのは、伊之助には意外だった。
旦那は丸腰じゃないか。
もうそのときには黙兵衛は動いていた。うしろに下がった佐十郎の懐に踊るように飛びこんでいったのだ。
なにかが月光に鈍くきらめいた。はっとして伊之助が見ると、脇差だった。

脇差が佐十郎の腹に突き立てられる。そう見えたが、佐十郎もさすがだった。体を思いきりひねったのだ。

そのために脇差は脇腹をかすめたのみだった。だが、ぐっ、と佐十郎が息がつまったような声をあげた。

佐十郎の腕を離れた刀が音を立てて舟板に落ちる。二本の刀がもつれるようにして転がった。

さらに黙兵衛が脇差を振るおうとした。それを避けて佐十郎があとずさる。よろよろとした体の動きだ。

脇腹から血が流れだしている。伊之助が感じた以上に重い傷のようだ。

黙兵衛が逃がさんという気迫を乗せて、脇差を振るった。

顔面を割ったように見えたが、その前に佐十郎は船縁を越えていた。どぼん、という水音。

黙兵衛が船縁に駆け寄り、下を見た。伊之助も駆けつけ、暗い水面を見つめた。

なにも見えなかった。ただ、穏やかな水面に、大きな波紋が広がってゆくのがわかっただけだ。

あの傷では、と伊之助は思った。まず助かるまい。

そっと顔をあげ、黙兵衛を見た。

黙兵衛の息はさすがに荒い。体全体で息をしている。脇差を握ったままなのに気づく。これ以上持っているのもつらい、というように鞘におさめた。

黙兵衛の腕がひどく震えているのに、伊之助は気づいた。筋という筋がこわばりきっている。

黙兵衛が大きく息をつき、空を見あげる。

伊之助もつられた。

いつからか空から雲が取れ、ぽっかりとまん丸の月が浮かんでいた。月のまわりには、金や銀、銅の粒をばらまいたような星たちが一杯に輝いている。

黙兵衛が舟板の上に転がっている刀を拾う。鞘にしまう。ちゃっ、と小気味いい音がした。

「大丈夫ですかい」

伊之助はようやく口にだせた。

「怪我はないですかい」

黙兵衛が今気づいたとでもいうように、体の至るところに目をやりはじめた。

やがて、大丈夫だ、というようにうなずいた。それから笑顔を見せてくれた。

はじめて笑ってくれた。

伊之助は感動した。しみ入るような笑みで、いつまでもその笑顔を見ていたかった。

九

「伊之助さん、音無の旦那にお客さんです」

台所仕事を主にしている勢次が、伊之助の部屋にやってきたのは、黙兵衛が久世豊広の首を取った翌々日の昼のことだった。

伊之助は疲れが抜けた気がせず、昼餉もとらずに昼寝をしていた。

いや、実際には寝ていなかった。久世家の討っ手が今にもやってくるのでは、という怖れをはねのけることができないのだ。それに、あの厠からはみだしていた足。夜もうなされている。

「どなただい」

できるだけ平静な声できく。

「井上収二郎さまです」

「ああ、井上さまからの使いだね」

「いえ、ご本人が見えています」

「本当かい」

伊之助はあわてて黙兵衛のもとに行き、収二郎が待つ庭に一緒に行った。

「二人ともご苦労だった」

収二郎は暗い顔をしている。言葉も弾んでいなかった。立ち姿にも元気がない。

どうしたのだろう、と伊之助はいぶかった。

「音無どの、それがしとともにそこの河原に来てくれぬか」

「どのような用件です」

伊之助は代わりにきいた。もっとも、黙兵衛はすでに察しがついている表情だ。

「あっしも一緒に行っても、いいですか」

収二郎が首を振る。

「二人きりにしてくれ」

「そうですかい」

黙兵衛を見た。黙兵衛はすでに沓脱ぎの草履を履きだしている。

伊之助は、格子戸を出てゆく二人を見送った。

いや、こうしてはいられない。あわてて草履を履き、距離を置いて二人のあとをついていった。

着いたのは、渡良瀬川の河原だ。横山佐十郎の目を引きつけるための小屋が建つ、すぐ近くだった。

伊之助は二人に気取られないように、葦原づたいに慎重に近づいていった。

もっとも、黙兵衛の目を逃れられたとは思っていない。

河原は風が強かった。

伊之助は風下にいた。強い風に乗って、収二郎が黙兵衛に語りかける声がかすかだが、届いてきた。

「まさか本気とは思わなかった、だとさ」

収二郎が自嘲気味に語る。

「今さらどうしてそのようなことを、とわしは思ったが、主君の言葉ではどうしようもない。首を取った者を殺せ、と命じられたよ。ことが露見したら、我が家は取り潰しだと」

ことの意外な成りゆきに、伊之助は呆けたようにただ口をあいていた。

「というわけでな、それがしはおぬしを討ちにまいった。すまぬ」

頭を下げた収二郎がきりきりと襷がけをする。黙兵衛はいつものようになにもいわない。

「それがしが負けたら――」

収二郎が覚悟を決めた口調でいった。

「頼むから、殿を殺さんでくれ」

哀願に近いものだ。

それに対して、やはり黙兵衛の答えはない。

「もともとそれがしの過ちだった。久世公殺しをそそのかすなどな。そういう言葉がおのれに返ってくるのは当たり前のことだ。自業自得というやつだな」

自嘲気味の笑みを浮かべた収二郎が刀を抜いた。それなりにさまになっているようだが、腕のちがいは伊之助から見ても明らかだ。

死ぬつもりなんだな、と思った。というより、黙兵衛に斬られたいのだろう。

侍というのはつらいものなんだな、と伊之助は涙が出そうだった。そして、とても残酷なものだった。

侍になりたい、という気持ちは、瀬戸物が砕けたように消え失せている。

黙兵衛がどこかの家中に仕えていたとして、それをやめたのも、こういうつらさがあったからかもしれない。

ああ、そうか、と伊之助は気づいた。旦那が言葉を話すのをやめたのも、なにかそういうことがあったからかもしれない。

「大名の首を取ることで立身を望むなど、この太平の世では決してしてはならぬことだったのだな」

収二郎が笑みを見せる。

「だが、おぬしたちのおかげでいい夢を見させてもらった。この夢のけじめは自らの手でつけねばならんのだろう」

黙兵衛が刀を抜いた。どう見ても、井上収二郎を殺したがってはいない。

だが、黙兵衛を殺すことなくおめおめと利直の前に収二郎が帰れるはずがないのも解している。

ここは殺してやるしかないのだ。黙兵衛のつらさも伊之助には伝わってきた。

二人が刀を向け合ったのは、一瞬でしかなかった。

やあ、と口から気合をほとばしらせ、収二郎が刀を上段に構えて突っこんでいった。

日の光を受けて、黙兵衛の刀がきらめく。

それだけだった。伊之助が気づかないうちに、収二郎は葦の上に突っ伏していた。もはや身動き一つしない。

葦に隠れて見えないが、収二郎の横顔が伊之助には見えるような気がした。きっと満足した表情をしているのではないか。

主君に翻弄されたとはいうものの、やるだけのことはやったという満足した思いがあるにちがいない。

井上収二郎は生まれた時代をまちがえたのだ。

黙兵衛が懐紙で刀をふいた。きれいになったのを確かめてから、鞘におさめる。

歩きだした。風に吹かれるような歩き方だ。

このまま古河を去ってしまうのでは、という怖れを伊之助は抱いた。

黙兵衛に駆け寄る。

「家にお戻りにならないんですかい」

黙兵衛が立ちどまり、振り向く。

なにかいってくれるのでは、という期待があったが、やはりなにもいってはくれなかった。

「一緒に連れていってください」

伊之助は土下座した。

郡兵衛が心配するぞ。そんな声がきこえた。

「とっつあんは許してくれると思います」

伊之助は腕を取られた。

黙兵衛が立ちあがらせてくれたのだ。じっと伊之助を見る。

江戸、という言葉が脳裏に浮かんだ。

「江戸に行かれるんですかい」

江戸は好きか。

「いえ、一度も行ったことないんで」

そうか。

くるりときびすを返した黙兵衛が歩きだす。

「あ、待ってください」

伊之助はあわててあとを追った。

それでも一度足をとめた。とめざるを得なかった。渡良瀬川の流れをじっと眺める。

もう二度と見ることがないかもしれない。そう思ったら、涙がとめどもなくあふれてきた。

気づくと、黙兵衛の姿がどんどん遠ざかってゆく。

涙をぬぐって伊之助は走りだした。

中公文庫

無言殺剣 大名討ち

むごんさつけん だいみょううち

定価はカバーに表示してあります。

2005年11月25日　初版発行

著　者　鈴木 英治（すずき えいじ）

発行者　早川 準一

発行所　中央公論新社　〒104-8320 東京都中央区京橋 2-8-7

TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3692(編集部)

©2005 Eiji SUZUKI

Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
URL http://www.chuko.co.jp/

本文・カバー印刷 三晃印刷　製本 小泉製本
ISBN4-12-204613-0　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

本書は書き下ろしです。

中公文庫既刊より

す-25-1
手習重兵衛 闇討ち斬
鈴木 英治
手習師匠に命を救われた重兵衛。ある日、師匠が何者かによって殺害されてしまう。仇を討つべく立ち上がった彼だったが……。江戸剣豪ミステリー。
ISBN4-12 204284-4

す-25-2
手習重兵衛 梵 鐘
鈴木 英治
手習子のお美代が行方不明に。もしやかどわかされたのでは⁉必死に捜索する重兵衛だったが……。書き下ろし剣豪ミステリー。シリーズ第二弾！
ISBN4-12 204311-5

す-25-3
手習重兵衛 暁 闇
鈴木 英治
兄の仇を討つべく江戸に現れた若き天才剣士・松山輔之進。狙うは、興津重兵衛ただ一人。迫り来る危機に重兵衛の運命はいかに⁉ シリーズ第三弾！
ISBN4-12 204336-0

す-25-4
手習重兵衛 刃舞（やいば まい）
鈴木 英治
手習師匠の興津重兵衛は、弟を殺害した遠藤恒之助を討つため厳しい鍛錬を始めた。ようやく秘剣を得た重兵衛の前に遠藤が現れる。闘いの刻は遂に満ちた。
ISBN4-12 204418-9

す-25-5
手習重兵衛 道中霧
鈴木 英治
自らの過去を清算すべく、郷里・諏訪へと発った興津重兵衛。その行く手には、弟の仇でもある遠藤恒之助と謎の忍び集団の罠が待ち構えていた。書き下ろし。
ISBN4-12 204497-9

す-25-6
手習重兵衛 天狗変
鈴木 英治
家督放棄を決意して諏訪に戻った重兵衛だが、身辺には不穏な影がつきまとう。その背後には諏訪家取り潰しを画策する陰謀が渦巻いていた。〈解説〉森村誠一
ISBN4-12 204512-6

す-25-7
角右衛門の恋
鈴木 英治
仇を追いつづけること七年。小間物屋の娘・お梅との出会いが角右衛門の無為の日々を打ち破った。江戸に横行する辻斬りが二人の恋の行方を弄ぶ。書き下ろし。
ISBN4-12 204580-0

い-8-3
又五郎の春秋
池波正太郎
芸歴六十年、現代歌舞伎界屈指の名優である中村又五郎の芸と、次代の教育に熱中する今日までの人生を語った興趣あふれる異色作。〈解説〉千谷道雄
ISBN4-12 200660-0

い-8-4
獅 子
池波正太郎
九十歳をこえてなお「信濃の獅子」と謳われた真田信之が、松代十万石の存亡を賭け、下馬将軍・酒井忠清に挑む、壮絶な隠密攻防戦。〈解説〉小谷正一
ISBN4-12 202288-6

い-8-5
真説・豊臣秀吉
池波正太郎他
近世日本を創った男、豊臣秀吉——。その天下制覇の秘密は、また現代にも通じる巧みな人心収攬術や太閤伝説の虚実など、秀吉の魅力を多方面から探る。
ISBN4-12 202581-8

き-29-1
江戸風狂伝
北原亞以子
平賀源内、歌川国芳ら、お上ににらまれ、世に疎まれ、意地を貫く粋人たちの行状を情感豊かに描く名品七篇。女流文学賞受賞。〈解説〉高橋千劒破
ISBN4-12 203693-3

さ-28-1
討たれざるもの
澤田ふじ子
前藩主の寵愛する女に描き与えた絵をめぐり微禄藩士に襲いかかる非情の罠—時代の桎梏に生きる男女の哀歓を描く表題作ほか五篇。〈解説〉清原康正
ISBN4-12 201262-7

さ-28-7
虹の橋
澤田ふじ子
世間の荒波にもまれながら明日を信じてひたむきに生きる若者たちの姿を、人情と非人情が交錯する京を舞台に描いた青春時代長篇。〈解説〉縄田一男
ISBN4-12 202020-4

さ-28-9
もどり橋
澤田ふじ子
早朝の錦への買出し、修業中の大店の息子の陰険さ、下働きの娘のほのかな恋心…。京の料理茶屋に働く若い男女の哀歓を描く時代長篇。〈解説〉清原康正
ISBN4-12 203114-1

さ-28-10
遍照の海
澤田ふじ子
道ならぬ恋に走ったがために、不義密通の罪科を負い、生涯、四国巡礼をつづけなければならない、京の紙商の娘以茶の哀しい運命。〈解説〉清原康正
ISBN4-12 203241-5

き-28-13
奇妙な刺客
祇園社神灯事件簿
澤田ふじ子
灯籠の火の見廻りと社の警護を務めとする、祇園社の神灯目付役・植松頼助。得意の剣を振るい、京の町を騒がす奇妙で不思議な事件の数々を解決する。
ISBN4-12 203946-0

さ-28-14
空蟬（うつせみ）の花
池坊の異端児・大住院以信
澤田ふじ子
江戸初期、二代専好に学び池坊立花の逸材と評されながらも「異端」のレッテルを貼られ、血脈継承争いと権力介入の波に翻弄、破門された以信の生涯。
ISBN4-12 204108-2

さ-28-15
狐火の町
澤田ふじ子
京都で質屋を営む寺田屋宗信は、〝狐火の孫〟と異名をとった盗賊であった。過去を知る者が宗信を強請り、一人娘を誘拐した時、京の町に異変が……。
ISBN4-12 204167-8

さ-28-16
七福盗奇伝
澤田ふじ子
応仁・文明の乱後、盗賊が跋扈する不安定な世相。南朝唯一の皇胤・千手姫は、忠臣たちと共に七福神のお面で顔を覆い、悪徳商人、金貸しや北朝の役人どもに天誅を下す。
ISBN4-12 204255-0

さ-28-17
夜の腕
祇園社神灯事件簿二
澤田ふじ子
祇園社の楼門に二度にわたり矢を射った者の正体は？賽銭箱に二十二両もの大枚を投げ入れたのは誰？――洛中の難事件を解決する、植松頼助の情けある裁き。
ISBN4-12 204337-9

し-8-3
柴錬ひとりごと
柴田錬三郎
ご存じ「眠狂四郎」の生みの親、柴田錬三郎。円月殺方も斯くやという、何者にも頼ることのない生き方の滲む切れ味鋭いエッセイ集。〈選・解説〉縄田一男
ISBN4-12 204293-3

し-8-4
わが青春無頼帖
柴田錬三郎
ご存じ「眠狂四郎」の生みの親、柴田錬三郎。故郷出奔から、直木賞受賞までの無頼の日々を、女性遍歴、戦争体験などを中心に回想する柴錬の青春逸話録！
ISBN4-12 204506-1

し-15-10
新選組始末記
新選組三部作
子母澤寛
史実と巷談を現地踏査によって再構成した不朽の実録。新選組研究の古典として定評のある、子母澤寛作品の原点となった記念作。〈解説〉尾崎秀樹
ISBN4-12 202758-6

し-15-11
新選組遺聞
新選組三部作
子母澤寛
新選組三部作の第二作。永倉新八・八木為三郎・近藤勇五郎など、ゆかりの古老たちの生々しい見聞や日記で綴った、新選組逸聞集。〈解説〉尾崎秀樹
ISBN4-12 202782-9

し-15-12
新選組物語
新選組三部作
子母澤寛
「人斬り鍬次郎」「隊中美男五人衆」など隊士の実相を綴った表題作の他、近藤の最期を描いた「流山の朝」を収載。新選組三部作完結。〈解説〉尾崎秀樹
ISBN4-12 202795-0

た-58-1
意休ごろし
高橋義夫
「鬼平」亡きあと、二十三歳の与力妹川数馬を中心に、芸者お小夜など五人の異色チームが、江戸の市井の事件に立ち向った痛快捕物帳。〈解説〉渡辺保
ISBN4-12 203566-X

た-58-2
御隠居忍法
高橋義夫
間諜・伊賀者の子孫であり昌平坂学問所の秀才・鹿間狸斎が訪れた奥州の山村。そこには奇妙な事件が渦巻いていた。人気シリーズ開幕！〈解説〉大野由美子
ISBN4-12 203781-6

た-58-3
御隠居忍法 不老術
高橋義夫
伊賀者の子孫鹿間狸斎は奥州の隠居所に帰ったが、そこには新たな事件が待ち受けていた。神隠し、消えた死体、天領と小藩を巡る陰謀の行方は？
ISBN4-12 203911-8

た-58-4
御隠居忍法 鬼切丸
高橋義夫
奥州寒村の隠居所に暮らす伊賀者の子孫、元お庭番の鹿間狸斎を待ち受ける、次々と起こる難事件。狸斎のときすまされた気と技がこの世の悪を断つ！
ISBN4-12 204002-7

た-58-5
御隠居忍法 唐船番
高橋義夫
奥州寒村の隠居所に暮らす伊賀者の子孫、元お庭番の鹿間狸斎は、旧知の人物の生死を確認する密命を受けたことから「抜け荷」をめぐる騒動に巻き込まれ……。
ISBN4-12 204550-9

な-51-1
時代小説英雄列伝
鞍馬天狗
大佛次郎
縄田一男編
時代小説の一時代を画したヒーローたち。その魅力をたっぷりと味わうアンソロジー。気鋭の文芸評論家、縄田一男の選、解説による文庫編下し第一弾。
ISBN4-12 204085-X

な-51-2
時代小説 英雄列伝
銭形平次
野村 胡堂
縄田一男 編
時代小説の中でも「一、二」を争うヒーロー『銭形平次』の傑作短編を収録。縄田一男による編と映像化作品にまで及ぶ詳細な解説で、その魅力と江戸情緒を満喫。
ISBN4-12 204109-0

な-51-3
時代小説 英雄列伝
座頭市
子母澤寛
犬塚 稔／童門冬二
縄田一男 編
時代小説中出色の異色のヒーロー『座頭市』を原作、シナリオ、競作など、様々な角度から作品を収録。縄田一男による詳細な解説で、その魅力を満喫。
ISBN4-12 204122-8

な-51-4
時代小説 英雄列伝
若さま侍
城 昌幸
縄田一男 編
五大捕物帖の最後に控えし「若さま侍」は、姓名・身分一切不詳の名探偵。侍らしからぬ伝法口調で、ひとたび立てばどんな難事件もたちどころに解決！
ISBN4-12 204149-X

な-51-5
時代小説 英雄列伝
柳生十兵衛
五味 康祐
縄田一男 編
剣豪といえば柳生新陰流、そして柳生十兵衛。豪快なイメージと陰惨な影の同居する多面体のヒーローを剣豪作家五味康祐の筆が鮮かに描く。
ISBN4-12 204163-5

な-51-6
捕物帳の系譜
縄田 一男
半七・むっつり右門・銭形平次……。当代一の時代小説の読み手が「捕物帳」の誕生と変遷を時代との関わりの中に検証した大衆文学評論の画期的収穫！
ISBN4-12 204394-8

な-51-7
極め付き時代小説選1
約束
縄田一男 編
池波正太郎 他著
時代小説のロマンを詰め込んだ一冊。……たった一言の「約束」を果たすために、あえて過酷な道を選んだ男達。〈解説対談〉安部龍太郎×縄田一男。
ISBN4-12 204419-7

な-51-8
極め付き時代小説選2
恋模様
縄田一男 編
司馬遼太郎 他著
厳しい枷の中で、それでも愛を貫く男と女。昔の恋には味があった。時代小説ならではの恋の表情を味わい尽くす。〈解説対談〉宮部みゆき×縄田一男。
ISBN4-12 204431-6

な-51-9
極め付き時代小説選3
動物
縄田一男 編
杉本苑子 他著
人と共存し、また闘い。人は動物とともに生きてきた。愛しくもあり恐ろしくもあり。動物にまつわる異色時代小説十二編。〈解説対談〉火坂雅志×縄田一男。
ISBN4-12 204446-4